
考えろよ。

回収屋

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
考えるよ。

【Nコード】
N2973Z

【作者名】
回収屋

【あらすじ】

新薬開発のコンサルタントと軍用兵器の設計を専業とし、世界規模で展開する国営企業・『PFRS』パフリス。そこから逃亡した蒼神槐あがみ えんじゅは、PFRSが隠蔽するバイオハザードを告訴しようと試みるが、ヒットマンの強襲により失敗。彼は最後の手段として、調査会社のエージェントを伴ったの敵地潜入を画策するが、依頼を受けてやって来たのは何故か……明らかに拳動不審な二人組の少女だった。

『神の設計図』バイタルズと呼称される遺物をめぐり繰り広げられる、政府と軍部とPFRSの三つ巴。その中で葛藤する青年・蒼神と、彼を

取り巻く不確定要素達の攻防……+「ああゝゝ、やっぱり美青年の尻はええのう」「ダメよツ、オマワリさんが見てる!」

ネットに消えた学説と護衛される青年（前書き）

世界中で大ヒットしたアニメ映画「攻殻機動隊」などの監督、押井守さんが現在のアニメ作品について「オタクの消費財と化し表現の体をなしていない」と批判した。

ネットではこの発言に納得する人もいるのだが、自分達の好きなアニメを批判していると感じたアニメファンは「押井こそオワコン」などと押井さんに対する盛大な批判を展開している。

■ほとんどのアニメはオタクの消費財と化した

朝日新聞は2011年11月21日付けの電子版コラム「アニメゲ井」で、押井さんの東京芸術大学大学院映像研究科での講演（1月12日開催）を紹介した。講演で押井さんは

「僕の見る限り現在のアニメのほとんどはオタクの消費財と化し、コピーのコピーのコピーで『表現』の体をなしていない」

と語ったという。つまり、制作者には新たな創造性や、作品を通じて訴える思想的なものが欠如し、過去にヒットした作品の焼き直しばかり。例えば「萌え」が流行すればそうした作品ばかりになっている。また、今のアニメはオタクと呼ばれるファン層に媚びたものが多く、こうしたことから「表現」が制作者から無くなった、という批判だ。

確かに11年9月から始まった20本近い新作テレビアニメを見ると、さえない男性主人公の周りに美少女が群がる「ハーレムアニメ」が驚くほど多く、過去にヒットした「ハーレムアニメ」作品と共通する内容がかなり多い。

■宮崎駿監督も過去の作品のコピーに嘆いていた

実は、過去のヒット作品を真似たものが増えていることについては、以前から警鐘が鳴らされていた。宮崎駿監督はベルリン国際映画祭で「千と千尋の神隠し」が金熊賞グランプリを獲得した02年2月19日、記者会見を開き、記者から日本アニメの世界的な地位を質問されると、「日本アニメはどん底の状態」とし

「庵野が自分たちはコピー世代の最初と言っていたが、それより若いのはコピーのコピーだ。そうしたこと（アニメ業界が）どれだけ歪んでいて薄くなっているか」

などと答えている。庵野というのは大ヒットアニメ映画「新世紀エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督のことだ。

今回の押井さんの発言についてネットでは

「萌えクソアニメの乱発は誰が見ても異常」

「アニメ業界が飽和しすぎて、コピー品を粗製乱造しなきゃ回らなくなってる」

「売らなきゃ食っていけないからな。安定して売れるのがオタク向けの萌えやエロ」

などと納得する人もいるのだが、現在主流となっているアニメのファン達は、自分達の趣味趣向、好きなアニメを批判するのは許せない、と激しく反発。しかし理論で立ち向かえないからなのか

「押井のアニメくそつまんねーんだよ」

「押井も信者向けの消費財じゃん」

などといった作品批判や、人格批判へと発展し、大混乱となっている。

●この記事は、『小説家になろう』における作品の傾向にも該当します。“異世界”・“主人公最強”・“転生”・“ハーレム”・“チート”……オリジナルも二次創作もこの手のタグであふれかえっています。

アニメもラノベも観てもらってナンボ、読んでもらってナンボ。それは事実です。が、作品のファーストフード化に回収屋は食傷気味です。ちよつと考えてみましょう――アナタはより良い味を求めてハンバーガーや牛丼を食べに行きますか？ そう、まずあり得ません。ただ単純に安くて手っ取り早く、口当たりの良い刺激が欲しい場合の効率的な手段として選択されているのです。まさに『消費財』です。食べたその瞬間は確かにある一定の満足感が得られますが、店を出た直後には味の記憶など脳から消えます。作品も同様……どこかでよく目にするファクターに誘引され、その時は満足感が得られます。しかし、人から「で、どのシーンに一番感動した？」「ストーリーのあらすじを教えて」などと聞かれた際、どこまで答えられるでしょうか。正直、難しいでしょう。消費者は既に欲しかった刺激を消化し終え、また次の新しい安定した刺激を求めているのです。そこには作品を楽しんだという“記録”はあっても“記憶”はありません。

二次創作で一本完結させている回収屋が述べるのもなんですが、自分の作品構築のためにプラスとなるオリジナルに触れてみたい……常日頃から思っています。

二次創作にしか興味が無い読者様をガツツリと矯正させる意味でも、今回の作品を披露していきたいです。

ネットに消えた学説と護衛される青年

『惑星自壊説』——今世紀初頭、ネットのとある科学サイトに発表された学説。仮説の域を出ない突拍子もない理論であつたため、当時は一部のカルト的な支持者しかいなかった。38億年前、地球上に1個の隕石が落下。隕石に含まれていたアミノ酸を素に、原始生命が発生する。あらゆる気象条件下で化学反応を展開し、次々と新しい生命が創り出されていった。彼等は最初、ごく単純な遺伝情報しか有しておらず、他の生命を食らって取り込むことにより、複雑なDNAを構築し進化していった。地球という温床の中で、何億年もの間その行為は続き、新生しては滅びを繰り返す。それは自然の法則に完璧に則つた現象であり、地球はただじつとその永久不滅のサイクルを見守っていた。そこで……地球は思った。

『死』とは何だ？

惑星は巨大な一個体の生命であり、いわゆる『意志』を持つとされる。が、その意志はあまりに不完全で、死に対する不安や恐れを理解できていなかった。地球は自らの破壊力を行使し、5度も大絶滅を繰り返したが、どの手段も決定的なダメージを与えるには至らず、地球の意志は不完全なままだった。しかし、彼には時間があつた。あり過ぎた。だから永い時を経て考えた。

ダレかに殺してもらえばいい

最後にとられた手段こそが『人類』だった。現生人類は、およそ20万年前に一つの独立した種として出現した。殆どの生命体が自然環境のサークルに解け合えるのに対して、人類だけが進化の過程

でサークルから外れていった。異常なスピードで脳髓を発達させ、爆発的に増殖し、生態系のピラミッドを決定づけ始めた。海洋を汚し、大気を濁らせ、大地を腐らせ、他種を滅ぼしだした。このことから引き出された一つの結論……

<『人類』とは、地球が自らを滅ぼすために創り出した『生体兵器』である>

この学説を発表した科学者は、マスコミの前には一度も姿を見せず、ネット上のみでのゲリラ的活動を繰り返し、ひたすらこの学説の危険性を主張していた。このままでは近い将来、確実に地球の自壊は成功してしまう。地球は人類を作為的に進化させて、より優れた遺伝情報の所有者を生成している。20万年近くかけた計画が最終段階に入っている。名を明かさず、顔も見せず、ひたすらネットの中で声を上げるその科学者は、新興宗教の教祖の如き扱いを受けていた。この小さな騒動が、一般メディアにも取り上げられるようになった時分の1ヶ月ほど前……日ノ本の本土から遠く離れたところある海域にて、局所的な海底火山が発生。それにより生じた巨大な海底の亀裂から、正体不明の遺物が発見された。それは――『人型』。回収し検査した当時の国家調査室が出した回答……

<全長170センチ・重量80キロ。材質は不明。人間の造形に酷似しており、体表面は透明で、内部構造が肉眼で認知できる。骨格・筋肉・臓器・神経・血管……その全てが人型容器の正しい位置に形作られ、電子顕微鏡を使って初めて確認できるような、微細な組織まで設計された『完全な人体設計図』>

最も奇異とすべきは、その人体設計図が出土した海底の地層の年代。測定した結果、その遺物は現生人類が生じるよりも以前のモノと断定された。この遺物は『神の設計図』^{バイタルズ}と名づけられ、国家調査

室は情報規制法案を立ち上げてハッキング防止対策を施し、回収にあたったサルベージ班には情報機関の監視がつくほどだった。ネット上を騒がせた科学者が、この一件と何だかの関係があるのでは……そんな噂が囁かれた。しかし、国家調査室のハッキング対策により、問題の科学者も息を潜めだし、次第にその存在はネット社会の記憶から消えていった。そして――

20年が経過した。

一人の青年が刑務所の中にいた。数名の私服刑事が周囲をウロウロしているが、特に張り詰めた感じの空気でもない。30坪程の広さがある一室で、その青年はソファに腰掛けて両手を組み、何かを心配するような面持ちでうつむいている。

「どうぞ楽しんでください。我々がついていますので」

刑事の中でも一際貫禄のある初老の男が声をかけてきた。そして、コーヒーの注がれた紙コップをその青年に差し出した。

「ええ……分かっています」

そう言つて紙コップを受け取る青年の顔には、明らかに疲労の色が濃く出ていた。歳の頃は20代前半くらいだろうか、まだ少々幼さが残るその顔からは、何かに怯えるような落ち着きの無さが見て取れる。

「あの……ちょっとトイレに」

「ええ、どうぞ」

この部屋に出入り口は一つ。コーヒーを差し出した初老の刑事が、出入り口の側に立っている若手の刑事に目配せする。ドコへ行くにも護衛がつく。刑務所の中なのだから当然の処置なのだろうが、見知らぬ複数の人間に、四六時中まわりつかれるのはカナリのストレスになる。『インペリアム』と呼ばれるこの刑務所は、一般の犯罪者収容施設とは異なり、犯罪に巻き込まれてしまった被害者や、大物犯罪者を摘発するのに重要な役割を果たす証人を保護するため

の隠れ家。国家調査室の直轄で、軍施設並みにセキュリティレベルが高い。

「ボクの証言で本当に解決するんでしょうか……？」

部屋に戻った青年がボソツと呟いた。

「もちろんです。我々に全て御任せください」

何とも冷静に言ってくれるが、言うのは簡単。問題は結果だ。

「明日の段取りは？」

「法廷には朝9時到着予定ですので、7時半にはここを出ます。そろそろ休めますか？」

「……そうさせてもらいます」

と言つても、寝室が別に用意されているワケではなく、ソファに横になるだけ。そんな生活が既に5日も続いている。

「それではまた明日」

初老の刑事は、出入り口にずっと立っていた若手の刑事に一通りの指示を出し、他の刑事達と共に部屋を後にした。

「……………」

窓一つ無いこの収容施設に閉じこもっていると、昼と夜を区別する感覚が日増しにおかしくなってくる。テレビや新聞に目を通して一日の経過を知るが、外出できないままだと、まるで世界から追い出されたような違和感が生まれる。

「もう少しの辛抱ですよ、蒼神博士^{あがみ}」

青年の心境を読み取ったのか、見張りとして残った若手刑事が、照明の一部を落としながら声をかけてきた。

「……宜しく願います」

『蒼神博士』と呼ばれた青年は、ペコリと小さく頭を下げ、毛布をかぶって横になった。

「……………」

静かだ。あまりに静かだ。雑音が一つも聞こえないと、逆にその静寂が耳障りになるくらいだ。

（よそう……今更考えても遅い）

視界が暗くなる。目を閉じる。眠気が……………

フォンフォンフォン！！　フォンフォンフォン！！

「……………！？」

一匹目の羊が柵を越えようとした瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。見張りの刑事はホルスターに手をかけ、青年はソファから飛び起きた。

「な、何が……………！？」

「……………分かりません」

バタバタバタバツ！

出入り口の向こう側から複数の足音が。刑事がホルスターから自^オ動拳銃を抜く。

「博士ッ！」

扉のコンソールが点滅してロックが解除され、さつき出て行ったばかりの刑事達が慌てて雪崩れ込んできた。

「主任、何事ですか！？」

「敷地内に不審者の侵入を確認した。相手は一人だけだ」

「敵襲ですか！？」

「分かんが……………もしそうならとんだマヌケだ」

「刑事さん、ここにいて大丈夫なんですか？」

青年が怯えきった声で問いかける。

「大丈夫もなにも、インペリアムにおいてこの部屋が最もセキュリティに優れているんですよ。心配ありません」

そう言って他の刑事達に指示を出し、素早く配置につかせる。

「テレビをつける。監視カメラとチャンネルを合わせるんだ」

若手刑事がモニターを調整すると、監視カメラの映像が映し出される。正面玄関口、事務室、医務室、屋上、中庭……………発見。

「何だありゃ？」

中庭をモニターしているカメラの映像に、不審人物が映っている。

ライトアップ用の照明が強すぎて顔はよく見えないが、どうやら女のような。体にピツタリと張り付くようなボディースーツを装着し、そのうえ裸足。不審尋問を受けても文句の言えないような格好だ。どうやって中庭まで侵入したかは不明だが、モニターの女は何かを探すかのようにキョロキョロしている。

「こちらセクション・C、モニター室応答しろ」

刑事主任が無線機で呼びかけた。

<こちらモニター室。そっちは異常無いか？>

「今の所はな」

<機動部隊が全員配置についた。コスプレまがいのイカレ女の方は、まだこちらの動きに気付いていないようだかな>

「結構。絶対に殺すなよ。貴重な情報源になるかもしれん」

主任が北叟笑む。その直後――

<蒼神博士ええええええええ――！！――ドコにいるのおおお
おおおお――！！？>

豪胆なのかバカなのか、女はターゲットの名を大声で喚く有様だ。その声は監視カメラのスピーカーを通して、青年のいる部屋にもハッキリと聞こえてきた。

「そんな……何てことを！」

名を呼ばれた本人が、口を半開きにしてたじろいだ。

「知っている顔ですか、博士？」

「い、いえ……そんなハズは……」

ピピッ、ピピッ、ピピッ

刑事主任の無線機が鳴る。

「準備万端か？」

<いつでもいける>

主任は無線機を片手にモニターを凝視して……

「よし、制圧開始ッ！！」

ゴー・サインが出される。同時に警棒やライフル銃を持った機動隊員十数名が、建物の窓や物陰から躍り出て、侵入者の周囲を取り囲んだ。

<そこを動くなッ！>

<早く腹這いになれッ！>

<武器は持っていないかッ！？>

スピーカーから機動隊員の喧騒が聞こえてきて、目標の女不審者があつという間に制圧されたかのように思えた。

「……………」

瞬きを忘れ、真剣な目でモニターの様子を見つめる蒼神博士が、ゴクリと息を呑む。

<うわッ、びっくりしたああああ〜！ アンタ達ダレなのだああああ〜！？>

女不審者が自分の置かれている立場を無視し、無責任なセリフを叫ぶ。

<そりゃこっちのセリフだ！ 政府施設への不法侵入の現行犯で逮捕する！>

機動隊員の怒号がとぶ。

<蒼神博士ええええ〜！！ 聞こえないのおおお〜！？>

機動隊員の指示に一切従うことなく、またもや大声で青年の名前を呼ぶ始末だ。

「何だコイツは……？」

あまりのマヌケな状況に、モニターを見つめる刑事達も呆れ返っている。

<いいかげんにしろッ！>

業を煮やした隊員の一人が女を捻り伏せようと、その肩をつかもうとした瞬間……

ブワッ——！！

隊員のでかい図体が宙に浮いて、背中から勢い良く地面に落下する。

<触らないでほしいのだッ、バカ!!>

隊員の胸ぐらを片手でつかんで無造作に投げたのだ。女性の腕力とはとても思えない。

「抵抗するなッ!」

警告すると同時に、警棒を構えた隊員二名が左右から挟みこむようにして襲いかかるが、女はその場から一步も動かず、上半身を器用にひねって二本の警棒をかわすと、両の拳を裏拳気味に相手の顔面へと叩き込んだ。

「おいおいッ……!?!」

拳を喰らった二名は鼻血を吹いて崩れ落ち、モニターで観戦する刑事達に不愉快な緊張感がはしる。

「大人しくしろッ! いいか、これは最後通牒だッ!」

今にも発砲したくてウズウズしている銃口が女不審者に向けられ、スコップサイトのレーザーが目標の急所を集中的に這っている。

<うるさいなあッ! 早く蒼神博士を殺して帰らないと怒られるのだッ! だからオジサン達邪魔しないで——>

バンッッッ——!!

発砲。

「……やったか?」

モニターを見つめる刑事主任が画面にググッと近づいて目をこらす。

「ん……?」

様子がおかしい。

「何だ?」

女の上半身が大きく後ろに仰け反って、曲がった釘のように固まっている。

「どうした？ 命中したのか？」

刑事主任が無線で問う。

<分からね……少し待ってくれ>

ライフルをしっかりと構えた隊員数名が、合図を受けて駆け足で女に近づき、十分に警戒しつつ様子をうかがう。

「どうなんだ？」

<あ……こりゃヒデえ。貫通してないところを見ると、一応、防弾処理のされたボディスーツのようだが、胸元がえぐれちまってやがる>

「死んでいるのか？」

<この体勢で生きてたらコントだ>

「よし、検死官に委ねて身元を調べろ。わずかでも法廷で使える情報があれば――」

——ヒュッ

<う……ッ……！>

女の変死体が突如、上半身を360度ひねって元の体勢に戻った。同時に、無線機から呻き声のようなものが聞こえ、取り囲んでいた隊員達もがくように倒れ伏した。

「な、何事だッ！？」

動揺する刑事主任が見たのは、女の両手にしっかりと握られた『刃物』。刃渡り30センチほどのシースナイフが二本……照明に照らし出されてキラキラと光っている。

「ひッ——！」

明確な殺傷能力を目にした蒼神博士が、顔を引きつらせた。

<痛いなあッ！ 危ないのだッ！>

ライフル弾の直撃を受けて素直に感想を述べている時点で、尋常な相手ではない。

パンツ！　パンツ！　パンツ！

残る隊員達は指示を待つこともなく本能に従って拳銃で応戦する。
<こんにやる！！>

女の方はそれに応えるかのようにナイフを構え、機動隊めがけて
跳びこんでいく。

「――なッ！？」

思いもよらない展開に、モニターを凝視する全員がマヌケ面で口
を半開きになっている。

「主任……我々はどうします？」

「何もするな」

「……は？」

「籠城だ。ここでやり過ぎす」

「し、しかし……」

スピーカーからは、あまり聞きたくない隊員達の断末魔が聞こえ
てくる。

「我々の仕事は、あくまで蒼神博士を無事に法廷へ送り届けること。
避けられるリスクは極力避ける」

モニターの隅の方で血飛沫が上がっている。銃声は鳴り響いてい
るが、隊員達の叫び声は止まらない。

「応援は！？　ここは刑務所でしょ！？」

蒼神博士が必死の形相で最もな質問をする。

「残念ながら……このインペリアムは囚人を収容する一般のソレと
は違い、最小限の刑務官で維持されています」

「つまり……外部からの応援が到着するまで、身動きできないとい
うことですか？」

「申し上げにくいのですが、その選択肢もありません」

「な、何故です？」

「重要な証人を確実に保護するためには、情報の漏洩を極力避けな
ければなりません。そのため、外部との連絡手段はモニター室の端

末からしかできません」

「でしたらすぐ、モニター室の担当者に連絡をッ」

「担当者は……現在、モニターの中で死んでいます」

画面を指差され、絶望感が一拳に湧いてきた。

「そんな、バカな……！」

蒼神の顔色がみるみる青ざめて、イヤな汗が額をじつとりと濡らしている。

「この状況下で言うのもなんですが……どうか落ち着いてください。ここは絶対に安全です」

刑事主任は部下達の手前もあつてか、冷静を装ってはいるが、籠城というのは想定外だった。が、彼は仕事の関係上、この部屋について熟知していた。

「この部屋の外壁には、原子力発電所で使用される防護壁と同じ物が用いられています。たとえば大型航空機が時速100キロで突っ込んできても、防ぎきるだけの強度を誇ります。つまり、侵入者がライフル銃を奪って撃ち込んだとしても、微動だにしません」

彼の講釈を聞いて部下の刑事達に安堵がもどる。

「それはそうと……博士、心当たりはないんですか？」

「あ、う……」

ターゲットの名前を力一杯叫んで登場するような危険人物……そんなヤツと知り合いとは言いたくないだろうが、状況からある程度の予想はついていた。

「どうなんです？」

「お、おそらく、アノの女性は……」

ガギャン

ツツツ！！

「——ッ!?」

聞きたくもない剣呑な音がして、部屋の中の全員が一点を見つめた。つい先程説明のあった、特別な防護壁から何かが——“生えて

いる”。そして……

ガリガリガリガリツツ——！！ ガリガリガリガリツツ——！！

「うおッ!？」

絶対安全なハズの防護壁に、ものすごい勢いで割れ目が入っていき、汚い四角形を形作っていく。コンクリートの破片のような細かい瓦礫を床にタツプリと散らかし……

ドオオオオオオ——ン！！ ドオオオオオオ——ン！！
ドオオオオオオ——ン！！

「うおおッ!？」

土木用重機が衝突してくるような轟音が響き渡り、部屋中がビリビリッと振動する。

「あ、ありえん……！ 一体、何でできている……!？」

まさかの超力技。防護壁の性能を凌駕するナイフの切れ味と、女の膂力。目の前で起きている現実に対処すべく、刑事主任はホルスターから拳銃を抜く。他の刑事もそれにならって銃を構えたが、このまま女不審者が突入してくれば、モニターの中の斬殺体に仲間入りすることは目に見えていた。

「博士、出入り口まで下がってください」

「え……?」

「見る限り、敵は単独犯です。別セクションに逃げ込めば、多少の時間稼ぎにはなるでしょう」

「で、でも……アナタ達は?」

「このような体たらくで申し訳ありません。我々はここに残って出来る限りの——」

「うつりやあああああああああ
ッッッ！」

ドゴオオオオオオオオオ
ッッッ！！

とてつもなく力のこもった一声と同時に、防護壁の一部が積み木のように内側へ抜き出される。立ち上る粉塵……その中を人影が一瞬揺らめく。最早、主任の指示を仰ぐ必要はない。

パンパンパンッ！　パンパンパンッ！

9ミリ弾が粉塵めがけて次々と撃ち込まれ、弾が命中する度に人影がゴム人形のように弾む。

「博士ッ！　さあ、早くッ！」

扉のロックが外れる。

「ご、ごめんなさい……ボクは……」

「アレっ？　蒼神博士の声がした」

（——ッ！？）

少女のような幼さの感じる声がして、『敵』はその威容をさらけた。年の頃は20代半ば程で、浅黒い肌をしており、染めてあるのか地毛なのかは不明な白髪のみディアムカット。

「あ、博士がいたのだ。じゃあ、すぐに殺しちゃうね」

本人を前にして、屈託の無い笑顔でサラリと宣告する。彼女の表情には何の意図も感じられない。外部から受けた刺激に即反応する昆虫のようだ。

「フ、フリージア……どうして君が、こんな……？」

面と向かって“今から殺します”と宣言する女を前にし、彼の脚は笑っていた。

「畜生がッ！」

パンッ——！

彼等と不審者との距離はわずか。刑事主任の撃った弾が外れるハズもなく、『フリージア』と呼ばれた女の喉を貫通した。

「げほッ！ げほッ！」

首に紅く小さな華が咲き、女は激しく咳き込んで辺りに血をプチ撒ける。

「やった……」

首に銃弾の直撃を食らって倒れないのなら、相手は間違いなく人とはみなされない。そして、彼等警察にそんな“人外”の相手など務まりようもない。

「うええええ、喉が痛あゝい……けほッ」

まるで小児科の待合室で痛がる子供だ。もちろん、倒れる様子はない。要するに“人外”決定だ。

「くっそおおおおおおおおおッ！！」

主任、激昂。

ヒュッ—— ヒュッ—— ヒュッ——

光刃。

「パパがね、博士を殺せって」

ドサッドサッ、ドサッ……

総殺。

「そ、そんな……『支配人^{オーナー}』がボクを？」

「うん、殺してきなさいって。でもね博士……“殺す”ってどうすればいいのだ？」

幾つもの斬殺体を積み上げておきながら、根本的な質問をされた。博士の表情が恐怖とはまた別の感情で曇る。それは相手に対する哀れみのようにも見てとれた。

「フリージア……君の足元に倒れ、血を流して動かなくなった人達がいるだろ？」

「うん、いるよ」

「これが人を“殺す”ということなんだ」

彼はとっても大切な事を教えていた。女は自分の足元に転がる刑事の死骸を、足のつま先で突つつく。もちろん、反応は無い。初めて目にする生き物を観察するような女の目つき……その瞳は瞬く間に潤む。

「は、博士え、博士え……動かないよお！ 何にも言わないよお！」

女が泣き始める。刑事達の死を完全に無駄にする涙がボロボロ流れ出る。

「そう、これが“死”だ。フリージア……君がしたことだ」

彼は泣き出す女に対して、とどめをさすかのように毅然と言い放った。

「うつ……うつ……うわああああああああああん！！」
号泣。

「博士が死ぬのやなのだあああ……ッ！ 殺すのやなのだああああ……ッ！」

とうとうその場にしゃがみこんで泣きじゃくる始末だ。

「フリージア、こっちを見て」

そう言っただけ博士はその場にゆっくりと体を沈め、何の脈絡もなく倒れこんで動かなくなった。

「………博士？」

唐突な出来事に泣くのをやめた女は、鼻水をすすりながら彼に呼びかけた。

「………」

が、応答は無い。

「し、死んじゃった……博士が死んじゃった……！！」

女の顔色がみるみる青ざめる。冷静に状況を把握できていない彼女にとって、目の前で起きた現象は、あまりに残酷な仕打ちにも見て取れた。

「………」

本物の死体に混じって、偽物の死体を演じることとなった蒼神は、

ただじつと息を潜めて成り行きに身を委ねるしかなかった。
「ひぐつ……博士が、ひぐつ……死んじゃった。フリージアが……
殺しちゃった」

ペタペタペタ……

裸足で歩く悲しげな足音を残し、彼女はついさっき自分が突貫させた壁の穴から出て行った。

「……………」

嵐が——去った。が、青年はまだ動けそうにない。

（どういうつもりだ？ 彼女を外に出すなんて……）

大勢の人間が死んだ。自分が成そうとしたことに協力した人達が、犠牲になってしまった。既に危機は去っていたが、彼の肉体はあまりに軽く失われる人命の現実に蝕まれ、しばらくは動けそうになかった。そして……

1週間後

一人の青年……『蒼神槐』あがみ えんじゅは自宅マンションのリビングで悩んでいた。刑務所で起きてしまった大惨事をきっかけに、蒼神博士は法廷での証言を拒否。それより以後、彼の周囲は静かになった。直接的な警護をする者はおらず、一日に数回、パトカーがマンションの周囲を巡回するくらいだ。

（ボクのしようとした事は、間違っていたのか？）

彼はPCのモニターを見つめながら自問した。法廷に立つと決めたのは、己の正義に迷いがなかったから。では何故、今の自分は証言を拒否し、自宅に引きこもっているのか？ 全てが無駄になってしまった。なんとも単純な計算だ。

“ 個人が組織に勝てる道理は無い ”

ただ……ただ一つだけ考えがあった。公の場で社会的な楔が打ち込めないのなら、非公式の場で攻撃する。つまり、原告本人が直接調査に乗り出すのだ。ただし、単身乗り込んだりすれば、自滅することは目に見えている。先日のような事例がある以上は『護衛』が必要。そこでどうする？

（そろそろか……）

彼は時計を見て、胸に秘めた微かな期待を膨らませていた。『イレギュラー』——ネットで発見した調査会社のサイトだ。TOP項目にはこう説明されていた。

<個人を対象とした総合調査会社。警察OB・元軍人・情報機関出身者等で組織され、企業やそれに付属する団体、宗教組織、暴力団等からの警護、または直接的及び間接的な調査を目的とした、自治体公認の企業>

……とある。一般のメディアでは聞いたこともない社名だったが、自分がこれから相手にしようとしている連中の事を考慮するなら、備えは必要。

——ピンポーン

来た。

この瞬間から彼の反撃が開始される。昨晚、腕利きのエージェント二名をよこすとメールがあった。なんとも心強い。どんな屈強な男達が来てくれたのか。

ガチャ！

「……………」

「……………」

ミーンミンミンミーン！

街路樹でセミが鳴いている。ドアの向こうに看護婦と医者が立っていた。

「……………」

「……………」

ミンツッ！ ミンツッ！

状況が上手く説明できないが、目の前に白衣の天使と女医が立っている。

「……………」

「……………」

ミンミンツッ！ ミンツッ！

三人はいつまでも見つめ合っていて、何もしゃべらない。

「……………」

「……………」

——ボタンッ！

蒼神博士は仕方ないんで玄関戸を閉めた。力強く閉めた。

ドンドンドンツッ！ ドンドンドンツッ！

「すみませーん！ 『イレギュラー』から派遣されたモンでーす！

「ウソじゃないですよー！ 社員証もありますから開けてくださーい！」

ドアを叩きながらそう言ってるもんで、彼はもう一度開ける。

「……………」

「……………」

無言。

無言。

看護婦の方がラジカセを持ってる。再生ボタンを押した。流れてきたBGMは『ラジオ体操第一』。

——ボタンッ！

閉めた。

「わーッ！ 待って、マジで待って！ こっから真面目だから！ ホントに真面目だから！」

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

このまま放っておくと玄関戸の前でいつまでも叫んで、御近所から身に覚えの無いウワサが出そうなんです。

ガチャ――

「とつとと入ってください」

彼の戦いが始まった。

ナースと女医

＜速報です。昨今懸念されていた政府直轄の国営企業、通称『PFRS』で発生したとされるバイオハザードについて、PFRS側は「事故が起きたという事実は無い。職員による誤報である」と、変わらず事故を否定。政府は来週にもPFRSの幹部立ち会いのもと、公式調査を実施すると発表。今回の調査では……＞

テレビが昼のニュースを放送している。蒼神博士はリビングのソファに来客者二名を座らせると、冷茶を一杯出してやった。

「あの……一つ聞いていいですか？」

「はい、どうぞ」

「その格好は何ですか？」

ものすごく切実な質問を試してみた。

「看護婦です」

「女医です」

呼称についてはどうでもいい。

「……どうしてそんな格好を？」

「趣味です」

「右に同じ」

ダメだコイツ等。

「これ、社員証です」

そう言っただけナースが、顔写真付きのカードを一枚取り出して見せた。

「イレギュラー調査課エージェント・『汐華咲』さん？」

「はい、今年で18歳になりましたッ！つまり、ポルノ解禁ッ！ポルノ解禁はどうでもいいが、未成年がこんな仕事していいのか？」

「こちらもどーぞ」

女医も社員証を手渡した。

「イレギュラー調査課エージェント・『かしわぎ あかね 柏木茜』さん？」

「はい、咲ちゃんとコンビを組んでる19歳ッ！ コスチュームは手作りですッ！」

そう言つてニツコリ微笑んでいる始末。

「え〜……すみません、ちょっと確認しておきたいんですが……メールには“信頼のおけるベテランを派遣します”と、返信があったんですけど」

「そうは見えないと？」

「ええ、まあ……」

「はい、確かに。嘘メールですから」

ぎゃああああああああああああッ！！

「そ、それって詐欺じゃないですかッ！」

「申し訳ない！ あたし等どうしても仕事が欲しくて！」

「上司のPCで海外のエロサイト観てたら、偶然、蒼神さんのメールが届きましてエ。これはチャンスとばかりに……あはははははははッ」

決して笑い事ではない。

「ちよつと電話してきます」

「待ってください——い！！」

おふッ！？

席を外そうとする博士めがけて、看護婦と女医がタックルしてきた。

「嘘ついた事は謝ります！ あたし達はただ、デスクワークとサヨナラして外に出たかっただけなんです！ この支配からの卒業なんです！」

言ってるコトは全く理解できないが、どうも面倒な話になってきた。

「もしかして……御二人は新人？」

「いえ、入社して2年近くになります。けど、調査の仕事はこれが

初めてです」

「……はい？」

「エージェントのライセンスは持つてゐるんですが、補欠なんです」

「そーなんです。ギリギリなんですウ」

えらいコトになつてきた。しかし、今ここで追い返そうとすれば、
「大声出して人を呼びます」と言わんばかりのツラなんで、黙認するしかない。

「そ、それでは改めまして……蒼神槐です。宜しく御願ひします」

彼はそう言つてテーブルの上に書類の束を広げた。一番上には証明写真の貼られた博士自身の履歴書が。

「なんとツ、このツラで23歳！？ てつきりあたし等とタメぐらいかと！」

「身長は？ 体重は？ 血液型は？」

ワイワイ、ガヤガヤ……

二人は履歴書の写真を指差し笑つて、肘ついて。文句言つて寝転がつて、屁えこいたりで相談中。

(……これでいいんだろうか？)

宜しくない汗が博士の顔面より吹き出す。なんだかもうヤケクソまで秒読みだ。

—— 5分後 ——

「んツ！ よし、決定！」

「な、何がですか……？」

「本日より『童顔ニート』と呼びます」

ニックネームが出来た。

「い、いや……そんなことよりですね、ええっと……そうだ、テレビを」

仕事の話が微塵も進みそうにないんで、彼はPCをテレビにつな

ぎ、モニターを見るよう促した。

「職歴に記されてある通り、ボクは『PFRS』本部の元職員です。PFRSで現在起きているバイオハザードについては、御存知ですよね？」

「知らんツ！ あたしは基本的に深夜アニメしか観ないツ！」

ナースがやたら偉そうに胸を張って返答する。

「コレって確か……海の上にある如何わしい施設で、マスコミにボコボコにされてる秘密組織だよ」

微妙にズレてはいるが、女医の方はまだ常識があった。

「ボクは1週間前、PFRSに対して法廷で証言するハズでした。あそこで一体、何が起きているのか、一部始終を世間に公表するつもりだった……しかし、挫折しました」

「さあてえ、な……にがあるかなあ？」

ガチャ――

クライアントが真剣に話し始めた途端、ナースはキッチンめがけて這い出して、冷蔵庫のドアを勝手に開けたりしてる。

「ボクは一介の科学者に過ぎません。軍部とも繋がりのあるPFRSと本気で渡り合うには、武力も必要であると悟りました。だから、御二人には護衛としてPFRS本部まで一緒に来て欲しいんです」
モニターに映る海上の巨大建造物……テロップには『PFRS本部施設』の文字が。蒼神博士は真剣な表情でモニターをビシッと指差した。

「おおッ、肉だ！ しかも国産牛肉だ！ あたしの勝利だああああああッ！」

何に勝ったかは知らんが、冷蔵庫に上半身をつっ込んでナースが喚いている。

「ええつとですねエ、まずはコレに数字を書いて欲しいワケでして、はい」

そう言って女医が紙切れを一枚取り出し、博士の前に差し出した。紙切れには『給与明細書』と書いてあった。手書きで。

「……ギャラですか？」

「いかにも」

「いや、でも……成功報酬は調査が完了し、必要経費が明確になつてから請求書が送られてくるとサイトに……」

「え……つと、うちの上司はこの件もろん知らないワケで、バレると解雇。で、博士と仲良く契約。現金直接プリウス」

要するに詐欺だ。

「不勉強で申し訳ないんですが、こういう調査一連の相場って、幾らほど……？」

「相場？ んんツ？ ねえーツ、咲チャーン！」

トントントントン、グツグツ、ジュワァァ……

キッチンの方から手際の良い音が聞こえてくる。

「何じゃい！？」

「わたし達の仕事って、幾らぐらいもらえるのかなア？」

「こりゃ！ 子供がお金の話なんてするもんじゃありませんッ！

それよりこつち来て手伝いなさいッ！ 今日のランチはステーキだぞッ！」

今からでも遅くない、通報しよう……博士は心底そう思った。

＜今回派遣される調査班には、情報機関の関係者が含まれているとの報道もあり、極秘裏に開発された、BC兵器による事故の可能性も視野に入れているのでは、との声もあります。PFRSのオーナー・『魅月紫苑』^{みつきしおん}氏が昨日行いました、記者会見の模様をご覧ください＞

攻撃的で鋭い目つきをした、顔色の悪い男性がモニターに現れる。50代前半くらいだろうか、徹夜明けの営業マンみたいにスーツをヨレヨレにしている。

＜皆さん御存知の通り、PFRSの本分は新薬開発のコンサルタン

トと軍用兵器の設計であります。マスコミの間で流布されている正体不明のウイルス漏洩や、軍部の陰謀説などは事実無根です。PFRSは創立から20年程の若い企業のため、社会的に至らない箇所もあるかもしれませんが、国民の皆様に貢献できるよう、日々努力しております>

<先日の元職員による告訴撤回に関しては、どう御考えですか？>
<企業が大きくなれば、必然的に賛同者と反対者の区別が生まれま
す。己の無知蒙昧を棚に上げて、企業を批判する輩はいつの世にも
後を絶ちません。今回はその愚かな輩が、ギリギリで自分の過ちに
気付いたという次第です。もちろん、法廷に立った場合、我々は徹
底抗戦する準備ができています。正しい者は決して逃げ隠れしない>
記者達の質問に対し発言する中年男性は、自信に満ちている。

「この男がPFRS本部における元上司です」

博士は溜め息まじりに呟いた。

「フムフム。つまり、この不健康そうなオヤジが敵のボスカ。モグ
モグ」

テーブルにはステーキ定食が二人前。家主の同意は無視。

「『敵』って……ボクはただ、PFRSの隠蔽体質を糾したいただけ
です。直接的な交戦なんて考えてません」

というより、この二人に一流SPのような働きを期待しても仕方
ない。PFRSのバックには軍部がいる。物理的交戦となれば、特
殊部隊の一個大隊くらいは必要になるだろう。

<今回の告訴内容についてお聞きしても？>

記者の一人が核心に迫る質問をした。

<告訴の内容については彼女に詳細を説明してもらいます>

カメラが移動して、魅月氏の隣に座る白衣姿の女性を撮る。

ブウウウウウウウウウ———ッッッ！！

冷茶を飲んでいた博士が盛大に吹いた。噴射の反動で仰け反った。

虹が出来た。

「こりゃああああッ！ 食事中に行儀の悪い子だねえ！」

ナースがプリプリ怒ってる。

<告訴の件にしましては、原告側との和解が成立しております。本件は軍内部の情報が扱われているため明言は避けますが、今後は軍部の広報より随時皆様に御報告があると思われます>

房状の後れ髪が特徴的な黒髪のポニーテールで、フォックスタイプの赤縁眼鏡をかけている。テロップには『PFRS上級職員・34歳』と出ており、名前は何故か伏せられていた。

<軍部の機密事項に該当するということですか？>

<そうです>

<責任者はどなたですか？>

<私からは御答えできません>

名無しの美女は記者の質問を突っぱねる。蒼神博士はやりきれない表情で、テレビの電源をオフにした。

「ボクのIDは当然もう使えません。つまり、PFRS本部に潜入するワケですから、政府施設への不法アクセスの罪で逮捕されます。それを踏まえた上で判断していただきます……同行できますか？」

正直なところ、この二人には来て欲しくない。手違いとはいえ、こんな未成年の女の子に犯罪の共謀者という履歴を加えたくない。だから、博士はトドメに言及した。

「1週間前、ボクはPFRSが送り込んできたヒットマンに襲撃されました。武装した刑事達がたくさん殺されました。ボクはこうして運良く難を逃れましたが、次も上手く回避できるという保障はありません……それでも一緒に来てもらえますか？」

誇張しているつもりはない。事実をありのまま真剣に述べた。

「えッ……人が死んでんの？ ええつと、それはちよつと……ねえ？」

「アハッ、ハハッ……補欠の初仕事にしてはハードかも（汗）」

二人は微妙に気まずい空気を漂わせ、目を見合わせている。

「どうされますか？」

彼は矢継ぎ早に追い立てる。

「え？ あ、ああ……ちよつとごめんなさい。事務所に戻って上司と相談してみます」

「そ、そうだね……契約書類も持ってきてないし……アハッ、アハハハ（汗）」

両エージェントは引きつった笑顔で立ち上がり、玄関の方へと後退して行く。

「あの……上司に経過報告を入れなきゃならないんですけど、明日はどちらに？」

半開きにした玄関戸から、顔だけ出してナースが問いかけきた。

「東部ベイエリアの港に行きます。ソコから客船に乗りこみます。周囲に一般人が多ければ、先方もあからさまな行動には出られないでしょうし」

「そうですか……じゃあ、また！」
ボタンッ！

—— 帰った。

「さて……と」

博士はもう一度テレビの電源を入れ、モニターを見つめた。記者会見のニュースはまだ続いているが、オーナー・魅月氏と白衣の女性の姿は無く、広報の人間がつまらない言い訳で凌いでいる。

「結局、ボクだけか……」

孤独な戦いへと前進する決意をかためた。

シスターと神父

翌日

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ……

のんびりとした汽笛が聞こえる。潮風に乗った海鳥が太陽の下で輪を描き、青空の中を優雅に泳いでいる。正午ちよい……初夏の堂々とした陽射しを受け、港では出航を控えた巨大な船が泊まっていた。『サテュロス』と呼ばれる巨大豪華客船で、メインデッキの温水プールでは、Ｔシャツ・短パン姿の蒼神博士がパラソルの陰に隠れ、デッキェアに腰を下ろしてラップトップを立ち上げていた。

『バイタルズ神の設計図』における検査結果

ディレクトリーの一つをクリックする。

<記述者不明……神の設計図バイタルズを構成するタンパク質は、数十のアミノ酸配列により一次構造を形成しており、二次構造は、他の動植物に見られる筒状構造とも板状構造とも似ておらず、三次構造において、ある程度のパターンが見受けられるが、未だに類型化には至らず、構造と機能の相関はハッキリしていない>

<記述者不明……神の設計図バイタルズより抽出されたタンパク質を使用して、臨床実験を行う。何度かの実験により、以下の特質を発見。1・動物実験は全て失敗したが、人体実験はわずかながら成果を収めた。2・生存する被験者は、皆同様にその肉体機能を画期的に向上させた。特に免疫機能は秀逸。物理的ダメージ・高熱・寒冷・細菌・ウイルス・毒物等に対する抵抗力は、常人の数倍。3・このタンパク質を培養することにより、新しい生命を確認。原始生命に酷似した

成長パターンを経て、多細胞生物に変化>

<記述者不明……神の設計図バイタルズを管理する海底エリアの監視モニターが、異常を確認。特定の上級職員との接触の際、原因不明の振動現象が発生。電気的な反射と思われる>

<記述者不明……軍部より極秘のアクセス有り。神の設計図バイタルズを軍のP4施設にて預かりたいとの依頼。私は反対した。一部の組織が秘密裏に所有して良い物ではないと判断。協議の末、極地に研究施設を整え、隔離するという決議案が採用される。これは軍上層部から紹介された将校からの提案で、建設費用の全額負担を申し出たらしい>

「コレのせいでボクは職を失った……」

彼は短い黒髪をガシガシとかき上げて目を細めた。これから自分が成そうとしている事を、常に心の中で自問し続けなければ落ち着かない。そんな時間がやたらと増えた。

（ボクは殺されかけた……そう、殺されかけたんだ。また表に出ようとすれば、軍が本気で動くかもしれない……拉致？ 殺害？）

ハアアアアア……

とても重くて長い溜め息が流れた。

（一個人が大組織に勝てるのか？ ……可能か？）

——パタンツ

PCを閉じた。面前に広がる自分とは無関係な光景に溶けてしまいたかった。

水着のセレブがはしゃいでいる。

プールサイドを無垢な子供達が走り回る。

日光浴に、彩色豊かなソフトドリンク。

デッキブラシでせっせと掃除するシスターと神父。

水平線の向こうには………

「―――て、アンタ等何やってんですかッ!？」

鼻息を荒げる蒼神博士が二人の前に仁王立ち。

「密航ッ!！」

二人はそう言った。

ゴシゴシ……ゴシゴシ……

孤独になるハズの旅に汐華咲と柏木茜がプラスされた。

「何じゃこりゃああああああああッッ!？」

バカが一匹、客室で絶叫した。

「シヨック・ザ・神の僕!！」

続けて二匹目。

蒼神博士は再会してはいけない連中を引き連れ、自室に戻った。

あのまま二人を世間様にさらしてはいけない……そんなオトナの真
心から。で、入室するやいなや、冷蔵庫に頭を突っ込んでいるのが
汐華咲（何故かシスター姿）。身長は160センチ前後くらいで、
非常に短く切りそろえた黒髪が特徴的。衣装のせいで体格はよく分
からないが、スリムっぽい。一方、寝室のマットレスを寝転んで吟
味しているのが柏木茜（何故か神父姿）。背丈は咲より頭一つ分く
らい高く、栗色をしたミディアムの姬カット。衣装の上からもハッ
キリ分かる腹部ポツコリさん。体脂肪率は40%くらいありそう。

「……………で、どうして密航なんか？」

「ぬッ、神々しい生肉を発見！ダイレクトにいつてくれる!」

「ふにやゝゝゝ、たまんなゝゝい」

人の話を聞け。そして、牛肉に塩をふるな。

「会社に報告しなかったんですか？」

「しましたよ。きっちり」と

「じゃあ、どうして!？ 死人が出ているんですよ!！」

「上司からは“だったら死んでこい”って言われました」

「……は？」

「つまり、死ににきました」

開封済のワインボトルを握り締めながら、シスターが胸元で十字を切る始末だ。こうなってしまうては、この二人同伴でPFRS本部へ潜入するしかないワケで……。

「いいでしょう！　こうなってしまった以上、今からボクはアナタ達の正式なクライアントです。よって、ボクの言うことは絶対守ってもらいますッ！」

ゲッフ……

ブッ……

ゲッフはするし屁はこくし、最低の返事が返ってくる。

「まず一つ！　ボクの指示なくして勝手な行動をとらない！」

ビシッ与人差し指を突き出して一喝。

「二つ！　御二人にはPFRS本部の手前で本土に帰ってもらいます！」

ビシッと二本目の指を立てる。

「神に誓って！」

「右に同じ！」

うわああああ………コイツ等、約束破りたくてウズウズしてる。

（巻き込んだのはボクだ……責任は負う）

彼は人並みに保護者としての責任に似たモノを感じていた。

「そつえば、ギャラの交渉が途中でしたね」

旅行カバンの中から財布が取り出された。ブ厚い。札を入れる部分がやたらブ厚くなっている。援交っぽい画になってなんかイヤらしい。

「スゴイよ咲ちゃん！　お財布がピッチピチで苦しそう！」

「おのれッ、この非国民めッ！」

床に正座して、天に両手を差し出しつつも文句をたれるシスター。
「ええっと……そういえば、幾らくらい払えばいいんですたっけ？」
「スンマセン、質問があります」

質問したら質問で返された。

「はい、何か？」

「大きな数字ってよく分からないんで、物に換算した場合……上カ
ルビ何人前食える？」

「執事喫茶何回通えますウ？」

そんな価値基準でいいのか？

「……では、依頼料の件は後日イレギュラーと交渉ということでは」

カチャカチャ、カタカタ……

蒼神博士はPCをテレビにつないだ。

「よく観ていてくださいね」

テレビモニターに映し出されたのは、海洋に浮かぶ正方形形状の巨大な環境都市。その中央には、黒光りする高層ビルがそびえ立っている。

「当時はまだ実験段階だった『マリンコロニー』のシステムを導入し、PFRSは4年かけて建造されました。資金の殆どを軍部がバックアップしているため、全ての設備が軍仕様で、テロリストやハッカーへの対策は万全。海上・空域ともにレーダー探知されており、認証コードを持たない所属不明の機体が接近すれば、即座に軍へ通報されます」

「あたしの知り合いに、『夜のレーダー技師』って呼ばれているヤツがいます」

そりゃただのストーカーです。

「かと言って、海中は広域海底火山の影響で巨大な岩が出っ張り、潜水艦による接近も難しい」

「わたしの知り合いに、『夜のソナー技師』って呼ばれているヤツ

がいます」

そりゃただの盗聴マニアです。

「そこでボクの立案した作戦ですが、PFRS本部から最も近い港には、メンテナンス用の海底トンネルが本部の発電施設までつながっています。そこを歩いて行きます」

「はいはい、警備とかは？」

「問題ありません。海底トンネルの存在は、政府が契約する特定の業者と、一部の上級職員しか知りません。ただし、ボクのIDはどうせ使えないんですけど」

「つまり、あたし等は海底トンネルの出口まで付き合えばいいってコト？」

「でもオウ、IDが無効ってことは入り口で立ちんぼ？」

「大丈夫です。政府指定の業者の一人が、ボクの話聞いて協力してくれることになりまして。港で落ち合う予定です」

彼の心の中で、まだ弱々しかった決意がギュツと引き締まった。

「で、具体的にPFRSとやらで何が起きてるんですウ？」

神父もワインのボトルを発掘し、それはもう手慣れた感じでグビグビグビツ。

「このバカ！！」

ばしッ

「あうッ！」

シスターが神父をぶつ。そして、小芝居。

「飲酒はハタチを過ぎてからって、いつも言ってるでしょ！」

「ご、ごめんなさい……わたしが間違ってた！ 久しぶりの合法的な食事にかかれてた！」

——ヒッ

抱き合う酔っ払い共。シスター、オマエも未成年だぞ。

「PFRS本部ビルのP4施設で、バイオハザードの一種が発生しています。職員十数名が、正体不明の『何か』に感染しました。本部はその事実を隠蔽しているのです」

蒼神博士は面前の小芝居をバツサリと無視し、話を進める。

「それ以外にも、国外から不法滞在者やホームレスを拉致し、違法な人体実験を行っています。私も立ち会ったことがあります……遺体は溶解処理され海に流される。被験者の個人情報、この世から全て消されます」

「ほう、そりゃけしからんな」

腰に両手をあてて窓から大海原を眺めるシスター。その背中が堂々としている。酔っ払ってるけど。

「バイオハザードの原因は、『神の設計図』バイタルズにあると推測しています」

モニターに映される怪物体。

「ばいたるず？ 若手か？」

芸人ではありません。

「『神の設計図』バイタルズとは……20年程前、現在のPFRS本部が位置する海域にて、地殻変動により海底から吐き出された正体不明の遺物です。人間の造形と酷似していて、半透明の全身には人体を構築する組織全てが正しい位置に在り、電子顕微鏡を使用してはじめて確認できる、微細な箇所まで正確に造られています。つまり、『人類の完璧な標本』——いえ、コレを最初に精密検査した科学者は、“人類を創り出すための完璧な設計図”と考えました」

モニターに映った怪物体をジッと見つめる咲と茜。そして、感想。
「男？ 女？」

「大人？ 子供？」

特にどうでもいい様子。

「先日も申し上げましたが、ボクはヒットマンの襲撃を受けました……この船も100%安全というワケではありません」

「はッはッはッ！ そのためのあたし等です！」

「博士の盾となり武器となり、情婦となりますウ」
結構です。

優雅な船旅と喧騒の予兆

「で、博士は自分の元職場をどうしたいワケ？」

シスターは相変わらず腰に両手をあてて、大海原に視線をやっていて、何だか背中が大きい。

「間違いを正したいんです」

彼は実に分かりやすく断言した。

「何で？」

「……え？」

予想外の切り返しに博士が啞然とする。

「PFRSは国が管理する正当な研究機関なんです！ それを一部の職員が私物化して、違法な実験を行うなど以ての外です！」

博士は身振り手振りもまじえて熱く語る。

「要するに“白”という正義があつて、“黒”という正義とぶつかつてる。お互いが正しいと言って譲らないワケだ」

「PFRSの非道に『正義』なんかありません！」

「使われない核兵器に悪意は無し。例え使ったとしても、爆発の瞬間や死体の山を撮った映像を確認しない限り、人は『悪』を定義しない」

「閉鎖的空間の中で行われた暴挙は、公に認識されなければ『悪』ではないと！？ それは違う！ 悪意は確かにソコに存在しています！」

咲の物言いに對し、蒼神博士はつい向きになって声を荒げた。

「まあまあ、落ち着いてくださいなア 咲ちゃんちよっぽり酔っちゃつてるんで」

「そのとーりじゃ！ 褒美として除湿剤に溜まった聖水を頭からかけてやるうぞ！」

「やめてエエエエエ！ 楽しいけどやめてエエエエエ！」
バタバタバタ……

（ボクは何に負けたんだろう？）

命を狙われた。政府機関を敵に回した。さあ、示そう。自分こそ真の『白』であると。

「博士——ッ！」

「えッ？ あ、はい……」

いつの間にか金属バットを片手に構えたシスターが、元氣良くライアントを呼びつける。彼女の足元には神父が倒れてたりするし。頭部から流血してたりするし。

「あたしもう飽きたッ！」

そう言っバットをブンブン振り回す。

「……あ、あの……、ここから更に重要な説明を……」

「主は申されましたッ！ エロゲーにオチはいらんとッ！」
ドコの主だ。

「要約するとですね、わたし達ボディガードは右脳も左脳も使わないから別にイイじゃん……ってトコロですウ」

血みどろの神父が笑顔で言及。コイツ等、やっぱダメだ。

「……それじゃ、メインデッキのプールで遊んでください」

彼は週末のお父さんみたいな声をもらした。

「そいつは無理だ！ 水着が無い！ 以上ッ！」

——ボタンッ！

そう言い残してシスター、退室。

「わたしは一応、水着持ってますけど……でも、きゃは」

——ボタンッ！

謎のリアクションで神父も退室。

「あの……ボディガードは？」

一人とり残される始末。博士は仕方ないんで、ギャラリー抜きの説明を続ける。

<午前・10時24分>——モニターに映るのは監視カメラの映像。

バイタルズ

巨大な水槽の中に佇む神の設計図。その前に立ち尽くす蒼神博士の姿。

（有機物の塊……しかし、動力源は？ 脳の一部で何だかの電気信号を確認したが……）

口元に手をあてて、モニターの前で考え込む博士。そして――

<ジカン・ヲ・ムダ・ニスルナ。ハヤク・ミツケ・ロ>

しゃべった。人体模型^{バイタルズ}が口も動かさず言葉を発した。

（「見つける」？ 一体、何のことだ……？」）

カコツ

キーを打ってファイルを閉じた。とにかく情報が足りない。いずれにせよ、本部への潜入なしには回答は得られない。彼は深く息を吸って目を閉じた。

――で、その日の夕方から夜にかけて――

廊下で金属バットを振り回し、子供達を追い回すシスターを見かけたり。神父がバスルームから卑猥な声を発してたり。メインデッキで牛丼を立ち食いしているシスターを見かけたり。神父がキッチンで焚き火をはじめて警報が鳴り出したり。船尾でゲロ吐してるシスターを見かけたり。神父が酔った勢いで首吊り自殺をはかったり…… 蒼神博士の孤独なようでやかましい船旅の1日目が終わろうとしている。

「あ、あの……茜さん……」

「なんざましょ？」

「クライアントの立場から言わせてもらいますが、ソコはボクのベツドです」

夜も更け、乗客の皆様が就寝しだす頃となり、博士はビシッと文句をつける。

「はいはいそーですとも。さあ、どーぞ」

茜はベッドの上に寝そべって博士を誘う。

「いや、そうじゃなくて……どいてください」

「ひどいッ！ 体脂肪率の高い女の子をベッドから引きずり出して、寒空に放り出すおつもりッ!？」

真夏です。

「ソファじゃ駄目ですか？」

「ダメ。わたしの様な乙女は、高級マットレスを使ったベッドで寝ないと爆死します」

そんな乙女はいません。

「と、とにかく……色々とマズイですからどいてください!」

蒼神槐・23歳、赤面。

「いゝやゝだゝよゝゝゝ」

「……よく分かりました。ボクがソファで寝ます」

クライアントが寝室から追い出された。スゴスゴと撤退する博士の後ろで、快適さにのたうちまわる茜。

(……ん?)

彼は妙な光景を目にした。リビングの片隅で壁を背にして膝を折り、背中を丸めて座り込んでいるシスターが。

「何をされてるんですか？」

「あたしも寝る」

「そんなトコですか？」

茜とは違い、まだコスプレもしたまんまだ。

「博士エゝゝ、咲チヤンのことは気にしないでエゝゝ」

マヌケな声がそう告げる。

「そうそう、気にしない。とっとと体を休めてちょーだい。あたしやもう眠い……」

——カクッ

首がうな垂れ、すぐに微かな寝息が聞こえた。寝つきが良いというより、まるで即死だ。

ピッ——

照明を落とす。部屋中に淡い闇が広がる。カーテンの隙間から月光が僅かにもれる。

（疲れた……………本当に疲れた……………）

蒼神博士はソファの膨らみにその身を沈め、目を閉じた。客船に乗って予定外の心配事が増えてしまったためか、心労で意識が溶けるのに時間はいらなかった。豪華客船のあらゆる箇所から、灯火が消えていく。とても静かに消えていく。船底にぶつかる細波から、海中の生物達の寝息まで聞こえてきそうな夜。

潮風が……………止む。

「すううう……………すううう……………」

10分も経たない内に、客室は三人の寝息ですっかり満たされていた。殆どの客室で、成金共が心地良い夢の中にトリップしはじめた頃……………

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

夜の帳が震えだした。金属の羽が大気と薄雲を裂く。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

へりだ。民間用でも報道用でもない。かといって、攻撃的な装備も見受けられない。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

とても静かに飛んでいる。チューンアップされた無音へりだ。へりはゆっくりと高度を下げはじめ、客船の真上に位置をとる。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

メインデッキのプールの水面に小さな波を作りながら、ヘリポートへ着陸した。そして、降り立つ者。数は四人。出迎える者などダレもない。ダレもこの来訪者達に気付いていない。乗客然り、船員然りだ。四人は一言も発さず、辺りを見回している。全くもって——静かだ。人も海も月も、善意も悪意も、等しく堕ちて——。蒼神博士はクッションをしっかり抱いて——。茜は満足感あふれる笑みをこぼして——。

咲は

「……さて」

動。

強襲者と迎撃者

「こちらチーム・α、到着した」

<了解。行動に移れ>

ヘリから現れた内の一人がインカムで応対し、他の三人に目配せする。四人とも真っ黒なスーツにサングラス。しつかり磨かれた革靴に地味なネクタイ。男性二人に女性二人のチーム。ヘリはすぐに離陸し、インカムをつけたスキンヘッドの男が、上着の内ポケットからPDAを取り出した。

「博士の部屋は？」

「4階の410号室よ」

「俺とプリエステスで部屋に向かう。タワーは東口を、エンプレスは西口をおさえろ」

「了解」

「さっさと済ませて帰ろうぜ」

「同感ね」

指示を受けた来訪者達が散開しようとしたその時。

「えいめ~~~~ん」

——ッ!?

彼等の死角から彼等意外の声があった。四人が振り向いたその先……ヘリポートの隅っこに佇む影が一つ。右手を真っ直ぐ真横に伸ばしてしゃがむ、不吉な人影。

「……ダレだ？」

「神の下僕」

薄雲が裂けて淡い月光が降り注ぎ、その姿を称える。

汐華咲が——そこにいた。

「う……んん……？」

不意に差し込んできた月明かりに目を射られ、ソファに横たわる蒼神博士がゴシゴシと目をこする。

「……………ん？」

彼はムクリと上半身をもたげ、半開きの目で辺りをキョロキョロ見回して——パタッ。

再眠。

「我々はPFRS本部より派遣された者だ。危害を加えるつもりはない」

「PFRS？　ほほう……つまり、クライアントの『敵』ってワケか」

シスターの眼光が不敵に輝く。

「もう一度聞く。貴様はダレだ？」

チームリーダーと思われるスキンヘッドの中年男が、毅然として立ち塞がる。

「神に仕えし敬虔なる尼僧に対して、攻撃的意志を察知ッ！　主は御許しになりませんよッ！」

会話になっていない。

「エンプレス、拘束しろ」

「いいの？　相手はマヌケな民間人のようだけど」

「構わん。本部には俺から話す」

「はいはい、了解」

額にバンダナを巻いたブルネットの女が、咲に歩み寄り肩をつかんだ。

「さあ、来なさい」

「断じてイヤです」

「痛くされたいのかい？」

「罪深き者よ、悔い改めなさい」

——ドゴッ——！

「——ッ！？——」

人間の体に何か硬い物体がぶつかるような音がして、『エンプレス』と呼ばれた女の体が宙にブワツと浮き上がり、そのまま地面に叩きつけられた。

「……どうなっている？」

一瞬、他の三名が息を止めて固まる。シスターが生脚ムキ出しにして中段蹴りを放ったから。

「タワー、手伝ってやれ。ただし、銃は使っな」

「ああ、分かってる」

今度は『タワー』と呼ばれたロングヘアで長身の男が歩み寄って行く。その間にも一撃を食らったエージェント・エンプレスが、ムクツと起き上がる。

「調子はどうだ？」

「やかましいッ」

エージェント・タワーの擲楯を振り払い、目標めがけて正拳突きを放つ。シスターは右手でソレを払いのけ、矢継ぎ早に繰り出された頭部への回し蹴りをしゃがんで避け、その姿勢から水面蹴りを放ち、相手をまた転がす。

「このガキがッ」

転がる仲間の脇を通り過ぎ、タワーが素早く咲との間合いをつめると、下段から中段へとつながる連続蹴りを繰り出し、咲の両手を防御に使わせ、一瞬の硬直時間について跳び込み気味のパンチを突き出した。

ゴッ——！

「ど~~~~よ？」

シスターの高々と上げられた膝がパンチを受け止める。タコみたいに柔軟なボディだ。

そして、反撃。

ドゴツ——！

「くっ……」

防御に使った脚をそのままの高度で素早く伸ばし、つま先に力をこめて相手の喉に突き込んだ。タワーは2、3歩退いたが、バカにするようなシスターの仕草にイラついて、無造作に飛びかかる。シスター、反転。体をストンツと落とすようにして地に両手を着き、絶妙のタイミングでカンガルーキック！

「おぐッ！？」

まともに命中し、背広をクシャクシャにしながらタワーも転倒。

「行くぞ」

今度はスキンヘッドの男と、ドレッドロックスの『プリエステス』と呼ばれた女性エージェントが動く。

「来いよ来いよ来いよ来いよッ！」

挑発しつつシスターは回れ右ッ！そしてダッシュ！

踵を返した彼女の背を、エージェント二人が追う。走っていくその先にはプール。もちろん——ダイブ。

バツシャアアアアアアアアアアアアアアア
ツツツ——！

派手に飛沫を上げて沈む、沈む、沈む……ブクブク。

「んん……むうう……？」

茜がベッドの上でゴロゴロと寝返りをうつ。シーツに巻かれて春巻き状になる。体が締め付けられて苦しい。特に腹部が苦しい。

「ううう……ううう……ふひいいい……」

脂汗が全身から抽出されて、天然油で揚げ春巻きが出来そうだ。

ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ

彼女は渾然とした意識の中で、心臓の鼓動の高まりをハッキリと感じていた。月明かりは茜の顔面にも降り注がれ、不吉な空気の発

生を伝えようとしている。

「……………あ」

ガバツ——！

起きた。

「エロオオオオオオ————い！！」

トテトテテ……

意味不明な寝言を口走り、ゆっくりと歩き出した。

ゴソゴソゴソ……

収納スペースから旅行用の特大スニーカーを引っ張り出す。

「あ~~~~う~~~~……………眠ううい……………」

どう見ても寝惚けた状態。彼女はスニーカーを引きずりながら客室から姿を消した。

ブクブク……………ブクブク……………

プールを囲む夜間遊泳用のライトがつけられ、飛び込み現場を照らし出す。

「どうするエンペラー？ 手をこまねいているヒマはないよ」

「……………仕方ない、行くぞ」

スキンヘッドの中年男……………エージェント・『エンペラー』は仲間に手で合図し、プールサイドから離れていく。が、エンプレスだけは自動拳銃を抜いて、プールの水面に銃口を向けた。

オートマチック

「よせ、エンプレス」

「どうして？」

「余計な痕跡を残すな」

「あんなフザけたガキに……………やられたまま引き下がるかッ！」

「冷静になれ、バカ者。サイレンサー消音器もつけずに発砲する気か？」

「……………っ、分かった……………」

パシュッ！！

「なッ——！？」

エンプレスがプールの水面から視線を逸らしたその瞬間、彼女の親指が千切れ飛んだ。

「くううああアア！！」

拳銃が地面に転がり、垂れ落ちる血が赤黒い華をつくる。

「何だッ！？」

数秒遅れて他の三人が事態の異常に気づき、一斉に拳銃を抜いた。
「何時だと思つてんのよぉ……」

遠くの方に放置されたデッキチェアに人影が。目をゴシゴシしながら文句をたれる神父様、柏木茜その人。手には消音器付きの自動拳銃^{マチック}が握られていた。

「プールに沈んだガキの仲間か！？」

「えゝとね……わたしは柏木茜ッ！ 19歳のO型ッ！ 趣味は年下の男の子にエッチな質問してドキドキさせることッ！」

注目された途端に眠気が吹き飛んだらしく、無駄にハイテンション。

で——

ズルズルズル……ズルズルズル……

ドコにあったかは知らんが、神父は地引網を引っ張り出してきて、プールへ投げた。

「……………」

「……………」

予想外の展開にエージェント達は沈黙。3、2、1、ズルズル……手繰り寄せられた網にかかっていたのはもちろん、ズブ濡れのシスター。

ビチビチッ、ビチビチッ！

跳ねてる。活きが良い。

「連中を海へ投げ込め」

エンペラーの合図でタワーとプリエステスが拳銃を片手ににじり寄る。

「はい、ストップ!!」

網の中から這い出たシスターが、両手を高々と上げた。

「……………」

タワーとプリエステスの両名が思わず足を止める。

「あたし等は仕事の都合上、不審者を船の中に入れたくない。で、そっちはうちのクライアントに用がある。このジレンマを打開するには……………さあ神父様ッ！ 言っておやりッ！」

「モザイクは人類の立派な文化だコノヤロー！」

ズブッ……………

シスターの指が凶器となって神父のデリケートゾーンを直撃。

「おオオオふウウウ……………（泣）」

悶絶。

「1対1で来な。勝者は船の中へ、敗者は去る」

シスターがものすごく真剣な眼差しで言う。

「貴様等が約束を守る保障は？」

「特には無い」

「……………いいだろう」

エンペラーは拳銃をホルスターに戻し、サングラスを外して一歩前に出た。

「二人とも下がれ」

「……………了解」

場の空気を察知して、タワーとプリエステスが退く。

「茜、分かってるね？」

「はいはっい。正々堂々だあっい好き」

パシユッ！ パシユッ！

「——ッ！？」

タワーとプリエステスが銃弾を食らって続けざまに倒れ伏す。

「貴様等ッ！？」

「“特には無い” って言ったでしょうが、この阿呆ッ」

咲はズイつと一歩前に出て右手を突き出すと、人差し指でチヨイ
チヨイつと挑発した。

船上の激戦と静かなる監視

「外道がッ」

ガ
シ
ャ
:
:
:
:

憤怒の表情でエンペラーは外したサングラスを握り潰す。そして、彼の両脇では……

「ありやま」

咲と茜が瞠目する。凶弾に倒れたハズのエージェント両名が、ムクリと起き上がった。

「防弾スーツかね？」

しかし、胸元からは血が滲み出っていて、Ｙシャツを赤黒く染めている。

ダッ！

タワーとプリエステスは左右に別れて弧を描くように疾走し、一瞬間時間においてエンペラーが跳び上がり、宙を舞う。これに対してシスターの前に神父が滑り込み、飛び掛って来るエンペラーを迎撃。9ミリ弾が彼の二の腕をかすめるが、着地と同時に拳銃を蹴り飛ばされる。

「じりゃま」

シャツ

袖の中から手の平サイズの予備銃が滑り出し、エンペラーの額を狙った。が、彼のアクションに気を取られた神父の側頭部に、プリエステスが銃口をゴリツと押しあてる。シスターの背後をとったタワーは彼女を羽交い絞めにする。が――

「せいやあアアアアアアア
ツツツ!」

「うおッ!？」

ブオツ
――
！

羽交い絞めにされたまま、上半身を8の字を描くようにしてブンブン振り回し、タワーの拘束を力任せに引き剥がしてしまう。

「そしてえええええ！」

無理矢理引き剥がされ、空中に投げ出されたタワーの胸ぐらをガツチリつかみ、巴投げの要領で投げる……………神父めがけて。

「逝けやあああああッ！」

と、シスター。

「来いやあああああッ！」

と、神父。

二人の息はピッタリだ。

ドガッ…………

神父にタワーが丸ごと命中。

「…………ゴメンね！」

シスターは気を取りなおして構え直す。倒れてピクピクしてるパトナーはほったらかしで。

「どうあっても邪魔する気？」

「神様は見てますからッ！」

ダンッ！

カナリ低い姿勢でプリエステスがタツクル——速いッ！

「マジッスか！？！」

タツクルを仕掛けた彼女の背を蹴って、エンペラーがまたもや宙に舞い、シスターの顔面めがけて突き刺すような蹴りを放つ。これを素早く回避するが、わずかに崩した体勢のスキについて、プリエステスのタツクルがクリーンヒット。

「だあアアアアア~~~~ッ！！！」

まともに食らって背中を地面に擦り付けながらブツ倒れる。

「イタイっ！ イタイっ！ 背中がイタアツイ！ アツアツっ！ かゆいうまー！」

とにかく大変だ。

「このガキめッ」

プリエステスがマウントポジションをとった。

「コレを見なさい」

彼女はシスターを見下ろしながら、自分の胸元をガバツとはだけさせる。9ミリ弾の直撃による生々しい出血……その弾痕めがけて自分の指を突っ込んだ。

グシュグシュ……

「おいおい……」

シスターの頬に血の滴が垂れてきて赤黒く汚す。何の苦痛も感じないような表情……やがて傷口から。

——コトンッ

弾丸が素手で摘出された。

「我々は『ファースト・ヒューマン強化人間』よ」

「ほわっつ?」

シスターに難しいカタカナは通じません。頭がパカリと割れました。脳には“恋せよ乙女”と書かれていました。意味は不明。

「特殊な投薬処理で運動能力と免疫機能を人工的に高めた人間よ」
「なるほど、なるほど……わかりませんッ!」

「……………」

ガッ——!

少々イラつき気味に咲の頬を拳で打った。

「やりやがったなッ」

シスターの口元が歪んだ。

グイッ!

「うッ!??」

「こんな展開どーよ?」

ネクタイをつかまれて強引に引き寄せられ、お互いの顔面が肉迫する。そして——
ガブッ!!

「あぐツ!？」

プリエステスが苦悶の声を上げ、上半身を大きく仰け反らせた。

「せいやつ!」

怯んだところに腰を突き上げて敵を引き剥がす。

「クソガキがアア……（怒）」

鼻から大量出血。つまり、噛みつかれた。

「野蛮人だーっ、野蛮人が出たぞオオオ!」

ほったらかしになってた神父が遠くの方から野次をとばす。

「神を冒瀆する子羊には、ちよつと天罰がすごかったりするよ〜」

「

シスター、本気。」

「この二人は何者?」

PDAのモニターを見つめながら白衣の女が呟く。モニターには現在、客船のメインデッキで発生している攻防の様子が、監視衛星を通じて送信されていた。

グウオオオオオオオオオオ……

エレベーターが重苦しく唸って、ゆっくりと降りていく。海中を垂直にはしった巨大なシャフトを移動して、海底に建造されたP4施設に到着した。

「……ふう」

ドアが開いてその先に見える光景に、彼女は俯きかげんで溜め息をついた。検査設備が整った巨大空間。その中央は海底の一部がむき出しになって、重厚な強化ガラスで囲まれている。その隔離された海底の一部は砂と岩石が混じり合い、白衣姿の職員が十数名立っていた。ただ……何か様子がおかしい。特に何か調査しているワケでもなく、その場にジツと立って、時折、ビクリと体をうねらしている。言葉を発することは無く、目も虚ろ。そして、彼等に囲まれるようにして砂地に突き刺さっているのは——『人型』。半透明の人の造形に、人間を構成する組織がぎっしりと詰まったモノ。

「経過報告を」

白衣の女はインカムをつけてボソツと呟く。

＜ある程度の脱水症状は見られますが、脈拍・血圧とも正常。ロボットを使った血液検査でも、ウイルス・寄生動物・異常タンパク質・毒物等はいずれも確認されませんでした。人体としては至って問題ありません＞

「目新しい成果は無しか……」

＜はい。ただし、脳波パターンに通常にはない徴候が見られます＞
「どういうこと？」

＜扁桃と海馬の間の神経ネットワークが同時に活性化し、異常な数値を示しています＞

「それは……『恐怖』を感じている？」

＜おそらく＞

「原因は？」

＜今のところ不明です。ただ、神の設計図バイタルズから一定の『信号』が送られて、大脳辺縁系が受信しているようです＞

「……脳をハッキング？」

＜かもしれません＞

（くそっ……）

彼女は悔しそうに下唇を噛み、踵を返してエレベーターに。中には5、6歳くらいの男の子が一人……いつの間にか佇んでいた。

「蒼神博士の拉致失敗を想定し、ヘリの準備を」

＜宜しいのですか？ 支配人オーナーが許可するとは思えませんが＞

「許可は必要ありません」

＜衛星による監視は軍部も行っていますが＞

「結構よ」

白衣の女と少年を乗せたエレベーターはゆっくりと上昇していった。

船上の激戦と静かなる監視（後書き）

海馬は、大脳辺縁系の一部。特徴的な層構造を持ち、脳の記憶や空間学習能力に関わる器官。

拉致失敗と誘拐成功

右の突きをヒラリとかわし、左の手刀を手の平ではじき、真っ直ぐ打ち込まれてきた中段蹴りを両手で押さえこんで内腿をつかみ、持ち上げるようにしてブン投げる。

「せいッ！」

強制バク宙をさせられたプリエステスの背中めがけて、ねじり込むような蹴りをブチかます。

「ぐふッ！」

派手にブツ飛び、鉄柵に叩きつけられた。

「悔い改めないと神様泣いちゃうよ〜」

シスターはウインクした。何故かした。

「……どうなっている？」

エンペラーがたじろぐ。ひょこつと現れた近所の悪ガキみたいな連中が、とんでもない障害となつて立ち塞がっていた。

（ならば……）

彼は神父の方をキツと睨みつける。

「ええ〜……マジでエエエ〜（汗）」

相方に見捨てられてふて寝していたが、面倒臭そうにウネウネと這いだす。

ダッ——

エンペラーは顔面の前で両腕をクロスし、防御体勢で突進ッ！

「よいしろうッ！」

神父はそのメタボ体型に似つかわしくない俊敏な動きで起き上がる。

パシユッ！　パシユッ！　パシユッ！

地面を蹴って後ろに大きく退きつつ、両袖から滑り出した予備銃バックアップ

で迎撃する。9ミリ弾がエンペラーの皮膚を引き裂き、えぐる。が、突進のスピードは衰えることなく、そのままの勢いでヒット！

「ありゃま」

神父の体が宙に弾き出され、綺麗に弧を描いて地面に叩きつけられる。そのままゴロゴロと転がって、プールの角に脳天をゴリツとぶつけた……ゴリツと。

「こりゃーたまらん！　こりゃーたまらん！」

カナリ痛いらしい。

「潰すッ」

不吉な言葉を呟きながら、エンペラーが追い討ちをかけようと迫る。その殺気に反応して素早く立ち上がった神父は、飛び込み台の梯子に手をかけた。

ガチャ……

「ここまでだ」

「はうッ!？」

梯子に手をかけた途端、右手首に手錠がかけられた。親指を失って憤怒の形相のエンプレスが立っていた。

「セッ！」

シスターが突っかける。3メートル近くあった間合いを一呼吸で跳び越え、タワーの頬を直突きがかすめる。彼は辛うじてかわした体勢から左の回し蹴りを放つが、シスターの頭上を空振る。しかし、その足は着地せず、宙で方向転換して相手の右頬を打った。

「あうちッ！」

シスターに被弾したが、彼女はヒットと同時に蹴りの方向に合わせて体を半回転させ、中腰で水面蹴り。

ドッ——！

タワーの体が受け身をとれず、地面にうちつけられる。

「ごー・とうー・へるッ」

シスターの振り上げた鉄拳がタワーの顔面を狙う。が、命中する

よりも一瞬早く、タワーが下半身を浮き上がらせ、寝そべった状態で脇腹に二段蹴りを叩き込んだ。

「オフッ」

カウンター気味に入って体が大きくよろめき、飛び起きたタワーが喉に掌底を打ち込んだ。

「うげッ……」

まともに食らえば呼吸困難もありうるダメージだ。

「個人が組織に勝てると思ったか？ 小さい者が大きい者に勝てる道理はねえよ！」

そう言つてタワーが指差す方向には……

「ここまでよ」

飛び込み台の先っぽに、後ろ手に手錠をかけられた神父が立たされている。その背後には、腸が煮えくり返ったエンプレスの姿が。

「咲チャーン！ こわい！ 高いトコきらい！」
泣いてる。

「茜ええええ、ちょっと聞いてくださるううう！？」
相方の危機、無視った。

「それ以上暴れるなら、このガキを突き落とすッ！」
手錠付きですんで、もちろん溺れます。でも、彼女達に常識的な段取りはない。

「よし、質問だ！ あたしは弱いか！？」

「最っ強であります！」

「あたしは腰抜けか！？」

「百戦錬磨であります！」

「あたしは小さいか！？」

「Aエエエエカップであります！」

「よ……し良く言った！ 逝つてよし！」

「ああアアりがとうございまアアアす！」

——ピョーン

「バカなッ!？」

跳んだ。エンプレスの手をすり抜け、手錠をかけられたまま。

「来週もまた観てくださいねエエエエエエ!」

エンプレスが慌てて手を伸ばしたが、その手は空をつかむ。次の瞬間、派手な飛沫が上がって水面が大きく揺らぐ。ただ、その揺らぎとは関係なく、水面からニユツと突き出たのは……………銃口。

「——ッ!？」

パシユッ!

下をのぞきこんだエンプレスの左肩を銃弾が穿ち、飛び込み台から転げ落ちる。

(後ろ手で撃ちやがった——!?)

ありえない芸当を目の当たりにして、エンペラーが息を呑む。

「だからまた来週って言ったのにねえ…………ふうがふうぐ!」

相方の仕事をすっかり確認したシスターが、何だかスッキリした面で構え直す。救助してやる気は毛ほども無いようだ。

「ナメんなよガキがッ!」

タワーはおもむろに上着を脱いで、敵めがけて投げつけた。
タンッ——!

上着が宙を舞うのと同時に、タワーも跳んで蹴りの体勢。不意に視界を遮る物体が投げつけられれば、大きく回避するか、その場で叩き落とすか。が、シスターは勢い良く被さってきた上着を驚掴みにし、グルンと体を一回転させ、相手めがけて投げ返した。

「うおッ!？」

想定外の応酬にタワーの体勢が大きく崩れ、何もできぬまま相手の目の前に着地してしまう。

「ていッ!」

ドカッ——!

顔面に足裏が直撃——ダウン。

「こちらα! 現在襲撃を受けている!」

この状況に危機感を募らせたエンペラーが、インカムでヘリのパイロットに呼びかけた。

<何事だ？>

「乗客と思われる女が二名！ 一人は拳銃を所持！ もう一人は……」

と言つて、視線を移したその先では……

プリエステスが滑り込み気味にローキック。シスターはこれを垂直ジャンプで回避し、空中で下半身をねじって回し蹴りを放つ。これを予測していたプリエステスは、腰を落として避け、着地したシスターの胸ぐらをつかんで自分に引き寄せて密着し、目一杯の力をこめてヘッドロック！ プリエステスの腕がグイグイと喉に食い込み、動きを縛る。

「このまま海に放り出してあげるわ」

ヘッドロックをかけたまま回転。ジャイアント・スイングの要領で遠心力が加わり、ブンブンと空を切る音が大きくなる。

「出るッ！ 出るッ！ 中身が出ちゃう~~~~~！」

「さあ、逝きなさい」

バツ——！

人間一人を吹っ飛ばすのに十分な遠心力が充填され、タイミングをはかりヘッドロックを解いた。が……

「懺悔はここまで」

「——え？」

——スダンッ——！！

ものすごく痛々しい音がして、プリエステスの後頭部と頸椎が地面に叩きつけられた。

（何てヤツだ……！）

イヤな汗が体中から吹き出るのを感じた。エンペラーは見た……シスターの体が宙に投げ出される瞬間、プリエステスのネクタイが

つかまれ、遠心力と咲の体重から生じた引力により転倒。もちろん、受け身など取りようもない。

「さて、残るは一人」

エンペラーにシスターの不吉な視線が向けられる。

「へりを戻せ……」

<蒼神博士はどうした？>

「いいから戻せッ！」

パイロットに怒鳴りつける。

「茜え……、大丈夫か……い？」

プ……カ、プ……カ……………

ぼつてりしたお腹を夜空に突き出し、ラッコみたいに浮いている。

「体脂肪率に救われました」

まさに。

「はいはい、今すぐ引き上げますからね」

ズリズリズリ……

そう言って持ってきたのはさつき使った地引網。

「やめてッ！ マジやめてッ！ 咲ちゃん絶対痛くするから……！」

バシャ……

もう遅い。神父のプニプニした肉体に網が絡まっていく。暴れる度にもつと絡まっていく。巻かれていく。引き上げられる。

ドキドキキッ……ドキドキキッ……

網の中から目にしたシスターの御顔は、とつても恋する5秒前。

「ふあいとおおおおおおおおおお——ッ
ッッ——！」

両腕にビキビキと血管が浮き出し、人間一人を包み込んだ網が——

「いやああああああああああ——ッ

「ッッ！！」

「ザパアアアアアアアアアア~~~~！！」

跳ね上がる水飛沫。浮き上がる女体。空を切る音。即ち——人体砲丸投げ。

「……………何だ？」

この怪現象に気付いたエンペラーが硬直する。
「ブオッッッ！！」

放たれた。

「ちッ……………」

あまりのアクションに意表をつかれはしたが、対象物の大きさから回避は難しくなく、人体砲丸は彼の肩をかすめただけ。ただし……

「パシユッ！　パシユッ！　パシユッ！」

網の中からという完全なる死角からの発砲。

「あぐッ！？」

肩先と二の腕から血が吹き出る。神父の方は仕事を終えて地面を派手に転がり、ヘリポートの鉄柵に後頭部をゴリッつぶつけて停止……………ゴリッと。

「おおうエエエエエ……………（泣）」

おまけに吐いた。

「救済終了」
ゴスベル

圧勝。自らに拍手を送りながら、シスターは胸元で十字を切った。
その直後……………

「ヒュンヒュンヒュンヒュンッ——！！」

「なんとオ！？」

背後から不意に巻き上がる風。彼女の体を通つかのように照射さ

れる、強烈なサーチライト。無音ヘリがその威容を現した。

「神父様ッ！」

「えいめくくん！」

パシュッ！ パシュッ！ パシュッ！

水浸しのプールサイドに体を滑らせながら、ヘリめがけて連射。しかし、銃弾はヘリの機能に障害をもたらすほどのダメージは与えられず、軽く火花を散らしただけ。

「装甲がブ厚くて9パラじゃ無理っぽくくい！」

「おによれ！」

ヘリが緊急着陸する。

「タワー！ プリエステス！ 早く来いッ！」

「しかし……」

「我々が確保されたら、PFRSの法的接收を許すことになりかねん！」

「エンプレスはどうするの？」

「時間が無い……急げッ！」

一瞬、エンペラーがプールの方に目をやった。仲間の姿は確認できない。彼は悔しさに歯を噛み鳴らしつつ、ヘリに逃げ込む。

ヒュンヒュンヒュン――

「咲ちゃん、どーする？」

「別にいいじゃん。ギャラリーもないし」

ヘリは敗残者を乗せ、闇の帳へ去って行った。

5時間後

「ん……うう……」

水平線から朝の領域を知らせる日がもれてきた。豪華客船の重厚な船体も、その恵みを欲してゆっくりと脈拍を上げていく。

「あふう……」

差し込む朝日が、ソファに横たわる青年を呼び起こそうとしている。蒼神博士はムクツと上半身をもたげ、手の甲で両目をゴシゴシとこする。そして、朝日の差し込んできた方向へ反射的に視線を向けた。

（2日目か……よかった、何もなくて）

彼は寝惚け眼のまま、辺りを見回した。

茜——自分が使うハズだった瀟洒なベッドで爆睡中。

咲——リビングの隅っこで丸まって静かに就寝中。

「……どうしたものか」

彼は幸せに満ち足りた茜から躊躇なく毛布をひっぺがし、咲の背中に優しくかけてあげた。博士は何だか照れ臭くて苦笑した。彼は洗面所のドアを開けて、バスタオルを用意する。汗ばんだTシャツと下着を脱いで、洗濯機に放り込む。そして、シャワー室のドアをガチャ。

「……………」

「……………」

ボタンッ

ドアを閉める。博士が全裸のまま呆然として突っ立っている。

「え……と……え……と……（汗）」

もう一度、ガチャ。

「……………」

「……………」

ボタンッ

再度閉める。

「……んん？　ちょっと待てよ……（汗）」

で、更にもう一度ガチャ。

「……………」

「……………」
寝惚けちゃいない。見間違えちゃいない。猿轡をかまされて、簀巻にされた女性がバスタブの中に放り込まれている。

「……………」
「……………」
見つめ合うしかない二人。女性の方の視線が、ちよっぴり下半身に向かったりする。

ボタンッ——！

「咲さん！！ 茜さん！！」

彼はバスルームから脱兎のごとく駆け出して、二人の名を叫ぶ。

「は~~~~~い……」

ものすごく間延びした声をハモらせながら、バカ面コンビが登場。

「おはようございますッ！ そして、説明してくださいッ！」

ガチャ

「……………」
「……………」
「……………」

今度は四人分の沈黙。

ボタンッ

閉める。

「た、大変よ、茜ッ！ 朝っぱらからこんなコアなプレイを！？」
「わたし達も博士のバイオレンス・ステイックで手込めに！？」
どうしようもなくわざとらしいリアクション。

「で、コレは一体、どういう事なんですかッ！？」

慌てふためきつつトランクスを穿き直す博士の背中、なんだか小さい。

「女の人ですな」

「そうですねエ」

「……………」

「こりゃ誘拐ですな」

「そうですね」

「……………」

誘拐？

秘密協定と裸エプロン（♂）

「ドコのダレですか！？ これは立派な犯罪ですよ！！」

「ひどいッ！ あたし達がやったと！？」

「見知らぬ女性が部屋に侵入して、自分を縛ってバスタブに入った
……とても？」

博士は被害女性をビシッと指差して問う。とにかく、まず助けて
やれよ。

「んーッ！ んーッ！」

声を出せない被害女性Aさんが、バスタブの中でバタバタしはじめた。

「むッ、こりやイカン！ 寒くて震えとる！」
夏場です。

「じゃあ、バスタブを熱湯で満たさなきゃ！」

「死んじゃいます。」

「もういいです」

博士は二人をバスルームからつまみ出す。

「大丈夫ですか？」

バスタブの中の女性がやっと救助される。猿轡を取ってやると開

口一番に……

「どういいうつもりですか、蒼神博士？」

「……はい？」

いきなり自分の名を呼ばれ、パンツ一枚男は固まった。

「私一人を人質にとったくらいで、PFRSが取引に応じるとでも
思いましたか？」

「——ッ！？」
パフリス

迂闊だった。『PFRS』の名が出た以上、この女は客船のクル
ーでも客でもない。

「君は……ダレだ？」

「『スノー・ドロップ』のエージェント・エンプレスです」
女はキツと博士を睨みつけて名乗った。

（バカな……この船を占拠したのか！？）

いや、そんなハズはない。追及の矢面に立たされているPFRS
が、大勢の民間人を前にして秘密工作などありえない。

「『フリージア』の襲撃が失敗した後も、本部はアナタの動向を衛
星で監視していました」

「それは……^{オーナー}支配人の指示ですか？」

「ええ、そうです。本部が最も危惧したのは、博士が実情を正しく
理解せず、間違った情報をマスコミに垂れ流す事」

「ボクは……上級職員として神の設計図のプロジェクトに携わって
いました。何が正しくて、何が間違っているかは把握しています」

「博士が何を把握しているかは、私達にとって問題ではありません。
^{オーナー}支配人がなさる事に間違いなどないのですから」

「なら、どうして彼はフリージアをよこしたんですか？ 明らか
に口封じじゃないですかッ」

「……本来の目的は『殺害』ではありませんでした」

「え……？」

「監視衛星の映像は軍部に中継されており、軍部からの命令は『拉
致』でした」

「なら、フリージアの件は……^{オーナー}支配人の独断？」

「ええ、そうです」

エンプレスの表情が申し訳なさそうに曇った。何かおかしい……
最大の出資者である軍部の指示を無視しても、PFRSには何の得
もない。

「そういえば、アナタは一人でこの船に？」

「いいえ、私は……」

バンッ———！

会話を中断させようと、バスルームのドアが勢い良く開く。

「博士エエエエエエエ！ 朝シャンしたあああああ〜い！」

御風呂セツトを脇に抱えた咲と茜が元気に乱入し、有無を言わずに強引な空気を噴出させている。

「え、あの……まずはこの女性を……」

「脱ぐよ！ 叫ぶよ！ 訴えて勝つよ！」

「はい、出ます」

パンツ一枚男は足早に退室。

「――さて」

咲の口から冷やかな声が。そして、蛇口が目一杯にひねられた。
「うぶッ！？」

大量の冷水がエンプレスの顔面を打つ。

「ど〜〜よオ？」

とても楽しそうな咲の笑顔。その脇では茜が小躍りしながら脱衣中。

「拷問のつもり？」

「……拷問？」

「こんなことで私から情報を引き出せると思うなッ」

「……情報？」

「とぼけるなッ！」

冷水を浴びながら抗議の声を上げる。

「咲チャ〜ン、この才姉サンって、わたし達の社会的立場を勘違いしてるみたい」

「むッ、そりゃイカン。では自己紹介だ。あたし等は調査会社の社員。つまり、民間企業のサラリーマンだ。24時間働けますかって？ 無理だバカヤロー！」

「……調査会社？ 蒼神博士に雇われたシークレット・サービスか？」

「違ッッ！ あたし等は傭兵でもスパイでも何ちゃらエンジェルでもねえ！！ 納税に苦しむ国民様だッ！！」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「身分証は？」

「見やがれッ！」

そう言つて社員証をズイツと突き出した。

「……『イレギュラー』？」

泥棒を見るような目で、社員証と咲の顔を交互に観察する。

「これにより、民間企業の栄えある社員であることは証明された！

あたしこそが汐華咲、18歳！ 座右の銘は“アンチ・萌え”！」

「で、わたしが相方の柏木茜、19歳！ 健康診断でひっかかる度に、枕を涙で濡らすメタボリック！ いやッほオオオオオオオオオオオオ
ッ」

朝からブチギレてる少女はブラ（Fカップ）を振り回す。

「アナタ達……本当に民間人？」

「おうよ、ミンミンでカンカンよ」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「で、数時間前に殴り合いしといて今更なんだけど、自己紹介よろしく」

「フザけるなッ！ 人を誘拐しておきながらッ！」

「おいおいおい、人様のクライアントを拉致ろうとしたプロの不審者が、この状況で上から目線かね？ どー思うよ？」

シャアアアアアアアアアアアアア————

すぐ傍でシャワーを浴びる茜。ウエストのお肉がプルプルと愉快に震えてる。

「今日からああアアアア……」 炭水化物ダイエットオオオオ……

」

「やかましい」

——パソコンッ

近くにあった桶を投げる。当たる。アホが倒れる。

ドボドボドボ……（水位は胸元まで上昇）

「PFRSは軍部からの出資を受ける国営企業……つまり、私は政府の執行権を委ねられた役人よ。蒼神博士を強制送還するよう命令を受けた。これは法に則った正当な行為だッ！」

「はいはい、そーかい。ただねえ、御役人様には理解できない苦勞が巷には溢れとりましてね。きっちり仕事こなさねえと依頼料がパア」

「現金ならPFRSが賠償してくれる」

「……って言うてるけど、どうするよ？」

シャアアアアアアアアアアアアア————

「悪の秘密組織みたいなトコから現金収入得たくな〜い！ モーレツに反対ッ！ 児童ポルノ賛成ッ！」

社会的にマズイ発言を垂れ流しながら、全裸少女が拳を振り上げる。

「……ってなワケ。うちは信用と信頼で経営を維持しとるんで」

「蒼神博士はPFRSの機密情報を盗み出し、非人道的な実験をしているなどとマスコミに公表した！ そんな彼に加担するのか!？」

「ん〜……親指は痛むかね？」

咲は話を逸らし、ビニール袋を取り出した。中には……人間の手の指。

「……ソレがどうした？」

「いやぁスゴイよねえ……根元からフツ飛ばされたのに、大した処

置もせず出血が止まってるし。他の連中も胸に撃ち込まれたのに致命傷にもならん」

「だから？」

「“非人道的な実験”とやらは、ホントに無かったのかねえ」

「……………」

ドボドボドボ……（水位は首まで上昇中）

パンツ——！

オープン・ザ・ドア。

「博士エエエエエエエ！」

ドアの前に姿は無し。リビングにも無し。寝室も同様。キッチンに……居た。

「冷蔵庫の野菜室をパンツ一枚でゴソゴソしているその人ッ！」

「な、何でしょう…………？」

「フースト・ヒューマン強化人間』とは何ぞや？」

「え？ あ…………は、はい。フースト・ヒューマン強化人間』とは、人工的に作成した酵

素で遺伝子疾患の遺伝子配列を修復しており、病気にかからず外部からの物理的ダメージも、驚異的なスピードで回復する機能を有した者です」

「なるほど、よく分らん」

不敵に微笑みながら言うセリフではない。

「それはそうと…………あの女性はPFRS本部に常駐するSPですよ。どうしてバスタブの中に？」

「おおっと！ イカンイカンっ！ 水を出しっ放しだ！」
ボタンッ——！

そう言ってまたもやバスルームへ。

「ハイっ、ユーー——！」

シャンプーハットを装着した茜が妙なポーズで指差してくる。
「どけいッ」

なんとなく邪魔だったんで、シャンプーハットを奪って捨てる。

「目がツ！ 目があああああああッッッ！」

期待通りシャンプーが目に入って、悶絶。

「ちよつとさあ……取引といかない？」

威圧的な瞳でバスタブの中の被害者を見下ろす。

ドボドボドボ……（水位は口元まで上昇）

「……取引だと？」

——ザバンッ！

エンプレスの髪が鷲掴みにされ、顔面が冷水めがけて荒々しく突っ込まれた。いち……に……さん……し……ご。

「……ぶはッ！ げふッ、げふッ！」

不意に呼吸をやめさせられ、彼女の顔はクシャクシャだ。

「まずは話を聞けや、役人様」

「や……やかましい！ こんなマネをして——」

——ザバンッ！

いち……に……さん……し……ご……ろく

「……ぐへッ！ げふッ、げふッ！」

容赦無し。

「いいから聞け」

「う………」

髪を掴む手に尋常ならざる力がこもっている。咲の顔面が超至近距離まで近づき、エンプレスの視界を占める。

「あたし等はさあ、あくまで“調査会社の社員”でいたいワケよ。

だから、アンタから博士に色々しゃべられると困るんだよねえ。昨晚のコトとかさあ」

「……そ、それで……？」

SPとしての忍耐が萎縮する。

「PFRS本部まで無事に博士を送り届けるのが仕事。もちろん、

アンタには同行してもらってから、その間は口裏を合わせて欲しいワケよ」

「やはりな……博士をダシに、PFRS本部に侵入するのが目的か。一体、何者だ？ 何の用があるの？」

「用？ え……と……茜え、何か用事ある？」

「別にいい、特になあぁあし！」

とりあえず、今はムダ毛の処理中みたいですのでモザイクをください。

「もちろん、同行はする……博士を連行するのが当初の任務だからな。だが、貴様等のような危険人物と取引などしない！」

「へえ、ならさあ……」

不意に咲がエンプレスの耳元に口を近づけ、ソツと囁いた。その囁きでエンプレスの興奮が急に治まっていく。

「……いいだろう」

「よろしい、よろしい」

取引が成立した。

10分後

ボタンッ――

「博士ッ、風呂空いた……って、うおッ！」

「はい？」

料理をする音が聞こえる。キッチンには蒼神博士が立っている。

もちろん、トランクス一枚。その上からエプロン着用してるもんだから、正面から見るぶんには裸エプロン。

「うほッ」

咲がいけない声を出す。

ボタンッ――！

バスルームへ再度突入。

「茜、大変ッ！ 23歳の美青年がキッチンで裸エプロンに！」

「まあ、なんて卑猥なッ！ 早速録画ねッ！」

バタバタバタッ――

二匹のケダモノは縛られたままのエンプレスを残し、バスルームを飛び出していく。

（くそッ……）

たかだか十数分で終わる任務のハズだった。

（……どうする？）

任務の性質上、PFRSからの救援は期待できない。となれば、本部への潜入作戦に同行して、自力で帰還するしかない。先程の取引内容が頭の中をよぎる。彼女はスーツの所々からジョロジョロと水を垂らし、立ち上がった。

SPの事情とパンダ&ライオン

2日目、夕方。

「ふう……」

たちこめるミストの中に溜め息が流れる。六角形の少々狭い空間には雛壇があり、その1段目にバスタオルを下半身に巻いた蒼神博士がいた。他の客は見当たらない。ミストサウナの外にある人工温泉にも人影は無い。

（……………）

今までの喧騒がウソだったかのように、心が落ち着いていく。和やかな気持ちになって考えがまとまってくると、つい先日オナーのニュース映像が脳裏に甦る。PFRS支配人と傍らに傳く白衣の女性。

「……………ッ」

女性の顔が脳細胞の中を泳ぐ。それに合わせてジワジワと汗が噴き出してくる。

カチャッ

——！？

男性客が一人入ってきた。反射的にビクッと体をよじらせた博士を少々訝しがりながら、雛壇の最上段に腰を下ろす。

（落ち着け……とにかく落ち着け）

人が入ってくるのは当たり前だ。しかし、自分はこれほど無防備でいいのだろうか？　そう思うと、背中にありもしない気配を感じたりする。斜め後ろに座った小太りのハゲオヤジが実は………ということもありうる。大金を抱えた人間が、周囲の者達全てを強盗と見てしまうように、自分の視界で動く物全てが危険物に見えてしまう。

「すう……はあ……」

肺一杯にミストを吸い込む。世界は平和だ。人類は笑顔だ。神様は正しい者に微笑む。

カチャッ

！？

「……………」
「……………」

ドアを開けた本人と博士の目が合った。相手は一言も発さず中に入って来ると、周囲の様子をしっかりと確認した後、博士の隣に座った。

「え、え……と……あの……」

「何か？」

「……いえ、なんでも……」

「そうですか」

男湯のミストサウナにスーツ姿の若い女性が入って来た。

「改めて自己紹介しておきます。私はエンプレス。スノー・ドロップのメンバーです」

「は、はあ……」

「成り行き上、こうなってしまったからには仕方ありません。博士に同行します」

「えっ……本部にですか？」

本部のSPに見張られていては、潜入作戦など成功するハズもない。

「私はチームを抜け、単独で博士の説得にあたるよう、特別に指示を受けました（咲に言えと言われた）」

「じゃあ、この客船にアナタの仲間は……」

「もちろん、いません」

「……そうですか」

「バスタブに転がっていたのは、特に意味はありません（咲に言えと言われた）」

「は？」

「特に意味は無いのです！」

顔を少し赤らめて、ワケの分からない力説をされても困る。

「ところで……蒼神博士はPFRSの事をどれだけ御存知ですか？」

「……？」

彼女は何か言いたげだった。

「ボクがPFRS本部に配属されたのは、『神の設計図バイタルズプロジェクト』のオブザーバーとしてスカウトされたからです。途中参加だったので、配属される以前の歴史的なことは殆ど関知していません」

「それなのに博士はPFRSを糾弾されたのですか？」

「……たえ今回の件が、PFRSにおける初めての汚点だったとしても、黙認はできませんでした。最初の間違いを容認してしまえば、次からは躊躇も検討もされなくなり、その数が増える度に人間の良識は削られていきます」

「私は博士が嘘をついているとは思いません。が、支配人オーナーの意志に基づいて実行された計画が、世間一般で言われる違法行為と判断されるのは、納得できかねます」

「エンプレスさんは……PFRSと何か特別な関わりがあって配属されたんですか？」

「いえ、私はただの患者でした」

「患者？」

彼女は博士の方に顔を向けると、前髪をかき上げて額のバンダナを外した。

「あ……」

博士の口から驚きの声が小さく漏れた。髪が生え際近くに刻まれた、痛々しい傷痕。一見してただの外傷ではないと、素人目でも分かるモノだ。

「かつて、私は軍のレンジャー部隊に所属していました。2年程昔のことです……訓練中に気絶して緊急入院し、検査で脳に悪性の腫瘍が発見されました」

「……………」

「民間の医療施設を転々として、何度か外科手術に臨みました……が、運の悪い事に、処置の困難な位置に腫瘍ができていたため、全て失敗しました。着々と腫瘍は大きくなっていき、余命1年と診断

「されて私は人間社会から見捨てられました」

「……………」

「そんな時、軍部の上官からPFRSを紹介されました。軍から多大な出資がされているため、優先的に診てもらえることになったのです」

そう話す彼女の表情に、緩やかな笑みが含まれている。

「PFRS本部に入院した私は、^{オーナー}支配人と出会い選択を迫られました」

「選択？」

「余命1年という天寿を人間として全うするか、それとも……“人ではなくなり”生き長らえるか」

彼女のその言葉に博士は表情を曇らせた。

「私は当初、その提案を拒絶しました。^{オーナー}支配人に強化人間となる手術過程と、その後の自分の立場について、十分説明を聞いた上での判断です。私はPFRSの療養施設で最期の時を迎えようと、覚悟を決めました」

「……………」

「入院して初めて知りました。当時のPFRSには、私のように不治の病で死の近い身体を預けた者達が、世界中から集められていました。彼等もまた、^{オーナー}支配人から人生の選択を迫られ、拒絶を選んだ人達でした」

「……………」

エンプレスの目が次第に泳ぎ出した。

「いつ死んでもおかしくない者達が大部屋に敷き詰められ、これといった生命維持処置も受けられず、毎日のようにダレかが死に、袋に入れられて去って行きました。陸揚げされた魚みたいに体をバタつかせる者……ものすごい勢いで吐血し、自分の血溜まりに顔をうずめ動かなくなる者……日の出と共に首を吊る者……病棟に放火しようとして逮捕される者……終わらぬ妄想に追われて脱走し、海上で浮いているのを発見される者……」

「……………」

「私はレンジャー部隊に配属されていた時分、生き方に絶対の誇りを持っていました。将来に展望もあり、不安も恐れも無かった」

「……………」

「訓練中に点検ミスで実弾が発射され、鎖骨を砕いたことがあります。ボートが転覆して溺れたこともありました。けれど、それを『恐怖』とは感じていなかった。しかし、あの大部屋には……恐怖しかなかった」

「……………」

「荒唐無稽でイライラする空間から、淡々と人間が消えていく……ダレも寝ていないベッドが次々と増え、声が消え、生きているという感覚が薄れて私は……怖くなりました」

「エンプレスさん……」

彼女の指先が小刻みに震えている。蒼神博士はかけてやる言葉が思いつかなかった。

「緩慢に訪れる死の時間に揺られ、呼吸するだけの生活でした。そんな中で私は考えを改めました」

人ではなくなるう

「思い知らされました。人間は恐怖に打ち勝てるようにはできていない……私は支配人^{オーナー}に陳情し、手術を受けて人をやめました」

「……………」

エンプレスの瞳をしっかりと見据えながら、博士は涙を流した。

「蒼神博士？」

「うつ……うつ……うぐ……」

静聴していた蒼神博士が顔を隠すように片手を押しあて、嗚咽を漏らしている。

「もし、支配人^{オーナー}が“悪”と判断された時、ボクに協力してくれますか？」

博士はエンプレスの手をヒシッと握り締め、潤んだ目で見据えた。
「……………」

即答は避けられ、エンプレスは申し訳なさそうに視線を逸らした。
「そ、そうですか……………」

一人でも多くの味方が欲しくて強く賛同を求めが、彼女は立ち上がり、ドアノブに手をかけた。その時、何かを思い出したかのように振り向く。

「“アノ連中”には気をつけてください」
「え？」

エンプレスが独り言のように呟く。

「この客船の船長に事情を話して、端末から政府のデータバンクにアクセスしました。その結果、『イレギュラー』などという調査会社の存在は確認されませんでした」

彼女の言葉に博士の顔色が変わる。

「ちょ……………ちょっと待ってください、ボクは確かにネットで『イレギュラー』のサイトを見つけ、コンタクトをとったし……………」

「確かにサイトは存在するようです。しかし、不動産リストからサイトに記されている住所を調べ、地元の警察に連絡して搜索してもらいましたが、アパートの一室に交換機が一台置いてあるだけでした」

「そんな……………！」

不意に力が抜けて俯く博士を他所に、エンプレスはサウナを後にした。

（どうする？ どうする？ どう……………）

できれば耳に入れて欲しくない情報だった。引くに引けないこの状況で、取るべき選択肢の重要性が更に増した。

「わああああああああああ—— ツツツ！」

無理矢理ふりきるような大声を出しながら、彼は飛び出していく。

そして。

——パタッ

後ろの中年デブオヤジが、のぼせて倒れた。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——

3日目、正午。客船は予定の港に停泊していた。物資の補給と船のメンテナンスが迅速に行われ、客の殆どは久しぶりの陸地を踏みしめるため、船を降りている。その中に……周囲に対して“見ちゃいけません！”的な空気を振り撒いている一団が。

「……………」

「……………」

俯き加減に押し黙る蒼神博士とエージェント・エンプレスが、歩幅を大きくとって先頭を進む。というか、逃げる。二人の後ろを『パンダ』と『ライオン』がついて来るから。

——パンダ？

——ライオン？

正確に言うと、パンダとライオンの着ぐるみがスキップしたり手を振ったり……街角で風船やチラシを配ったりしているアレ。メチャメチャ目立って、通行人は皆振り返っている。パンダにいたっては、デート中のカップルめがけて空き缶を投げつけたりする始末。

「博士……我々はどう対応すれば？」

「慣れてください」

それはそれで問題だ。

「さて」

しばらくして、蒼神博士は巨大なシャッターのある倉庫の前で足を止めた。

「博士、ここが……？」

「はい、海底トンネルへと続く入り口があります」

「しかし、本部は船を衛星で追跡しています。我々がここで降りたことに気付いているのでは？」

「一度にたくさんのお客様が降りましたから、微妙な角度調整に時間がかかって、おそらく5分〜10分ほどのカバーしきれていない空白ができたハズです」

そう言って彼は鍵を一本取り出し、シャッターの脇のコンソールに差し込んだ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオ———！

重々しい金属音をたてながら、シャッターが上がっていき……

「へ？」

博士の目が点になる。人がいたのだ。一人や二人ではなく、大勢の人間が……しかも武装していて、一斉にこっちを向いて言った。

「何だオマエ達！？」

まさにこっちが言いたいセリフなのだが、銃口があっちこっちで黒光りしていて、四人めがけて狙いをつけていた。

想定外の事態ともつと想定外の事態

「蒼神博士……一体、コレは？」

エンプレスは拳銃のホルスターに手をかけたまま固まる。

（そ、そんな……！）

いきなり障害が立ち塞がった。

「大変だよ、ライオン君！ きつと、あたし等を狙った密猟だよ！」

「そりゃヒドイね、パンダ君！ 国際条約違反だね！」

バカ二体が抱き合う。

「……蒼神槐さんですか？」

防弾ジャケットに身を包んだ集団の中から、スーツ姿の中年男性が博士の名を呼んだ。

「え、あ……アナタは？」

「『国家調査室』の者です」

スーツの男は身分証を取り出して見せ、同時に手で仲間にも合図する。

「とりあえず、作戦の邪魔になつては困りますので」

博士とエンプレスの腕を武装隊員がつかむ。

「杜若室長、^{かきつばた}“コレ”はどうしますか？」

呼ばれた方に目をやれば、ものすごく愛想の良いパンダとライオンがいる。

「蒼神博士……アレは？」

「知りません」

とうとうクライアントがやさぐれたした。

「はい、スミマセン。確かにやりました。群がるガキ共があまりにウザかったんで……いえ、金属バットは自分のじゃありません」

「オハヨウからオヤスミまで暮らしを見つめてたら、ストーカーで捕まりました」

聞かれてもいないのにパンダとライオンが余罪を述べる始末だ。

「国家調査室……それじゃあ、この部隊は……！？」

エンプレスが事態の急展開に動揺する。

「我々はこれより、PFRSに対して強制捜査を行います。海底トンネルの設営に携わった業者から匿名の通報がありまして……このまま皆さんを解放するワケにもいきませんので、御同行を」

しまった……。

「当然のことながら、これは非公式の作戦です。成功しようが失敗しようが、公式には発表されません。よって、最悪のケースもありえますが……宜しいですね？」

一方的に拘束しておいて、宜しいもクソもない。

「ええっと……信じてもらえないかもしれませんが、着ぐるみの二人は調査会社から派遣された社員で……しかも、未成年なんです。せめてここで保護してもらえませんか？」

「申し訳ありませんが、素性の確認がとれない現状で解放するワケにはいきません」

政府の役所仕事に融通はきかない。

ガコオオオオオオオオ——！！

大量に積まれたコンテナの一つがクレーンで持ち上げられ、そこに地下へとつながる階段が現れた。

「室長、準備できました！」

役人共はどうしようもなくヤル気十分で、部隊長がメンバーに檄をとばしている。

「わあい、国家権力の横暴が始まるよ！ コワイよコワイよ、ライオン君！」

「よおし、兵隊さん達の邪魔しないよう、後ろの方で怯えてようね、パンダ君！」

二体の不燃物がヒシッと抱き合って震えてる。

「室長、この女……拳銃を所持していました」

エンプレスのボディチェックをしていた隊員が、自動拳銃を取り上げた。

オートマチック

「なるほど、目的はともかく手段は同様ということですか、博士？」

「彼女はPFRS本部に所属するSPです」

「ほう……どういう見でここに？」

「蒼神博士の持つPFRSへの疑念に一部同意した。それだけよ」

「信じがたいな」

そう言つて室長は隊員達に目配せする。銃器をチェックする金属音が、コンテナの森に反響する。

「では、博士とゲスト三名は私と来てください」

一同にただならぬ緊張がはしる。早くも計画に狂いの生じた蒼神博士は、オロオロするしかない。

メンテナンス用海底トンネル『ソリアム』——トンネル延長約60km。幅22m。高さ13m。約90万tのセメントと20万tの鋼材を使用し、最先端の掘削技術を駆使して15年かけて本土とPFRSをつないだ。トンネル内部には左右に設けられた歩道と中央に敷かれたケーブルカー用のレールがはしっている。

カッーン、カッーン、カッーン……………

地上とは打って変わってヒンヤリとした空気が漂い、階段を下りる足音が澄んだ空気に良く響く。地下150m地点、本土側の駅となるポイントに到着。そこには重厚なケーブルカーが不気味に佇んでいた。

「部隊長、監視カメラは？」

「問題ありません。PFRS側の内通者が偽の映像と音声を流しています」

蒼神博士と国家調査室長はケーブルカーに乗り込むと、並んでイスに腰を落とした。部隊員達は割り当てられた配置にバラける。

「どうしょ。酔い止めの薬忘れちゃったよ、ライオン君！」

「平気だよ。ゲロつても画的にはバレないさ、パンダ君！」

いつまでたつても緊張感を持ってくれない変質コンビは、最後尾に仲良く着席。

ガゴオオオオオオ……

ほとんど置物と化していたケーブルカーにエネルギーが吹き込まれ、乾いた金属音が木霊する。子供の運転する自転車程度のスピードで走り出した。

「……あの〳〵、やたら安全運転ですね」

蒼神博士が不安げに呟く。

「PFRSに十分な“準備時間”を与えてやるのです」

「……は？」

「ネット上に複数のテロリストが本日PFRS本部を強襲するといふ、偽情報を流してあります」

「そ、そんな事したら、警備がより厳重になって潜入が難しく……！」

「PFRSは我々と同じく政府直轄の機関ですが、私の知る限り、SP以外が銃器を所有し使用するのは禁止されています。が、一部の上級職員が警備の特殊性をでっち上げて、軍仕様の銃器を常用していると聞いています」

室長が向かい側に座るエンプレスを睨みつける。

(……………)

彼女としてはあまり目を合わせたくない。

「つまり、銃器類の摘発を口実に、バイオハザードの件にも着手するということですか？」

「そうです。少々リスクはありますが」

「しかし、それほど済し崩し的に上手くいくでしょうか？」

「現在まで強制捜査に乗り出せなかったのは、PFRS本部の特殊な立地にありました。本土からのハッキングを受けつけず、直接占拠しようにも時間がかかりすぎて、重要な情報を隠蔽されてしまう。

だが、今回は蒼神博士の離反により、内部がガタついている」

「なるほど……」

図らずして自分の行動が別の組織を動かしていた。個人といっても組織に対して無力というワケではない。

グオオオオオオン……グオオオオオオン……グオオオオオオン……

ケーブルカーは重武装した隊員達に挟まれた形で、ひたすら真っ直ぐ進んで行く。図体のデカイ鈍足に乗って、変化のない風景を窓から見ながらの行進は、なんとも退屈。故に脳内にはα波が大量発生。

「ングオオオオオオオ！ フグオオオオオオオ！」

後ろの方からわざとらしいくらいイビキが聞こえ出す。腕組みしてふんぞり返るパンダに、ガツクリと首が折れ曲がったライオン。「蒼神博士、自分の立場上、関係者の素性を把握しておかなければならないのですが」

「話さないといけませんか……」

「はい」

役人の仕事意識は強かった。

「実は……」

博士はネット上で契約した調査会社と、そこから派遣されてきたという二人のこと。そして、エンプレスが話してくれた二人に関する疑惑について、かいつまんで説明した。

「……『柏木茜』？」

杜若室長は目を細めて後ろにチラッと視線をやると、PDAを取り出した。

「どうかしましたか？」

「……」

彼はPDAを凝視しながら眉をひそめる。

「『汐華咲』という名前に聞き覚えはありませんが、『柏木茜』と

「いうのはどこかで……」

何やら意味深な室長の言葉に、博士は一瞬悪寒を感じた。エンプレスの話した内容にイヤな信憑性が出はじめた。

「いずれにせよ、後ろの二人が故意に博士へ接触してきたのは間違いないでしょう」

「……そ、そうですか……」

情報機関の役人に面と向かって断言されると、やたら重く響く。こうなると、予定外のプロの武装集団は心強い。これでとりあえずは身の安全が保障され――

ドサツ……

――た!?

「なにッ!？」

人間の体が地面に転がる音がした。ケーブルカーの乗員達が目にしたのは、運転手の……死骸。

「伏せてくださいッ!」

室長は咄嗟に博士に組み付いて床へ伏せさせ、左右の歩道を並走している隊員達を見回してみる。しかし、ダレ一人として襲撃に気付いてはいない。

「ミス・エンプレス……何か聞こえたか？」

「……いや、何も」

一緒に床へ伏せたエンプレスの顔色が変わる。ゴロリと転がる運転手の生首と目が合ってしまう。

<室長、何事ですか？>

車内の状況に気づいた部隊長の声が通信機から聞こえてきた。

「周囲を警戒しろッ、運転手が襲撃を受けて死んだ!」

<襲撃ッ!??>

ドサツ――!

隊員の一人が突然、上半身をグンツと仰け反ってレール脇に落下した。

「早く停止しないとッ！」

「駄目ですッ！ 敵の位置が把握できないまま止まるのは危険だッ！」

ガコンツ！

室長は運転席まで這いずり、コンソールに手を伸ばして速度調整レバーを乱暴に押し出した。

グオオオオオオオオオオオン！！

急激なスピード上昇でケーブルカーが悲鳴を上げ、さっきまでののんびりムードを払拭するかのよう走り出す。

<室長！？>

「強行突破するッ！」

見えない敵の目的はおそらく蒼神博士だろうが、国家調査室としても計画は狂い出した。

「——何ッ！？」

スピードが最高速度まで達したところで、室長と蒼神博士の視界に出現した『人影』。それはレールの上に佇む一人の女性。このままでは確実に轢き殺してしまう。緊急停止ボタンに手を伸ばすが、その手を蒼神博士が払いのけた。

「止めちゃダメですッ！」

「殺す気ですかッ！？」

「止まればこっちが殺されますッ！」

グシャ——！！

避ける素振りも見せない女を、ケーブルカーの巨体が無情に轢き

潰す。その直後――

ガギギギイイイイイイ
ッッッッ！！

「――ッ!?」

何かがものすごい音をたてて裂けた。ケーブルカーが………前後に割れた。

「蒼神博士ッ!」

エンプレスが咄嗟に手を伸ばし、彼を自分の方へ強引に引き寄せた。ケーブルカーは綺麗に両断され、前部と後部とが少しずつ離れていき、室長も慌てて後部に飛び込んだ。

「博士ッ、ケガは!」

「なんとか……無事です」

「クソっ、どういうことだ!」

「ンガアアアアアアア!　ンゴオオオオオオオオ!」

実にマズイ。正体不明の攻撃を受けているのに、頼みの武装集団が追いついてくるには、少々時間がかかってしまう（パンダとライオンのイビキも最高潮）。

<室長ッ、大丈夫ですか!??>

通信機から部隊長の喚き声が聞こえてきた。

「ケーブルカーが大破した!　原因は不明!　敵の姿も確認できない!」

応答する室長の傍で、蒼神博士は綺麗にカットされた窓から恐る恐る外をのぞく。

「あ、蒼神博士だッ、生きてたのだッ」

『敵』が――いた。

「うわッ!」

窓ガラスにへばりついた一人の女がニコツと微笑みかけてきた。

「フ、フリージア……………やっぱり君か……………」
博士の頬が引きつった。

突撃する蛮勇と迎撃する賢者

ガシャアアアアアアアア
ツン———ッ

室長は備え付けの消火器を持ち上げて、その女めがけて投げつけた。

「バケモンがッ！」

ガラス片を派手にブチ撒いて、女はレールの上を転がった。

「蒼神博士ッ、アレは一体!？」

「まさに『敵』です」

「PFRSの人間ですか!？」

「神の設計図バイタルズから抽出したタンパク質の適合実験に成功した、強化ヒューマン人間の一種です」

グオオオオン……グオオオオン……オオオン……

ケーブルカーの残骸も、そろそろ惰性で走る限界をむかえてスピードが落ち……止まった。そして、前方に続くレールの上には、残骸の前半分と白衣姿の淑女。

「そんな……！」

蒼神博士が神妙な面持ちで指差した先には、赤縁メガネをかけた白衣姿の長身の女性が仁王立ちしている。テレビの記者会見でPFRSの支配人オーナーの隣に座り、記者から質問を受けていた職員だ。

「槐ッ！」

「は、ハイッ！」

いきなり下の名前で呼ばれて反射的に博士が硬直してしまう。

「エージェント・エンプレスは？」

「ここにいます……」

親に叱られる直前の子供みたいな表情で、彼女はその姿をさらした。

「エンプレス、支配人^{オーナー}は大変困惑されています。本部に戻り次第、言い訳を聞かせてもらいます」

「今、この場にて言い訳をしても宜しいでしょうか？」

「許可できません」

エンプレスの意気込みは、その場で一蹴されてしまった。

「アンスリウム博士……ど、どうしてここに？」

蒼神博士が白衣の女の名を口にする。

「アナタの単純な思考パターンを読んだのよ」

「ボクは……どうしてもPFRS本部に行かなきゃならない」

彼は勇気をふりしぼり、ケーブルカーの残骸から降り立つ。そして、レールの上で対峙した。

「もちろん、連行はするわ」

「……………」

「支配人^{オーナー}は軍部からの命令に背いてまでアナタを殺害しようとした。つまり、アナタが秘密裏に接收した実験データの一部分が、どれだけ重要か考慮した上での判断よ」

「……ごめんなさい、アンスリウム博士。やはり、ボクはPFRSの不正を見逃せない」

「それだけ？」

「え……それは……」

蒼神博士が何かを指摘されたみたいに怯んだ。

「『棕櫚^{シム}』に会いたいよね？」

「うッ……………」

「エンプレス、槐を連れて先に行きなさい。中継地点に輸送ヘリを待機させてあります」

「……は、はい……………」

『アンスリウム』と呼ばれた女性に気圧されて、エンプレスが蒼神博士に目で合図した。その時……

「室長ッ！」

大声とたくさんの足音を響かせて、部隊がやっと追いついてきた。
「さて、アンスリウム女史……ここまでだッ」

冷静に状況を観察していた室長が、味方の到着を機に攻勢に出る。

「フリージア！！」

アンスリウム博士の怒号がとび、レール脇に転がっていた白髪で浅黒い肌の女が起用に起き上がる。

ザッ———！

この展開に殺気を感じ取った隊員達が、素早く戦闘態勢をとる。

相手はダークホワイトの密着式ボディースーツを纏った、モデル体型の女が一人。スーツから浮き出たバストとヒップのラインが妙に艶めかしい。

「ねえねえ、どうするう？」

「スーツの男は無視しなさい。他の連中は殺してよし」

アンスリウム博士から冷徹なる命令が下された。

「はぁーいッ」

元気な返事とともに両手に構えたブレードをギラつかせる。

「……………」

一瞬、その場の全員が沈黙した。殺陣の空気を感じ取って——

ズガガガガガガガガガガガ———ッッ

ッ！！

ダレが最初に発砲したかなど、どうでもいいくらいの銃弾が撃ち込まれる。銃弾は相手のボディースーツを裂き、皮膚を削り、体勢を崩す。激しく飛び散る火花と耳障りな轟音が、目の前の敵を討ち滅ぼそうとする。

「痛いのだッ、ひどーい！」

敵は残骸となったケーブルカーの前半分に素早く逃げ込み、その身を隠す。

「部隊長、そちらから中を確認できるか？」

室長が無線で話しかける。

「……いえ、ここからでは死角になって目視できません。焼夷手榴弾でも投げ込みますか？」

「いや、PFRSとの交渉材料として使いたい。生け捕りにする」「了解しました」

部隊長が部下二名に手で合図する。

「だ、大丈夫でしょうか……？」

刑務所での惨劇から、フリージアの悪意の無い暴力は経験済みだ。

「まさか、こんな所にたつた二人で来られるとは」

室長が半分呆れた顔で女史のアンスリウムの面前に立ち塞がる。

「協力的な職員が不足してまして。御不満かしら？」

「いやいや、構いません。それでは、アナタも我々と御同行を」

「却下」

——ドサッ！

「なにッ!？」

ケーブルカーの前半分に乗り込んだ隊員二名が、竜巻の直撃を食らったかのように中から放り出された。更に……

シャッ———！

室長とアンスリウム博士の間を、一瞬にして透明の『壁』が隔てた。

「蒼神博士ッ、コレは!？」

予定外のファクターに動揺した室長が、関係者に答えを求める。

「このトンネルに設けられた超耐圧アクリル壁です。部分的な水没があった場合、他のエリアと崩落箇所を隔離する機能です」

(……くそッ)

案の定、後方にも隔壁が下りて、部隊は檻に閉じ込められた。

「部隊長ッ、ケーブルカーを狙え!!」

室長の叫び。敵の次の出方は絞られたが、その展開に気づくのがわずかに遅かった。

——ストーンッ

鉄棒の逆上がりをする要領で、ケーブルカーの内側から屋根に跳び乗ったフリージア。その手にはいつに間にか鎖が巻きつけられていて、鎖の先は二本のブレードに繋がっている。

「やつちやうぞおおおおお!!」

童女みたいな気合を入れる。部隊長の指示を待たずして、銃口を向ける隊員達。が、わずかな遅れが人の命を——

ビュンッビュンッビュンッビュンッ——!!

奪う。

ドサドサッ……………ドサッ……………

大気が裂かれ、剣呑な光刃が隊員達の視界をかすめた瞬間、彼の肉体は沈黙した。

「バカな……ッ!？」

左右の歩道から人間の体の一部が次々と転がり落ちてきて、室長の足元には部隊長の頭部が。

「な、なんて……ことを……!」

蒼神博士の全身が尋常でない虚脱感に苛まれ、その場にストーンと崩れ落ちた。

「降りてらっしゃい、フリージア」

「は……い」

隔壁のロックを解除し、完全に攻撃手段を失った室長の前に、アンスリウムが再度立ち塞がった。

「エンプレス！」

「……は、はい！」

あまりに一方的な惨劇を目の当たりにし、呆けていたエージェン
トが名を呼ばれて思わず硬直する。

「蒼神博士……行きましょう」

中途半端な抵抗力は無いに等しい。

「いえ、ボクはまだ彼女に聞きたい事が……」

それは彼女も同様だった。

「この状況では建設的な展開は望めません。まずはへりに……さあ
博士の腕をつかむエンプレスの手に、グツと力がこもる。

「……分かりました。行きます」

エンプレスの悔しさと無力感は、腕をつかむ手から十分伝わって
きた。

ガコオオオオオオオオオオ……

隔壁がゆつくりと収納されていく。

「こ、こんな……！」

政府の情報機関が画策した超重要イベントが、あっさりと幕を閉
じてしまった。油断していたワケではない。ただ、想定していた最
悪の事態が違い過ぎていた。室長は体から力が抜け、レールの上に
ガクリと膝を落とす。

「——さて」

アンスリウム博士は死屍累々とした周囲を見回し、満足気に微
笑んだ。蒼神博士とエンプレスの姿が十分遠ざかったのを確認し、
彼女は戦意喪失した室長を尻目に、残骸の後ろ半分を見つめた。

「“本題”に入りましょうか」

この場にはまだ約二名のギャラリーがいた。

「うわア、バカな大人達がバツバツと死んじやったよ、ライオ
ン君ッ！」

「どうしよう！ オマワリさんに通報しないと……あッ、地下だからケータイつながらないよ、パンダ君ッ！」

わざとらしく怯えて抱き合ったりしている。アンスリウム博士は中指でメガネをクイッと押し上げる。

「客船での一部始終は衛星で観ていました。だから、余計な尋問で長居するつもりはありません……アナタ達は何者？」

「ボクは世界の人気者・パンダ君！ 好物は笹と観光客♪」

「ボクは百獣の王・ライオン君！ 好物は草食獣！ 特にカルビ♪」
予想通りまともな返事は返ってこなかった。

「ふうううう……」

アンスリウム博士は白衣のポケットから紙タバコを1本取り出し、火をつけた。

「軍部？ 電薬管理局？ それとも、他国の情報機関かしら？」

彼女のメガネのレンズがギラギラしている。

「ねえねえ、ライオン君……あの人ってイカレてる？」

「きっとそうだよ、パンダ君。こんなボク等を見て、スパイか何かと勘違いしてんだよ」

ものすごい勢いでバカにされた。

「……ちッ」

アンスリウム

女史はイラつとした表情で煙を吐き出し、踵を返す。それを合図に、彼女の脇をフリージアが笑顔で駆け抜けていき、両手に構えたブレードを目標めかけて……

ドンッッッ！

轟音

バキンッッッ！

衝撃

「——ッ!?」

アンスリウム博士の歩く方向へ、金属の破片がものすごい勢いで飛び散り、地面に刃先が刺さる。彼女からサッと血の気が引いた。(フリージアの単分子ブレードを……バカな!?)

「さっすが、ライオン君! 密猟者には近代兵器で自衛してこそ野生だね!」

「もちろんだよ、パンダ君! 何ちゃら条約を無視するバカ共は、コイツで粛清さ!」

百獣の王が重厚感タツプリの長身銃を腰だめで構えている。で、パンダは横で笹食ってる。

「対物ライフル!?」

啜えていたタバコが彼女の口から滑り落ちた。

突撃する蛮勇と迎撃する賢者（後書き）

単分子ブレード〓金属炭素のレーザーキャビテーション加工により、エッジを分子一つ分にまで研磨した刃。要するに、ダイヤモンド並の硬度を有し、加える力によっては切断できない物質は無い。腰だめ〓銃床を腰に当て、大まかな狙いで発砲すること。

対物ライフル〓主に狙撃と陣地、軽車両への攻撃に使用。機関砲弾に分類されるような大口径弾を使用。貫通力が非常に高く、土嚢や壁などの障害物に隠れる敵も殺傷できる。種類によっては、2 km 先の人を撃つて上半身と下半身とが両断して吹き飛ぶ事例も。

仁義無き女の闘いとギャラリーのオッサン

「さてさて、蒼神博士を追わんとね。送迎へりに乗り遅れちまう」

「そーだねそーだね、ハイジャックだね」

ここでも状況が一変した。あまりに想定外だ。

「アンスリウム博士ええええええ、フリージアのが壊れちゃったよ
おおお〜！〜！」

一個小隊を瞬く間に血の海に沈めたブレードが叩き折られ、持ち主は鎖を振り回して悔しがっている。

「来なさい、フリージア！」

「うん……」

お気に入りのおもちゃを無くした子供みたいな表情で、女史のもとに駆け寄る。

シャツ

隔壁がまたもや間を隔てた。

「ありやま……どうするよ、ライオン君？」

パンツ！

オートマチック

ライオンが自動拳銃ですかさず攻撃。しかし、弾は軽くはじかれた。

「9パラが一蹴されちゃいました。ダメだこりゃあ」

ライオン君がガツクリだ。

(…よう)

とりあえず難は回避した。ブレードの耐久性から考えて、対物ライフルの弾は炸薬式ではなく徹甲弾だろう。となれば、人間一人が通れるだけの穴を開けるには、多少の時間がかかるハズ……が、防衛本能がけたたましくアラームを鳴らす。アンスリウム博士はフリージアの手を取って、早足でその場から歩き出した。直後……

ゴンッ……

音がした。銃弾が当たる音ではない。反射的に一瞬足を止めたが、振り向かずすぐに歩き出す。

ゴンッ——！

まただ……隔壁に向かって何かしている。だが、心配することはない。さあ速く、さあ速く。

ゴガアアアアアア——ン！！

「——ッ！？」

音が大きくなった。何のつもりだ、無駄な足掻きだ、後ろを見る必要はない。早急に中継地点のへりに乗れば……

ガアン！！ ガアン！！ ガアアアアアア——ッ
ッッ——！！

「ひッ……！！」

音は止まらない。激しさは増す一方だ。それに比例するようにして、アンスリウム博士の歩くスピードも増す。そして……

ピッ……キイイイイ……

……

脅威に対する好奇心が、恐怖と不安をわずかに凌駕した時、歩く足がピタリと止まって自分の背後を振り返る。そこで見たのは、肘について寝そべるライオンと、ケツをかきながらウロウロするパ

ンダ。そして、隔壁には――“ヒビ”。

「あ……うう……！？」

ヤバイ。何かよく分からないが、ヤバイ。発砲音は聞こえなかった。その事実が余計な想像力をかきたてる。

「フリージア、連中を見てなさい」

「うん、いーよ」

フリージアはアンスリウム博士の背を守るようにして、後ろ向きに歩き出す。生きた盾が監視してくれる。

「……………あ、パンダさんが壁に近づいてきたよ」
「……………」

早速の報告。が、土木用大型トラックの直撃にも耐える防壁を前にして、あんなバカバカしい連中に何ができる？

「あ、脚を大きく開いて右腕を振りかぶったよ」

「……………ッ」

「あ、パンチだ」

ボオゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツツツン！！

「ああああああああッッッ！」

アンスリウム

女史の悲鳴がトンネル内の空気をひどく震わせた。明らかに何か破壊された音がして、彼女の足が歩行から走行に変わる。

「博士え、壁に大きな穴が開いちやったのだあ」

「何故よッ！？ どうしてよッ！？」

恐ろし過ぎて自分の目では確かめられない。でも、でも、科学者としての好奇心が。

チラッ……

――見た。

「待てやゴラああああああ——ッッッ!」

「きゃああああああああああああああッ!」

隔壁をブチ抜いて突破したパンダが、怒号をあげて追いかけてきやがる。

「ぬ、抜けない……（汗）」

脱出口で腹部をつつかえているライオンもいます。

「フリージア! 早く“アレ”をなんとかなさいッ!」

「いいの? 動かなくするの?」

「ええ、そうよッ! やるのッ!」

「うん、分かったのだあゝゝ」

タンッ——!

フリージアは地面を勢い良く蹴って、追っ手めがけて跳躍する。

「ほう、ヤルつての? 変態みたいな格好しやがつて!」

「そーだそーだ! エロけりやいってもんじゃないぞ!」

パンダとライオンが野次をとばすが、他人様の事とやかく言える連中ではないし、エロの要素はどうでもいいし。

「イつくぞおおお——っ!」

フリージアは一瞬で間合いをつめると、超至近距離で回し蹴りを放つ。

「はッはぁーッッッ!」

パンダは前に体を折ってかわしたつもりだったが、なにぶん着ぐるみの頭部はデカ過ぎるため、ヒット。

「おうッ」

パンダの頭部がフツ飛び、中から咲の本体登場。

「マズイよ、ライオン君! 予想以上に動きづらい!」

今更自分の悪フザケを後悔しているようだが、相方の方はまだケツの辺りがきつくてジタバタしている。

「……うおい」

相方が役に立たないと判断したパンダは、応酬とばかりに振り向きざまに回し蹴りを放つが、フリージアはこれを難無くかわし、相

手の胸ぐらをガツチリつかんで力任せに――

ブンツ――！！

「ぬおッ！？」

パンダは女性の目から見ても小柄だが、とても女の膂力とは思えない勢いで吹き飛ばされ、トンネルのコンクリート壁に叩きつけられる。更に追い打ちをかけるべく、姿勢を低くしたフリージアが跳びかかる。

「うあひゃッ！ー！」

あまりに矢継ぎ早なセカンドアタックに、慌てて垂直に掌底を突き出した。が、ネコ科動物のように体を捻り、これを回避。そして、片手にはまだ折られていない方のブレードが握られ――

ドンツドンツ――！！

不意の銃撃。ブレードを握るフリージアの手の甲を、9ミリ弾が砕く。

「いいいったあアアアアいいい~~~~！！」

少女のような声をあげてフリージアの体勢が崩れる。

「いやっほ~~~~い」

肉体的理由から脱出を諦めたライオンが、オートマチック自動拳銃で援護にまわった。

「でかしたぞ、ライオン君！　ところで、そのオッサン！」

「……………な、何だ…………？」

すっかり外野に追いやられていた杜若室長に向かって、パンダが指差した。

ブリスト・ヒューマン
「『強化人間』って何？」

マイペースにも程がある。しかも、同じ質問これで三度目。

「違法な投薬や人体改造で、生体機能を特化させた連中だ。言うな

れば……超人だ」

「超人！？　つまり、空を飛べたりするワケ！？」

「飛ばん」

「つまり、目からビームが出たりするワケ！？」

「出ん」

「おのれ外道ッ！」

何が！？

「フリージア！」

「血が出たあああ………いっばい出たあああ………」

戦闘能力はともかく、どうやら精神年齢はカナリ低めのようで、アンスリウムと呼ばれて軽く半泣きのまま駆け寄っていく。

（一体、これは……どうなっている？）

室長は自分の部下が全滅した事も忘れ、目の前の展開に呆然としている。

「平気よ、フリージア。そんな傷はすぐに治っちゃうから。ねえ、そうでしょ？」

「……うん、治る………」

「早く帰って『パパ』とお昼ごはん食べなきゃ………そうでしょ？」

「うん、早く帰る」

子供をあやす母と盲従する娘………そんな光景にも見える。

ジャラッ――

乾いた鎖の音。刹那――単分子ブレードが、ヘビのような放物線を描いて襲いかかった。

「――ちッ」

とても人間の反射神経で回避できるスピードではない。咲は着ぐるみの胴体部分に首を引っ込めて直撃を避けるが、鎖は鞭のように器用にうねって着ぐるみに絡みつき、パンダを拘束した。

「イつくぞおおおおおおお！！」

気合一発。フリージアの両腕の筋肉が隆起し、絡め取られたパンダが宙に浮き上がってブン回される。人間砲丸投げ・第2号だ。

いてたというの？」

「無礼な！ 労働して生活費を稼ぐという、合法的な理由がある！」

「ガンバレ！ ガンバレ！ 皮下脂肪！」

「……結局は金か」

彼女は両手を頭の後ろに回し、両脚を大きく開く。

「フリージア、先に行きなさい」

「ええ……、どうして？」

「いいから！」

「……は……い」

叱られた幼女みたいにトボトボと中継地点へ向う。

（冗談じゃないわ……… こういう肉体構造しているのよ！？）

彼女は碎かれた隔壁を再度確認して息を呑んだ。

（素手で破壊した？ 人間が？ ありえない……… 神の設計図のタン

バイタルズ

パク質と高い適合率を実現させたフリージアが苦戦した……… このガ

ブリスト・ヒューマン

キも強化人間？ 敵性国家の？ いや、企業かもしれない）

なんとしてでもこの場から逃げ切らなければ。彼女は科学者としての洞察力をフル回転させる。

ダッ——！

逃げた。特に対抗策は無い。ただ単純に逃走するしかなかった。

「ヘイ！ ライオン君！」

「いいとも、パンダ君！」

パンッ——！

「あうッ………！」

一発の銃声。アンスリウムの履いていたパンプスの踵が砕け、小さな悲鳴を発して前のめりに倒れた。

「はいはいはいはい、ジュータバータするなよーッ、更年期がくるぜえ………」

不吉な笑顔でパンダが接近してくる。

「で、だ……」

彼女の側にしゃがみこみ、小さな手で頭頂部をガッチリとつかんだ。

「一度しか言わん。よ……く聞きたまえ」

咲の口元がいびつに歪んで、博士の耳元でボソリと囁きだす。

10分後

「いやあ……まいったね、ライオン君」

「大人は怖いね、パンダ君」

中継地点のヘリポートにやってきたのは、不自然な一団。手錠をかけられたパンダとライオン。そして、国家調査室長。その前を行くのは、片方だけ裸足になった顔色の悪いアンスリウム博士。プラス、しょぼくれたフリージア。

「……………?」

ヘリで待機していた蒼神博士達が、その様子を怪訝とした顔で見ている。

「いやはや御待たせ!」

「さあ参りましょ!」

咲と茜は元気に搭乗。

「あ、あの……大丈夫ですか?」

いまいち状況が分からない蒼神博士が呼びかけた。

「全くもってダイジョーブじゃない! こっちはもうボコボコにされちゃって!」

「わたし達の見事な土下座でなんとか凌いだけどね」

証言内容と彼女等の状態がかみ合っていない。

「蒼神博士……部隊は全滅しました」

「そ、そんな……!」

室長の悲痛な呟きに、彼は落胆の色が隠せなかった。

「外部に救助は頼めないんですか?」

「秘密工作のため、当局との関与について疑いを持たれないよう、一切の定期連絡を絶っています……」
折角出会えた希望が早くも潰えた。

(……………う)

ただならぬ罪悪感が彼の背筋を這い上がってくる。また沢山の間が死んだのだ。

ヒュンヒュンヒュン——

輸送ヘリが上昇しはじめる。コックピットに座るエンプレスが、後ろのアンスリウム博士に一瞥をくれる。

「あの……何があっただんですか？」

「……何もないわ。ええ、何も」

「そ、そうですか……」

ヘタに追求すれば、余計な火の粉が降ってきそうな……そんな雰囲気のため口を噤んだ。ただ一つハッキリしていることは、一番隅に腰かけてる不審者二名が、何かやらかした……という事。

不毛な問答と敵地到着

(くそッ……どうする?)

アンスリウム博士は軽く歯を噛み鳴らし、考え込んでいる。咲に耳元で囁かれた言葉が、頭の中で反芻されて仕方ない。

「ひとつ、ヘリにあたし等も乗せること」

「ふたつ、蒼神博士にはあたし等がした事は何一つしゃべらないこと」

「みつゝつ、腹減った!」

(……………)

国家調査室の役人はどうともなるが、後ろの不審者二名だけはやはりPFRSに招待などしたくない。

「ところで蒼神博士ってさあ、この件片付いた後は何か将来の展望とかあんの?」

ヘリが飛び立ち、すっかりくつろぎモードに突入した咲が静かに問う。

「ボクは科学者です。PFRSを本来の正しい姿に更生させて、社会に貢献できる事業に専念させたいんです」

「さ、左様で……」

適当なりアクションを用意していなかった咲は、茜に“ダメだこりゃ”みたいなアイコンタクト。

「ボクは『性善説』を信じています。悪人と呼ばれる人達は、生まれ育った周囲の環境がそう育ててしまう……だから、ダレだって悪の循環から脱出できれば真人間になれる! はい、絶対に!」

PFRS側の人間に拘束されて吹っ切れたのだろうか……彼はやたらと力強く主張した。周囲の空気は微妙だが。

「ふう……ん……」

咲は窓に額をくっつけて眼下に広がる海を見下ろしながら、神妙

な顔つきになった。

「じゃあさあ、その『環境』はドコのダレがつくつたんだろうね？」

「え……？」

「『環境』が人間を悪党に育てるってことは、その『環境』を揃えた人間は当然悪党なワケだ。じゃあさ、その悪党をつくりだした『環境』もまた別にあるって事になっちまうが……どうよ？」

「そうなりますね」

「ということは、最初にとんでもなく『高純度の悪人』がこの世に生まれ、最古の『環境』をつくっちゃったことになる。だって、人格を形成する『環境』は人工的なものであつて、自然発生したりしないんだし」

「そ、それは……」

蒼神博士が言葉につまる。

「博士が性善説を信じるのは結構。でもね……それもまた、博士が育った『環境』が構築した自我の一部だと思うよ。とどのつまり、性善説は『事実』ではあるが『現実』じゃあない」

「……う」

言葉が返せない。しかし、このまま論破されては良識ある大人として恥ずかしい。

「それじゃあ、咲さんは“生まれつきの悪人”を懲らしめるために、ボクの依頼を引き受けたというんですか？」

彼は絞り出すような声で応酬する。

「あたしは懲らしめたりなんかしない。徹底的に駆逐するのみ。全ては白か黒。中間なんて都合の良いモノは所詮、欺瞞」

「仕方のない事情で悪事に手を染めてしまった者も、強引に裁断するということですか？」

「仕方なく悪事に手を染めるようなヤツの意志は、既に悪なり」

「だから、その芽を無碍に摘み取って消してしまうと！？」

「悪党になることを回避する術は二つ。博士の言つ性善説を心の拠り所にして悪人に殺されるか……悪人を殺すか」

「バカなッ、それでは殺人行為の肯定です！ 悪人に悪行で対抗するのは不毛です！」

「なら例えばの話、＜産まれたての赤ん坊を無惨に殺害された母親が、犯人を殺害＞……これも『悪』？」

「ええ、もちろんです。死に対して死で購いを求める姿勢こそ不毛の連鎖であり、悪の芽を増長する元凶です」

「自分の身に同じことが起きてもそう言える？」

「……………ッ、言えます……………言えますとも！」

依怙地な子供みたいに無理した感じで断言した。ヘリが飛び立つてから数分で、中の空気はすっかり淀んでいる。

「ええ……………お取り込み中スミマセンが、わたくしめの下腹部で尿意という魔物が暴れ出しましてね、はい」

茜がわざとらしく前かがみ中。

「さあ、御早くッ！」

咲から差し出されるバケツ。

「うわ……………い、ショック・ザ・女の子ってカンジだね……………」
さすがに却下。

「漏るッ漏るッマジで漏る！ マジで恋する5秒前！」

「はい、どうぞ」

咲がヘリのドアを開けてやった。

「うわ……………い、世界初・ヘリから生放尿する19歳だね」
これまた却下。

「……………ん？」

海上を見下ろした茜の目が何かをとらえた。

「……………咲チャ……………」

「なんじゃい？」

「真下になんかいるよ」

「クジラか？ 環境保護団体か？ アパートの大家か？」

「ん……………多分、『戦車揚陸艦（LST）』」

ダウンッ――！！

「――ッ！？」

強烈な空気振動が伝わってきて、ヘリのすぐ側を“物体”がものすごいスピードで通過した。

「地对空ミサイル！？」

操縦席のエンプレスが状況をいち早く察知した。

「ど、どうということ！？」

アンスリウム博士は双眼鏡を手に取り、真下に目をやった。

「博士ッ、何が見えますか！？」

「マズイわね……なんて短気な『来賓』なのよッ」

彼女から焦燥感が滲み出る。

「アンスリウム博士……？」

「全速力でPFRSに逃げ込みなさいッ！」

「……りよ、了解ッ！」

――ゲンッ！！

「うおッ！？」

ヘリの突然の傾斜に乗員はあたふた。

「こりゃーイカン！ 目的地が近いということは、新しい衣装に着替えんと！」

「そだね、そだね！ メイクは女の命だよね！」

この状況でも悪フザケを忘れぬ立派な信念の咲と茜。

「海賊か！？ テロリストか！？」

すっかり気落ちしていた室長が、戦慄を感じ取って大声を上げる。

「似たようなモノよ！」

表情を強張らせたアンスリウム博士からは、何かを知っているような様子が見てとれた。その後……ヘリは特に追撃も受けず、PFRS本部がハッキリと視認できるほどの距離まで近づいた。

「……………」

もしかすると海に撃墜されていたかもしれない一瞬を経験し、一

同は無口になっていた。生着替え中の二名を除いて。そんな中、ふと杜若室長が呟く。

「『戦車揚陸艦（LST）』なんてよく知っていたな」
彼は隣に座る茜を睥睨する。

「あつれエ〜、わたしそんなこと言っただけエ？」

わざとらしく目を逸らした茜がスツとぼけた。

「……『柏木茜』という名は本名か？」

「かもしれない」

「こらこら待てーい！　うちの相方に何の容疑をかけようってか！？」

容疑が多すぎて困ります。

「着陸準備に入ります」

エンプレスが安堵した様子で伝える。とうとう目的地に到着したのだ。

「うわッ、デカッ！」

咲が前方に広がる光景を目にしてびっくりしている。最新鋭の超大型浮体海洋構造物を土台にして造られた、正方形の人工島。国際水域のド真ん中に陣取り、中央の超高層ビルと周囲の主だった施設には、100名余りの職員等が働いている。ヘリはゆっくりと高度をおとしてヘリポートへの着陸準備に入る。

「では、当然の処置として槐は私と一緒にオーナーの元へ来てもらうわ」

「はい……」

敵陣に入った。過程はともかく、当初の目的は果たした。ただ……チラツと横に目をやれば、新コスチュームに着替え終わった自称・ボデイガードの二名。

「きいおーつけえーいイイイ！」

「びしッ！」

相変わらずドコに隠し持ってたかは知らないが、今度は軍服。ここから導き出せる展開としては、PFRS到着↓バカ二名を解放↓

エマージェンシー。

「茜二等兵、これより降下せよ！ 作戦開始！」

「行ってきます！ 鬼軍曹殿！」

バツ——！

飛んだ。ヘリはまだ着陸前。

ぐしゃ……

逝った。

ヒュンヒュンヒュン——

ヘリが着陸。側には戦死者¹。

「うおおおおおおおおおおおッ——！」

何が彼女をそんなに興奮させるのか、咲鬼軍曹はヘリを降りると同時に、竹槍構えて走り出す始末。向かう先からは送迎用のジープが二台走ってくる。

「あゝゝゝゝ、咲さゝゝゝん！」

クライアント

蒼神博士が一応呼び止めてみるが、止まらない。ジープめがけて真っ直ぐ突っ込んで行くその勇姿は、どんどん小さくなって……

…ドンツ。

「あ、はねられた」

「はねられましたね」

茜二等兵と蒼神博士が、“まあいいか”って感じで呟いた。ジープの方も何事もなかったかのように止まらないし。

キツ——

送迎車が止まる。先頭車両にはスーツ姿の男女が数名乗っていた。

「……エンペラー」

運転席から降りてきたスキンヘッドの男を見て、エンプレスは申し訳なさそうな面持ちで俯く。二台目の後部座席には、スーツ姿の

初老の男が一人乗っていた。

「……支配人^{オーナー}」

蒼神博士の面前に、最も警戒せねばならない相手が現れた。

「——ん？」

咲と茜の視界に、どういうワケか“三車両目”が現れた。ただし、自動車ではなく……『自転車』。当然のことながら人が跨っているワケだが、何故かその人物は、白衣姿に目出し帽を被っている。

「敵襲ウウウウウツ！」

「ヤっちまうでありますッ！」

自転車に跨る珍人物に対して不審者二名がやたら反応し、攻撃意志をムキ出し。

「蒼神君、こちらに乗りたまえ」

PFRS支配人・魅月氏が、後部座席から降りてきて彼の名を呼んだ。

「……………」

蒼神博士はあえて押し黙る。相手はつい先日、自分にフリージアをよこして抹殺しようとした張本人。穏やかに対応できるものではない。

「折角戻ったんだ。話し合いの一つもせんかね？」

「……ええ、もちろんです」

覚悟はあるが、気がりもある。彼は後ろを振り向いて同伴者二名に目をやった。

「咲さん、茜さん……ありがとうございます。予定通りとはいきませんでした。助かりました」

「むッ、任務終了でありますか、司令官殿!？」

「とうとう解散でありますか、司令官殿!？」

到着5分で不名誉除隊。

「咲さん」

蒼神博士はおもむろに彼女に歩み寄って、手を差し出した。

「短い間でしたが、本当にありがとうございました」

「……う、うむ」

握手を求められて咲は彼の手を握り返したが、珍しくリアクションが大人しい。心なしか気恥ずかしそうだし。

「鬼軍曹殿！ 性欲センサーが異常をキャッチ！ こ、これは……ラブ注入でありますッ」

バキューン！

「はうッ」

咲鬼軍曹、発砲。茜二等兵、再度の戦死。

「依頼料はなるべく早く振り込んでおきます。それでは」

そう言つて、彼は少し申し訳なさそうな笑顔で踵を返した。

「あ、うん……よろしく……」

赤面。赤面。赤面。

バンッ――

車のドアが閉められ、本部ビルに向けて出発する。

「……さて」

残されたエンプレスに任されたのは、雑務の処理。

「茜二等兵！ これより我軍は次なる作戦につく！」

「何でもこいであります！」

雑務の対象その1とその2がぼざく。

「さ、行くぞ」

ズリズリズリ……

襟首をつかまれ、マヌケに引きずられてく二名の敗残者。世界的規模の影響をもたらす政府施設に、野放しにしている輩ではない。

（コイツ等は何かしでかす――ゼツタイシデカス）

エンプレスの苦勞多き一日が始まった。

不毛な問答と敵地到着（後書き）

LSTⅡ人員や物資の揚陸を目的とする揚陸艦の内、揚陸艦自体が直接海岸に乗り上げることによって、歩兵や戦車などを揚陸する艦種のこと。

ランチタイムとティータイム

ガサゴソ、ガサゴソ……

パブリス

『PFRS』——新薬開発のコンサルタントと世界規模で展開する環境整備都市の設計でその名を轟かせ、軍用兵器の開発も請け負い、わずか20年で不動の地位を築いた国営企業。ただし、マスコミの間では、軍部の兵器を密輸するためのダミー会社も兼ねていると噂され、現実に取り先には先進各国の軍部が含まれ、軍需産業から得られた利益が過半数を占めている。

ガサゴソ、ガサゴソ……

PFRSの土台である人工島のシステムは、独自の技術を駆使した特許の塊で、潮風に強く、農薬散布が不要な芝生が年中緑の匂いを漂わせている。成分調整された肥沃な土壌には、世界中の木々が根をおろし、季節の移り変わりを知らせるよう操作されている。敷地のいたるところに道路が整備されており、PFRSの開発した燃料電池で走るジープは、排出するガスを空気中で無害な物質に分解する。一般には、環境保全の面で高く評価されている。

ガサゴソ、ガサゴソ……

その立地条件から、外部との移動手段は通常は船かヘリに限られ、基本的に職員は敷地内に設けられた宿舎で生活しており、ベイエリアには週に一度の定期便が物資を届け、食料品店・病院・日用雑貨店が建ち並ぶ。大型のハリケーンや通信事故に備えて、十分な備蓄もされており、海上のコロニーとして機能している。

ガサゴソ、ガサゴソ……

さっきから近くで変な音がしていますが、何でしょう？

ガサゴソ、ガサゴソ……

あ、ほらまた。今、あそこに落ちている『段ボール』が動いたような気がしました。清掃車が巡回する敷地内において、あまりに不自然な光景……少しの間見ていましょう。

。

ピクリともしません。気のせいだったんでしょうか？

ガサツ……ゴソツ……

音がした。けど、振り向けば動いている様子はない。しかし、確かに段ボールはさっきの位置から移動している。ちなみに、段ボールにはサインペンで『スネーク号』と書かれています。

ガサゴソガサゴソ！ ガサゴソガサゴソ！

すんげえスピードで動き出した。あッ、後ろから清掃車がやってきた。このままじゃ轢かれてしまいます！

——ガサゴソガサゴソガサゴソッ！！

清掃車の接近に気づいてスピードアップ。しかし……

——グシャ

「あ……」

「あ……」

『スネーク号』が轢き逃げにあいました。すぐ側で様子を見守っていた、茜二等兵とエンプレスの心が一つになったりした。潰れた段ボールから道路に赤黒い液体が流れ出したりして、何気に大事故。業務上過失致傷も気にせず、ヨロけながらもゴールを目指して進む。そして……ゴ~~~~~~~~ル！

「ミッション終了オオオオ!!」

段ボールが内側からバリバリと裂けて、中から血まみれの咲鬼軍曹が出現。

「ハアハア……危険で過酷な作戦だった」

危険というより迷惑です。

「鬼軍曹殿ツ！ どうしますかッ!？」

「突入あるのみッ!」

そう言つて、ゴール地点となった建物の中へ。正面入り口には『社員食堂』と書かれています。つまり、食事。

「ちよつとアンタ達……」

早く本土への送還手続きを済ませたいエンプレスとしては、迷惑この上なし。

「動くんじゃねえ!」

突入するなり調理場で仕事しているオツチャンに向かって、オモ機関銃チャで警告。

「焼き肉定食はあるかッ!？」

「あるよ」

「安全かッ!？」

「安全だよ」

「よし、一人前用意しろ!」

「ごめん、さつき売り切れた」

「きゃあああああああああッッ!」

早くも敗退。オモチャを構えて周囲を警戒。そして、目にしたのは隅っこの方で一人寂しく食事している職員(?)の姿。よく見れば、さつき自転車に乗っていた目出し帽の不審人物。

「ま、まさか……」

双眼鏡を手にとってテーブルの上を確認。目標は………焼き肉定食と判明!

「おのれッ、吉田あああッ!!」

勝手に命名。

「まあ、飲みなさい」

調理場のオツチャンがコーヒー出してくれた。

「うわ〜〜い」

あっさり降伏。カウンターに着席。そして、エンプレスが口を開く。

「この際だからハッキリ言っておく。アンタ達が調査会社の社員でないことはバレているわ。蒼神博士の身边警護は口実……本当の狙いは何？」

「茜二等兵、事の重大性を教えてやりたまえ！」

「我々には生活がかかっているのです！ 無事に郵便振込みがされないと、大家にアパートから投棄されるのです！ 火曜日に！」

「あくまでしらばっくれるワケ……」

「鬼軍曹殿！ どうやら我々は、蒼神博士の言っていた『神の設計図』^{ルズ}とかいう物体と関係があると思われるようです！」

「ぬッ、やはりそうか。しかし、蒼神博士^{クライアント}の話はよく聞いてなかったんで、よく分からん！」

社会人失格だ。

（こ、コイツ等……！）

どうあっても真意が見えてこない不審者二名に、エンプレスのイライラは募る。そんな彼女の憤りを他所に、二人はコーヒーをグビグビ。

「げえつぶ」

「うえつぶ」

それでいいのか女の子？

「とにかく、次の定期便が来るまで拘束するわ。本部ビルには絶対入るな。支配人^{オーナー}にも私の仲間にも、あの夫婦にもこれ以上関わるんじゃない」

「いえっさー！」

「これより先のミッションは勇気と信念が試される！」

「了解であります！」

「しかし、我々にそんなモノは必要ない！」

「もつともであります！」

「必要なモノは！？」

「肉欲と笑いであります！」

「よくぞ言った！ ついて来い！」

——ダダッ！

鬼軍曹、走る。さつき吉田さんが開けていった窓をわざわざ閉め
といて、少し助走をつけといてから……

ガシヤアアアアアアアア—— ツッッ！

突き破っていった。

「……おいおいおいッ！」

呆氣にとられていたエンプレスが、少し遅れて後を追う。これま
た割れた窓から跳び出していく。その様子を調理場のオッチャンは、
優しい笑顔で見送るしかなかった。

PFRS本部ビル60階・『来賓用会議室』。ビル全体の無機質
な感じとは逆に、エアコンや端末の設備が無く、床に土と石を敷き
詰め、壁は四方向全てがガラス張り。背の低い樹木まで植えられてお
り、植物園のような雰囲気と香りがたちこめている。南の窓際に設
けられた簡易カフェテラスには、紅茶と御菓子が用意されていた。
「とりあえず席に着こうか」

支那人オナーに促されて席に着いた蒼神博士が、腰をおろして初めて気
がついた。

(……………四つ?)

椅子が四つ。彼の隣にアンスリウム博士が座り、彼女の向かい側に支配人^{オーナー}が座った。では、その隣にある席は？ 支配人^{オーナー}・魅月氏が目を細め、テーブルに両肘について手の平を重ねた。

「君の生還が世界を追いつめた」

「——え？」

「PFRSの体面や地位を守るため、殺害を指示したと考えているならば……間違いだ」

ガチャ——

扉が開いて軍服姿の人物が三名現れた。

「確か直接的な面識はなかったな……紹介しよう、『ダリア准将』だ」

「なッ!？」

あまりの唐突さに蒼神博士の顔が引きつる。銀髪をオールバックにした長身の女性で、歳は40代前半程だろうか、二人の男性将校を従えている。彼女は一言も発さず蒼神博士の前に歩み寄って……

パンッ——!

いきなり彼の頬を平手打ちした。

はばかり軍部と暴れる部外者

「うッ!？」

まさかの不意打ちにヨロめく博士の胸ぐらをつかみ、自分の方へ強引に引き寄せた。

「はじめまして、蒼神槐君」

端正な顔立ちをしてはいるが、その表情には大いなる怒りの色が滲んでいる。准将は支配人の隣へ面倒臭そうに腰をおろして、胸元で堂々と腕組みをする。

「ところでアンスリウム、PFRSは腕の良いパイロットを飼っているな」

ガタツ——!

座っていたアンスリウム博士が思わず立ち上がり、准将をキツと睨みつけた。

「座りたまえ」

「……………はい……………」

支配人に促され、彼女は眼鏡の位置を直しつつ着席する。

「事の次第はモニターしていました。准将、ミサイルで威嚇すると……………度が過ぎますな」

「軍部の厳命を無視し、上級職員を抹殺しようとした行為は度が過ぎんのか？」

「……………」

支配人に返答はない。そして、この状況下で蒼神博士の情緒が安定しようもない。自分の殺害を指示した張本人と、軍部に拘束しようとする将校が同席しているのだから。

カチャ……………

ダリア准将はカップを手にとって紅茶を一気に飲み干す。

「全員時間に追われる身だ。早速、本題に入ろう。蒼神、弁明すべきことはあるか？」

「……………」

彼は黙秘に徹する。それ以外に抵抗の手段を持ち合わせていない。

バシャ——！

「うつ……………」

自分の紅茶を准将にブツかけられて、蒼神博士が怯む。

「話にならん。どうしてくれる？」

准将の鋭い視線が支配人^{オーナー}を射抜く。

「少々宜しいでしょうか？」

「何だ？」

状況を見兼ねてか、アンスリウム博士が割って入る。

「もし、彼を犯罪者として拘束するのなら、弁護士を呼んでからにしてください」

「……………拘束？」

准将は脚を組んで軽く鼻で笑うと、二人の部下に手で合図した。

「ワタシは気が短い。前戯は省いて単刀直入にブチこませてもらう」
テーブルの上にスーツケースが置かれ、中から剣呑な道具一式が取り出される。そして、将校二人が蒼神博士の脇に立ち、両腕を押えつけてヒモのような物で椅子に固定してしまう。

「准将ッ！？」

「騒ぐな小娘ッ」

34歳になる女性に対して“小娘”と一喝した准将は、部下から注射器を手渡され立ち上がる。

ガッ——！

彼女は蒼神博士の髪を鷲掴みにして、無造作に引っ張った。

「うつ……………」

「さて、コイツが何だか分かるかい？」

そう言つて手にした注射器を目の前でチラつかせる。

「…… 自白剤です」

「効果は？」

「…… 大脳上皮の麻痺」

「使つたことは？」

「…… ありません」

「そいつはよかった。初体験だな」

「くっ……」

容赦なく注射器の針が彼の皮膚を貫く。

「准将、お待ちを」

「何だ？」

注射器の内容物が注入される寸前で、支配人^{オーナー}が声をかけた。

「朦朧とした状態での自白は信憑性が低くなり、細部については記憶違いや記憶の齟齬が出ます。あるいは、投薬された人間の主観的妄想が含まれる場合もあります」

「だから何だ？ 薬が回れば政治家でも僧侶でも等しくそうなる」

「だから困るのです」

「どういう意味だ？」

「彼が削除した実験データを復元するには、シーケンサーを正しく操作する必要があります。薬を使用しては精密な作業は無理です」

「…… ちッ」

准将は軽く舌打ちして注射針を引き抜いた。そして、蒼神博士の顎先をグツとつかんで、自分の顔に引き寄せた。

「神の設計図^{バイタルズ}は軍部の所有物であり、P F R Sは専用の金庫でしかない！ 勝手な接触は断じて許さん！」

耳をつんざくような声がフロアに響く。

「…… ふう」

アンスリウム博士が安堵のため息をつく。

「魅月ッ！」

「何でしょうか？」

「猶予は24時間だ、結果を出せ！」

「もし、成果が出なかった場合は？」

「『沈^{しん}丁^{ちやう}花^け』が直接占拠を行い、職員全てを査問にかける」

「……了解しました」

^{オーナー}

支配人は特に動揺する様子もなく、自分の紅茶を口に運んで飲み干した。

ゴウウウウウ——ン……

ダリア准将と二人の将校を乗せたエレベーターが降りて行った。会議室に残った三人は口を噤んで、しばらく微動だにしない。そして……

ドゴツ——！

「あう！？」

大きく振りかぶったアンスリウム博士の拳が、蒼神博士の頬にめり込む。

「このバカッ！」

両肩をワナワナと震わせながら本気でキレている。

「ふう……」

その光景にうんざりした様子のオーナーは席を立ち、のどかな陽射しの差し込む窓ガラスに額を押し当て、目を閉じた。

^{オーナー}

「……支配人、SPのエンプレスさんから聞きました」

「……」

「彼女は“恐怖に打ち勝てる人間はいない”と言っていました」

「……」

「そして、恐怖を消すため、神の設計図^{バイタルズ}は人間をヒトではないモノに変えました」

「……」

「しかし、もうここまでです。アレを破壊しましょう」

蒼神博士の真摯な発言に、アンスリウムが目を丸くする。

「君が削除した実験データの内容は大よそ見当がつく。君も神の設計図イタルスに話かけられたのだろう？」

そう言つて蒼神博士を睥睨した。

「……は、はい。でも、どうして……？」

不意打ちを食らつて彼は一瞬戸惑う。

「君達は『惑星自壊説』という学説を知っているかね？」

魅月氏は観葉植物の葉を弄りながらポツリと呟く。

「いえ、ボクは……」

「確か、大昔にネットに流れたカルト的な学説だったような」

「そつだ…… <人類とは地球によつて創造された生体兵器である>

…… 蒙昧な科学者の血迷つた仮説だ」

彼は霧吹きを手にとつて中を見る。水は入っていない。空だ。

「しかし、もし…… その仮説を発表した根拠が神の設計図バイタルスにあるとすれば、その科学者も君と同様にアレの破壊を考えただろうな」

「……？」

脈絡のない話に蒼神とアンスリウムが瞠目する。

「では、場所を変えようか」

そう言つて、魅月氏はエレベーターのコンソールを操作した。

「准将、猶予など与えて宜しかったですか？」

「構わん。こつちにも準備時間が必要だ」

「しかし、連中もバカではありません。何かしら策を講じてくるのでは？」

「それでいい」

「は？」

本部ビルを出たダリア准将と二人の将校は、送迎用のジープを無視し、徒歩でヘリポートに向かつていた。

「火薬の量は十分過ぎるくらいで良い。PFRSのバカ共には徹底抗戦に出てもらおう」

「し、しかし……隣国の領海が肉迫しているPFRSでの戦闘行為は……」

「上層部の腰ぬけ共がどう騒ごうが、知ったことではない。ワタシの沈丁花がきつちり仕事をこなす」

准将は強烈な毒を吐き、軍服のポケットからシガレットケースを取り出す。ケースから出てきたのは葉巻でも紙タバコでもなく……『ステイックシユガー』。端を千切って、伸ばした紅い舌の上にサラサラと乗せていく。ヌラヌラとした舌の上に白い小山ができて……

——ゴクッ

蛇のように飲み込んだ。

「つまり、無かった事にする……と？」

「そうだ。PFRSの連中には全員“無かった事”になってもらう」
そう言って不気味に微笑んだ。

ダダダダダダダダッ——！

彼女達のすぐ側をものすごい勢いで走り去り、ヘリポートめがけて突進していく二つの影。強烈な直射日光が照りつける中、全く怯まぬ咲鬼軍曹と、脂汗で蠟人形みたいにテカってる茜二等兵が、異常なテンションで出沒。

「ぬッ、茜二等兵！」

「何でありますか！？」

「行き止まりだ」

「そのとおりであります！」

ヘリポートまでやって来たはいいが、ヘリの操縦なんぞできるワケもない偽兵士……二人してグダグダしている。

「仕方ない！ かくなる上はブッ壊せ！ 目標は待機中のヘリコプターだ！」

「ヤっちまうであります！」

ドッゴオオオオオオオオオオ——ツツツン！

背負っていたチンケなバズーカ砲をブツ放す。しかし、砲弾は出ない。大量の煙を吹いただけ。

「ぬッ！ 説明したまえ二等兵！」

「申し訳ありません！ コレは早朝バズーカでした！」

「バカ者！ とくに昼過ぎだ！」

そういう問題ではない。

「鬼軍曹殿、緊急事態であります！」

「どうした！？ 予定外の爆音に驚いて軽く失禁したか！？」

「それだけではないでありますッ！」
「したんだ。」

「何事だ！？」

「あそこで我々の作戦を観察する輩がおります！」

匍匐前進しながら准将達を指差してほざく。

「……准将」

「……何だ？」

「こちら側としてはどう対応すれば？」

「知らん」

間違つても関わりを持ちたくない類いの連中を前に、准将と将校

二名は当惑気味。

「見られてしまつては仕方ない！ 殺つてしまえ！」

「らじゃあーッ！」

ポ~~~~ン……

キレイな放物線を描いてのんびりと投げつけられる手榴弾。

——パシッ

ダリア准将はこれを冷静にキャッチ。咲めがけて投げ返す。

カキイイイイイ——ン！！

打ったああああああ——ッ！！

鬼軍曹がオモチヤの機関銃でフルスイングだ。

のびる。

のびる。

のびる。

で——。

ドカアアアアアアアアアアア——

ツツツン！！

大・爆・発。

「……あれ？」

本物が混じってた。

「茜二等兵ッ！ 我が部隊の訓辞を述べよッ！」

「負けないこと！ 投げ出さないこと！ 逃げ出さないこと！ 信じないこと！」

信じろよ。

「撤収う！」

二人は現状を見なかったことにして駆け足。

「……准将、既に何か起きているようです」

「……行くぞ」

彼等もまたこの状況を見なかったことにして、へりに乗り込もうと……

「——ん？」

ダリア准将が足を止めた。逃走していく咲の顔を、目を細めて見つめている。

「准将、どうかされましたか？」
「……ん、いや、何でもない」

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

三人を乗せたヘリが上昇していく。PFRSに与えられた猶予はわずか。神の設計図バイタルズをめぐって、それぞれの思惑が錯綜しはじめた。が……ただ一つだけ。

（さっきの小娘ガキ………どこかで………？）

ただ一つだけ、ダレの思惑とも関係ない不確定要素が生まれようとしていた。

仮説の真偽と究極の小競り合い

ガコンッ――

エレベーターのドアが開く。眼前に広がるのは、金属とコンクリートの交じり合った無機質な空間。

カンカンカン……

階段を降りた先に見えるのは、吹き抜け状になった巨大な強化ガラス水槽。その中に佇むのは、人間の形をしたリアル過ぎる模型と、14名の職員……だった者達。

「そのままだ……」

蒼神博士が消え入りそうな声で呟いた。

「ああ、その通りだ」

支配人・魅月氏は少々申し訳なさそうな表情で俯いた。

「アナタが去ってからずっと検査しているけど、特に目新しい情報は得られてない。何も聞こえてないし、一言も喋らない。なのに健康状態はすこぶる良好……ワケが分からないわ」

アンスリウム博士は水槽周辺のコンソールを操作しながら、軽く溜め息をついた。

「蒼神君、さっきダリア准将がPFRSは『金庫』だと言ったのを覚えているかね？」

「……ええ」

「PFRSの設立に掛かった莫大な費用と維持費は、その殆どが准将によって賄われている。国防予算に意見できる立場の一人とはいえ、一個人が好き勝手できる額ではない。私が一介の科学者だった頃からのつき合いではあるが……正直なところ素性が知れん」

（もしか……）

蒼神博士が確信する。

「神の設計図は本来なら人の目に晒される予定ではなかったが、

地球は15万年経っても成果の得られない計画に痺れをきらし、人間の手に委ねようと考えた」

「^{オーダー}支配人、^{バイタルズ}軍部は神の設計図を軍事利用するため、PFRSという金庫を用意したと？」

アンスリウムが訝る。

「いや、“計画”は軍部によるものではない。『惑星自壊説』で唱えられている通り、地球の意志が具現化されたものだ」

「なるほど……惑星が自殺などすれば人類のみならず、全ての生命が滅ぶ。そうなると解つていれば、ダレだって阻止しようとするで、自壊のカギとなる神の設計図^{バイタルズ}をなるべく人の目に触れられない場所に隠匿した……と？」

^{アンスリウム}女史が自問するかのように聞く。

「ああ、そんなところだ」

「はっ……バカな。新興宗教の教祖がたれる説教じゃあるまいし、ネット上で興味本位で注目されただけの仮説に、軍部の決定権が左右されると言うんですか？」

「その通りだ」

魅月氏の返答に躊躇は感じられない。

「正気ですか！？ ちよつと……槐からも何とか言つてあげて」
彼女は頭を横に振りながら蒼神博士に目をやった。

「地球の自殺までの猶予はどれくらいですか？」

「ちよ、槐ッ……？」

「……やはり、君という若者は変わっているな。何を根拠に賛同するのかね？」

「ボクは知っています。アナタは決して嘘をつける人間ではないと……現在も昔もそれは変わらない。だからこそ発表した。ただし、軍部の監視があつたため、公式な学説としては認められなかった。そうなんですよね？」

^{アンスリウム}蒼神博士の言葉に女史はハツとし、魅月氏は小さく頷いた。

^{バイタルズ}「神の設計図が政府機関に接收された当時、私は税金で食いつなぐ

公僕にすぎなかった。どういう経緯かは知らないが、精密検査に立ち会う機会を得て接触し、ダレがどう考えて何を実行しようとしているか、無理矢理知らされた……同じなんだろう？ 君の時も」

「いえ、ボクが接触で得た情報は、もつと抽象的なモノでした。言うなれば、ダレかとの会話の断片みたいなもので、神の設計図バイタルズは何かのファクターを必要とし、探している最中であると訴えてきました」

「なるほど……いずれにせよ、再度ダリア准将を招かねばなるまいな」

魅月氏はそう言つて、巨大な水槽で静かに佇む職員達を哀れみの目で見つめた。

「先ほど来賓室で准将が口にした『沈丁花』しんちょうけとは？」
アンスリウムは口元に手をあて目を細めて問う。

「『沈丁花』とは……世界規模で蔓延する恐れのあるウイルスや病原体を、街ごと封じ込めて滅却する特殊機関。トップに立つダリア准将が全権を掌握していて、場合によっては、一国の首相の権限を無視して独断で行動できる」

「それはつまり、PFRSを軍事力でもって強制的に占拠し、神の設計図バイタルズをいつでも奪取できるというワケですね」

「ああ、その通り。しかし、だからと言って蒼神君の提案通り、破壊するというワケにはいかん。この14名の職員はまだ生きている原因をつきとめる前に破壊すれば、彼等の命に関わるやもしれん」

「あ……」

蒼神博士はまたもや失念するところだった。自分の勝手に生じた沢山の人の死を。

「支配人オーナー、少々宜しいでしょうか？」

「ん？」

アンスリウム女史が魅月氏のもとに歩み寄り、彼の耳元で何かを呟きかけた。

「……分かった。私は先にスノードロップを召集して、今後の対策を練るとしよう」

そう言って彼は踵を返してエレベーターに乗り込む。

ゴウウウウウウン……

エレベーターは上昇していき、薄暗いP4施設に二人つきりとなる。そして。

「——う！？」

突然、蒼神博士の身体が強引に引き寄せられ、アンスリウム博士と密着する。

「……ん」

蒼神博士の腰に回された腕が、しっかりと絡みつき放さない。頭一つ分背の高いアンスリウム博士が、相手を見下ろすような形で抱き締めている。

「……あ………」

彼の口から苦しみにも似た声が漏れる。が、彼女の方は溜まっていた何かを一斉にブチまけたかのように、貪っている。まるで動物の捕食行為だ。

「どうして逃げたの？ この卑怯者……！」

アンスリウムからわずかに聞こえてきた嗚咽。

「だ、だってボクには力がなかったから……」

自分出来る事と出来ないことは分かっていた。経験値の少なさも、人の機微を見逃してしまう愚かさも気にしていた。だから思った。ダレか力を貸してくれ……ボクは一人じゃ何も判断できないんだ。でも、ボクに協力してくれた人達は死んでいった……一体、ダレが悪いんだ？ ボクか？ 軍部か？ PFRSか？

「そんなコトない。槐、アナタが必要な。さあ、『棕櫚』^{しゅう}の所に行きましょう」

アンスリウムは慈しみの声で彼に眩きかけ、その手を取ってエレベーターまでエスコートする。

ゴウウウウウウン……

二人はエレベーターに乗り込んだ。エレベーターは上昇していき、海底の研究所から人の声も物音も一切が消えた。

フッ――

一瞬、巨大水槽のすぐ側を影が一つ通り過ぎ、物音一つさせずに薄明かりの下、その姿をさらした。コンソールを操作する真っ黒なスーツ姿の人物。

「青いですねえ……なんとも青い」

ガコンッ――！

水槽のハッチのロックが解除される音がした。

PFRS本部・北方区――ジープが一台走っている。後部座席の中央には焦燥した中年男性が座る。高そうなスーツは薄汚れ、ネクタイはヨレヨレ。その中年男性を挟んで座る男達は、綺麗なフォーマルスーツ姿で腕組みし、周囲を窓から警戒している。運転席と助手席に座る者達も同様で、助手席のスキンヘッドの男はPDAで何かを調べている。

「……ん、身元の確認がとれた。PFRSへようこそ、国家調査室長殿」

エージェント・エンペラーは、小バカにするような口調で彼に一瞥をくれた。

「政府の偉い御役人様は大変ですなあ。こんな辺境に御一人で視察ですか？」

「ホッホッホッ、タワー君の皮肉は相変わらずおもしろいのう」

「……………」

左右を挟むエージェントの無駄口など全く気にしない素振りで、室長は押し黙る。

「そつえば、エンプレスの事聞いたか？」

エンペラーが運転席の女に問いかけた。

「さつきね。なんでも後ろのオッサンに加えて、アンスリウム博士とフリージアが同伴してたそうじゃない……一体、どうなったんの？」

「それだけじゃない」

「ええ、分かつてる……」

ハンドルを握る女の手にはイヤな汗が噴き出す。どうにもさつきから周囲の様子が気になって、キョロキョロしてしまう。

「おい、プリエステス……事故ンなよ」

彼女の様子に気づいたエージェント・タワーが口を出す。

「うつさい。オマエは話しかけるなッ」

車内の約三名は同様にピリピリしていた。

「……ん？」

車内のコンソールにあるモニターから、緊急コールが発せられている。エンペラーがモニターを操作すると……

<私よッ！ エンペラーは！？>

エンプレスがかぶりつくような勢いでリーダーを呼びつける。

「よう、久し振り」

「ホッホッホッ、元気そうで」

<だからッ、エンペラーはッ！？>

後部座席のマイペースな男共は無視。

「何事だ？」

エンペラーがモニターに顔を近づける。

<今、北方区？>

「ああ。調査室の役員殿同伴で、ゲストルームに向かっているところだ」

<近くに人影は無い！？>

「……人影？」

<いいから！>

「……いや、ダレもいないが」

<油断しないでッ！ そっちに向かったハズだからッ！>
「だから何のこと……だ……？」

ピッピッピッ！ ピッピッピッ！ ピッピッピッ！

——笛の音？

「……………」

車中の全員が瞠目し、モニターのエンプレスが固まっている。

ピッピッピッ！ ピッピッピッ！ ピッピッピッ！

前方から聞こえてくる。プリエステスがスピードを落とす。

「おい、ありや何だ……？」

タワーが呆けた面で指差した先——炎天下に迷彩服を纏って、ヘルメットを装着した総勢二名の兵士さん。ジョギングしながら笛を吹いている。ヘルメットで陰ができて顔が見えない。

ピッピッピッ！ ピッピッピッ！ ピ———ッ
ッ！—

<ちよっと、どうかしたの？ 笛みたいな音がするけど……？>
エンプレスがオドオドしはじめる。

「……………止まった」

<は？>

ザッザッザッ！ ザッザッザッ！

「足踏みしはじめた」

<は？>

キッ——！

異様な危険を察知したプリエステスが車を停止させる。彼等の前方50メートル程先に……

「あたし等正義の兵隊さん！」

「わたし等正義の兵隊さん！」

ザッザッザッ！

「悪党潰して金もらうー！」

「悪人倒して金もらうー！」

ザッザッザッ！

「性欲・物欲ふりかざしー！」

「食欲・私欲を武器にしてー！」

ザッザッザッ！

「弱者を救うのカッコイイー！」

「強者をボコるの気持ちイイー！」

ザンッ、ザンッ！

「いくかッ！？」

「いきましょ！」

「やめるか！？」

「やめましょ！」

どっちだよ。

ザッ——！

不審者二名の動きが止まり、その場で起立・あゝんど・敬礼。そして……

「——ッ、プリエステス！ バックだッ！」

ギョルルルルルルウウ————！！

“緊急事態”の四文字が車中によぎって、エージェント達の本能が「何かヤベえ！」と叫んだ。

勇敢なSPと愉快な追いはぎ

「なッ、何が!？」

うなだれていた室長も何事かと前方に目をやる。

「……………え？」

人が宙を飛んでいた。泳ぐみたいに飛んでいた。まるでスローモーションのように見えて……

——ズンッ——!

「うおッ!？」

強引にバックするジープのボンネットに人が降ってきて、中の人間を上下に揺さぶった。

「エ、エンペラー! コイツは!」

「ちよっと、頭下げてッ! 後ろが見えないッ!」

「ど、どうなっているッ!？」

車内は当然、パニックだ。世界でも指折りのセキュリティを誇るPFRS本部にて、襲撃を受けているのだから。

「ホッ……ホホッ……さつさと振り落としたまえ!」

白髪混じりの高齢エージェントがハラハラしながら叫ぶ。

「くうおのうッ!」

グオンッ! グオンッ! キイイイ————!!

先程まで微かな潮騒しか聞こえなかった周辺に、けたたましい車の蛇行音が響き、道路脇の植え込みを派手になぎ倒していく。

「ナメやがってッ!」

激昂するタワーがオートマチックを抜いて、フロントガラスに銃口を向ける。

「オイ、落ち着け！ 防弾仕様なのを忘れたか！？」

「おっと……悪リイ！」

「プリエステス、このまま中央区まで戻れ！」

「了解した！」

キキキキイイ———— ツツツ！！

「お、おい、どうする気だ……？」

左右の揺れに弄ばれて、後部座席の三名が一緒に斜めに潰れている。それに合わせてボンネット上の鬼軍曹も、ヨタついたり貼りついたり。

「中央区にうちのメンバーが集まっている！ 総出で捕まえる！」

船上での一件を身をもって体験しているエンペラーは、襲撃者を強大な敵とみなした。

ゴンッ！ ゴンッ！

鬼軍曹がオモチャの機関銃でフロントガラスを殴りだす。

「無駄無駄ッ！」

船上で受けた屈辱を晴らすべく、タワーが中指を立てて舌を出す。

ガンッ！ ガンッ！

今度はヘルメットを脱いで殴りつける。もちろん、傷一つつかない。

「アハハッ！ バカがもがいてる！ もがいてる！」

アクセルを踏む足を小刻みに震わせ、プリエステスが笑顔で勝ち誇っている。

ドンッ！ ドンッ！

ついにはヘルメットを投げ捨て、拳で直に殴りつける。

「ホッホッホッ、元気な才嬢サンだ。しかし、そのガラスは軍用ライフルの近距離射撃ですら……」

グググウウウウウ——

鬼軍曹の右上半身が、ありえない角度まで反り返った——直後。

ドオオオオオオオオオオオオオ——
ツツツン——

………ピシッ………

「——ッ!?」

「——ッ!?」

「——ッ!?」

「——ッ!?」

エージェント一同、瞠目。

「おい……割れてるぞ」

室長がボソリと呟く。更に……

——バシユッ!

「うおッ!?」

左の前輪が突如パンクして、エンペラーが窓ガラスにスキンヘッドをぶつける。

バシユッ! バシユッ!

加えて矢継ぎ早にタイヤが二つ破裂して、ジープのコントロールが大きく崩れる。

「くっそ——!」

プリエステスはブレーキペダルを潰すような勢いで踏み込んだ。

「ホホッ！ こりゃ銃撃だ……微かに遠くの方から銃声がした！」
「もう一人の方の仕業かよ！？」
「ウソでしょ！？ 500m以上離れてるハズよ！」
車はものすごい勢いでスピンし、ボンネットを占拠していた鬼軍曹は遠心力に負けてブツ飛んだ↓羽ばたいた↓落ちた↓しばらく転がって……止まった。

チリンチリン……、チリンチリン……、ぐしゃ……

たまたま通りがかった吉田さんの自転車に轢かれた。

「ふうふう……ふうふう……」

ジープは停止した。エージェント達は周囲を警戒しながら呼吸を整えている。

「おい、エンペラー……」

「……何だ？」

「この車って……ホントに防弾仕様だったか？」

「ああ、そのハズだが……」

フロントガラスには鉄球が降ってきたかのような跡が、クッキリとついている。

「エンペラー、銃を抜いというて」

「どうした？」

「“襲撃者”の相方が来るよッ」

まだ豆粒くらいにしか見えない二等兵が、ヒイヒイ言いながら走ってくる。ウエストの贅肉をタプタプさせて非常に分かりやすい。

「もう中央区に入った。タワー、無線で他の連中を呼べ」

「………あ」

タワーが呆けた面で外を指差している。

「おいッ！ どうし……た……」

エンペラーが後部座席に目をやる。タワーが指差したその先……鬼軍曹が既に復活しており、ジープのバンパーをがっちりと両手で

捕まえている。一瞬、車中の全員に「それは有り得ない」的な想像がよぎる。

「まるで……持ち上げようとしているみたいだな」

室長が彼等の想像をボソリと代弁した。

ググッ……

ジープが傾いた。それに合わせて鬼軍曹の頬が強張り、顔色が赤黒くなった。

「エ、エンペラー……この車って段ボールで出来てたっけ？」

「いや、軽装にカスタマイズされちゃいるが……2t近くあるハズだ」

だが、現実には大人を五人乗せた四輪駆動車が傾きはじめている。たった一人の頭の悪そうな少女が、ものすごくブサイクな顔になりつつ傾けている。そして――

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツツン！！

驚天動地。

「……………ッ！」

ダイナミックに転倒した車の中は、人体の無理な重なり合いで声もまともに出せない有様。

<おーい！ 一体、何がどうしたの！？ スゴイ音がしたけど！>
モニターからエンプレスの心配する声が。しかし、この状況で返答する余裕のある者はいない。

「なあ……どうするよ？」

タワーが室長と高齢エージェントの重みを一身に受け止めながら問う。

「とにかく、ここから出るんだ……」

「さ、賛成……」

エンペラーとプリエステスは、先を争うようにして塞がってない方の窓から脱出。そして、眼前に立つ『敵』を見据えた。

「あの時と同じ質問をもう一度しよう……貴様はダレだ？」

エンペラーは息を荒くしながら面前の敵と対峙した。

「あたしは咲鬼軍曹ッ！ 世間様からは選りすぐりのバカと呼ばれているッ！ で、遠くの方でヒイヒイしているのが茜二等兵ッ！

御近所様からは極めつけのアホと呼ばれているッ！」

自己紹介が済んだ。

「オマエ等は……我々に何か個人的な恨みでもあるのか？ それとも、PFRSに対してテロ行為を画策する愚連隊か？」

「働かざる者食うべからず！ 全ては明日を生きるため！ つまり、生活費を稼ぎにきたのであります！」

言い切った。

「確定申告はお早めに……！」

遠くの方でも二等兵が何か言ってるやがる。

「ここを何だと思ってる！ 場末の居酒屋じゃねえんだッ、覚悟しやがれ！」

転倒したジープから這い出しながら、タワーがやたらと強気にでる。彼等にとつてのホームグラウンド故、当然ではあった。

「で……この襲撃の目的は？」

エンペラーはあくまで冷静に対応する。

「そこにヘタリこんでるオツチャンちよーだい」

「ひっ……！」

咲鬼軍曹からまさかの御指名を受けて、杜若室長が小さな悲鳴をあげる。

「白昼堂々と誘拐ねえ……」

「よせッ、コイツで見ている」

ホルスターに手をかけようとしていたプリエステスを制止し、エンペラーが彼女に双眼鏡を投げ渡した。

「見ろって……何を？」

「相方の方だ」

言われて双眼鏡をのぞいてみれば、茜二等兵が長距離射撃用のライフル銃を腰だめで構えている。

「何か妙な“違和感”がしないか？」

「……違和感？」

「タイヤを撃ち抜かれた時、既に500m以上離れていた。にもかかわらず、あのライフル銃には……」

「ちよつと……スコープついてないじゃん！」

ライフルの性能上、弾丸は届くだろう。しかし“届く”のと“命中”するのではワケが違う。

「ホッ……ホホッ……どういう視力をしとるのかね!？」

「エンペラー、この状況ってよう……」

「ああ、マズいな」

エージェント達が場の空気の異常性に気づいた。この二人組は船上の時と同様に、一種の『支配領域』を形成している。精密機械の如く、いつでも正確に敵を銃殺できる環境を仕立てておきながら、もう一人が丸腰で立ち向かってくるという、特殊な状況。

（仲間の安全を考慮すれば……しかし、どうして国家調査室の役員を欲しがる？）

エンペラーの中で葛藤が生じる。不審者共の言う通りに室長を引き渡せば、任務の放棄になり、かと言って……現状の装備で勝てる相手では無い事など、百も承知。

<こちら魅月。スノードロップ総員に告ぐ。これより本部ビルにて緊急会議行つ。直ちに集合せよ>

転倒したジープの中から支配人^{オーナー}の声が届く。

「ホホッ……エンペラーよ、魅月殿の指示だ。ここは一旦引くとしよう」

「室長を捨てていくのか？」

「連中が何者であろうとPFRSからは逃げられんよ。しっかり装備を整えて出直した方が賢明だと言うとるのだ」

「『ムーン』に賛成。本土まで泳いで帰れるならともかく、ここは他のメンバーを呼んで数をそろえてからでも遅くないよ」

プリエステスにとってもこの状況はカナリ居心地が悪かった。

「ど、どうするよ、エンペラー……」

暴発しかねない程ハラハラしているタワーを見て、責任者としての義務感を感じた。

「室長殿、申し訳ありません。後ほど改めて御迎えにあがります」

ダッ——！

リーダー、駆ける。それに続いて他の三名も走り出す。小さくなつていく背中がなんだか侘びしい。

「そんな……」

あっさり放置されてしまった室長は、脱力したままエージェント達の退却を見送るしかなかった。

「任務完了オオオオオオオ！」

「ぎゃああああああッ！」

塩化ビニール製のオモチャのナイフをブンブン振り回し、楽しそうな咲鬼軍曹を前にして室長は心底絶叫する。

「あたし等正義の兵隊さん！」

「わたし等正義の兵隊さん！」

ザッザッザッ！

「国産牛と美青年おこめが大好きでー！」

「炭水化物と美少年いしむが大好きでー！」

ザッザッザッ！

「モデルと警察大嫌いー！」

「運動、児ポ法大嫌いー！」

ザンツ！

「せいいええええつ！」

「びしッ！」

脂汗で顔をテッカテカに輝かせながら、茜二等兵が到着。

「これより次の作戦を説明する。よく聞きたまえ！」

「びしッ！」

カキカキカキ……

当然のことながらモニターも黒板も無いので、画用紙を取り出して絵を描く。

「我々の護衛対象である蒼神博士は、おそらくこの巨大高層ビルに連行されたと考えられる。よって、このビルに突入！ 及び制圧する！」

とっても無邪気で抽象的な絵だ。クレヨンで描いた。

「鬼軍曹殿！ 質問宜しいでしょうか？」

「許可する！」

「敵軍から抵抗を受けた場合、どのように対処致しましょう？」

「選択肢は三つ！ 一つ、『無視』^{シカト}。二つ、『総滅』^{いたくする}。三つ、『人

質を盾にする』。臨機応変に対処せよ！」

「びしッ！」

「……………おい、『人質』って私のことか？」

室長が早速巻き込まれた。

「その通りだ中年曹長！」

階級までもらった。

「作戦の目的はあくまで蒼神博士を完璧に護衛すること！ 博士の個人的な用事が済み次第、例の海底トンネルから本土へ脱出する！

以上だ！」

「……………ちよつといいかな？」

そう言って室長が神妙な表情で茜二等兵に向き直った。

「何でありますか？」

「君は数年前……………ドコでナニをしていた？」

「大変です鬼軍曹殿ツ、ナンパの対象にされたであります！」

「ぬツ、中年曹長の分際で不謹慎な！　ちなみに、茜二等兵は年上に興味は無いから気をつけたまえ！」

「全くであります！　美少年のフェロモンを世界遺産に登録するであります！」

ワケが分かりません。

「……君は『エリジウム』と何か関係があるんじゃないのか？」

さあ答えてくれ……みたいな顔した室長を前にして、二人は困惑。何だかよく分からないんで、身振り手振りでジェスチャー会話してお口。10秒ほど協議した末……

ガンツ――

室長、ライフルのハンマーで後頭部を強打される。

「さて、早速三つ目の選択肢を実行に移すでしょう！」

「世界平和をこの手に勝ち取るであります！」

世界平和実現のため、早速犠牲者が発生している。

ズリズリズリ……

無残な有様と化した室長が二人の兵隊さんに引きずられていった。

家庭の事情と政府の内情

ゴウウウウウウン……

エレベーターが止まる。コンソールには『55階』の表示。アンスリウム博士が先にエレベーターから降りて、その後ろを蒼神博士がトボトボとついていく。彼女はフロントに立つ警備員に自分のIDを手渡し、代わりにカードキーを受け取る。

「中に入る前に一つ言っておくわ」

「……？」

彼女は自分のラボの出入口に立ち、蒼神博士に一瞥をくれる。

「棕櫚には会わせる……けど、中の様子を見ても決して取り乱さないでちょうだい」

「……どういう意味ですか？」

彼の本能が不吉な空気を感じ取る。

「では、どうぞ」

壁のコンソールにカードキーを滑らすと扉のロックが解除され、彼女はドアを押し開けた。

「……………」

中に入ろうとした蒼神博士が、怪訝な顔をして踏み止まる。彼と中に居た者の目が合って、お互い首を傾げている。その様子をアンスリウムは予想していたかのような面持ちで眺める。

「——君はダレだ？」

蒼神博士の口から述べられる第一声。そして返答——

「ぼく、棕櫚」

とても幼い声がした。

「……………！？」

蒼神博士の脳内で混乱が生じる。目の前に5、6歳くらいの男の子が立っている。全く見覚えはない。蒼神博士はもう一度尋ねた。

「君は……ダレだ？」

「棕櫚だよ」

少年はとても無垢な微笑みで質問に返答する。

「……これは何の冗談ですか？」

蒼神博士は少年の後ろに立つアンスリウムを睨みつけた。

「神の設計図バイタルズの研究はアナタと並行して私も行っていた。SPスノードロップを組織するに至ったタンパク質、『レベレーション』の汎用性に注目したわ。ホメオテイク遺伝子に直接作用して生体機能を強化する性質を持ち、適合者は常人を遥かに逸脱した免疫機能を得られた。そして、レベレーションにはもう一つ注目すべき特性があった」

「待つて……少し待つてください」

蒼神博士が瞬きを忘れてキョロキョロし始めた。顔を片手で隠し、みるみる顔色を悪くしていく。脳内で断片的な情報が飛び交い、彼の情緒をものすごい勢いで破壊した。生を受けてまだ半年も経っていない儚い命。彼の手に赤ん坊を抱いた時の感触が残酷に甦る。

「アナタは……どうしてそこまでできるんだッ!？」

彼の口から絞り出すような声が漏れる。

「科学者は好奇心に勝てないよう出来ているのよ」

彼女の返答に蒼神博士は固まった。同じ人種として身に覚えがないわけではない。

「こんなバカな……」

やりきれない辛さと人間不信とが、涙といつしよに湧き出して指の隙間から滴る。我が子は自分の身に何が起きたのか理解するハズもなく、わずか数カ月で乳幼児から快活そうな男の子に成長……

……いや、造り変えられた。

「ねえ……どうしたの？」

男の子はオロオロしながら初対面の相手に歩み寄った。子供だ……どこにでもいる普通の子供にしか見えない。

「ねえ、棕櫚……君はお母さんが好き？」

「うん、大好き」

「……そうか、よかったよ」

彼は男の子の頬に優しく手をそえて、ほんの一瞬だけ微笑んだ。

「槐ッ！ 才能を無駄にするのは科学者にとって犯罪よ……アナタなら更なる可能性を神の設計図バイタルズから引き出せる！」

「自分の息子を別の人間に造り変える才能なんかいらない」

蒼神博士は変貌を遂げてしまった息子と妻に背を向けて呟いた。

カッカッカッ……

乾いた足音をたたせて足早にラボを後にする。そうでもしないとドス黒い嫌な感情がこみあげてきて、爆発しそうになる。一児の父親が最終目的を最悪の形で達した。

「ねえ、ママ……今の人ってダレ？」

「アナタのお父さん。パパよ」

「……そうなんだ」

男の子は困ったように小さく呟いた。

ダンッ——！

「冗談ではない！ そんな作戦は容認できん！」

野暮ったい眼鏡をかけた恰幅のいいスーツ姿の男が、テーブルを叩く。

「しかし、『沈丁花』は正式な手順を踏んでおり、作戦を中止する法的根拠はありません」

それに対して、手元に大量の書類を抱えたスーツの青年が返答する。

「首相、これは間違いなく深刻な国際問題に発展しますぞッ！ PFRS本部が位置する海域は、同盟国の海域と目と鼻の先だッ！」

「確かにマスコミが大喜びするネタですね……」

テーブルを叩く中年男に対して、向かい側に座るスーツの淑女が静かに呟く。

「長官！ 軍部の愚連隊一つ管理できんですか！？」

「……御存じの通り、『沈丁花』は防衛予算に一切依存せず、ダリア准将が予算の全てを出資して管理・維持しております。言うなれば、彼女の私有物ですので……こちらもヘタに口出しできません」「バカげてる……一介の軍人が軍部をオモチャにして戦争ごっこかね！？」

「『戦争』とは大袈裟な。どこの国でも行われている秘密工作の一種ですよ」

『長官』と呼ばれた髭面のナイスミドルが苦笑する。

「しかし、准将の独断による作戦はこれが初めてというワケではありません。表沙汰になつてはいませんが、近隣諸国から内政干渉やら帝国主義やらと批判されているのは事実です」

淑女が軽く溜息をつく。

「そうですね……今回は国家調査室の言い分を真剣に検討すべきかと」

首相の傍に座る首席補佐官が淡々と述べる。

「錦木君、杜若室長から連絡はあったかね？」

『首相』と呼ばれるにはまだ若い四十前後くらいの男性が、腕組みをしながら問う。

「いえ……海底トンネルへの潜入を確認する信号を最後に途絶えています」

『錦木』と呼ばれた眼鏡の中年オヤジはテーブルを叩くのをやめ、人差し指をトントンと鳴らす。

「マズイですね。国家調査室の作戦が失敗して准将の強行策が成功してしまえば、また国際会議の場で吊るし上げをくいます」

首席補佐官が声のトーンを低くする。

「内務庁の年間予算ではアノ女に対抗はできんよ。だからこそ、調

査室には先行して摘発任務にあたらせただ。万が一、摘発に失敗してもうちを責めるのはお門違いだ」

錦木が長官を睨みつけながら言う。

「そう言われましても……防衛本庁ではダリア准将の影響力は尋常ではありません。既にマスコミには緘口令が敷かれたとの情報も入っていますし」

防衛本庁長官が申し訳なさそうな声で答えた。

「恐れ入った……話にならんナッ！」

「錦木庁長、私も沈丁花の蛮行を黙認してきたワケではありません。先程も申し上げましたが、彼女の行動はあくまで軍規に則っており――」

「だが、今回の件ばかりは軍規もクソもないな」
首相が手元の報告書に目を通してながら呟いた。

―― 沈丁花・PFRS本部占拠における詳細事項 ―

「この内容を見る限り、完璧に常軌を逸脱しているな。我が国はれっきとした法治国家であり、テロ支援国家ではない。故に准将の作戦は却下する」

「……分かりました。准将には私から議会の決定事項として伝えま
す」

そう言って防衛本庁長官は席を立った。時を同じくして――

コシダクター

「少佐、緘口令は布いたか？」

少々野太い女の声がした。

「恙無く」

カナリ低い男の声が返答する。

「では、今回の“暴拳”^{さくせん}について簡単に説明しよう」

声の主――ダリア准将は高度技術爆撃機（ATB）の貨物室の中にいた。機体は既に離陸して、高度1万mを旋回している。起立する彼女の前には、軍服を纏った十数人の男女が思い思いにざわめいている。

「よく聞いとけ、クソツタレ共！」

『コンダクター』と呼ばれた男が、准将の隣で缶ビールを呷りながら声を上げる。

「目的はPFRS本部の占拠、及び制圧。以上だ」

あつという間に説明が終わり、やたらと行儀の悪い兵隊達が口を開き出す。

「准将、『敵』は？」

「三日に一回ママと電話で談笑するようなガキ共が100名ちよい。警備もいるにはいるが、使用期限の切れたコンドーム程度の素人だ」

「じゃあ今回も楽勝っスね」

「そうでもない。『スノー・ドロップ』というSPがいる。数は22……いや、“20名”。特別な人体改造を受けた一種の強化人間だ」

「殺し方は？」

「確実に頭部か心臓を撃ち抜け。手脚に2、3発ブチ込んでも大した支障にはならん」

「そいつは愉快的連中で」

「だが、連中は血と汗と涙しか流さない程度の訓練しか受けていない。戦闘や戦略に関しては素人だ」

ダリア准将が吐き捨てるように言った。

「当然のことながら、我々沈丁花は未知の病原体から世界人類を守るといふ、崇高な目的のために動く。そうだな、少佐？」

「コンダクター」

「そのとおりです、准将！ 人類サイコー！」

男は既にホロ酔いだ。

「だが、PFRS本部内は未知のウイルスによって完全に汚染され、全職員は死亡したという“間違った情報”を元に作戦を実行にうつ

す」

「やっちまええええ——ッッッ！」

「第一に、本部ビルの防衛システムを沈黙させる。第二に、空爆によって主要施設を破壊。そして第三に、一個小隊六人編成で白兵戦だ」

「で、死んだとされる職員達から抵抗を受けた場合、どこまでやってよろしいんで？」

その質問に対して、准将は口元を歪めて不気味な笑みを浮かべた。「抵抗が有ろうが無かるうが、次々殺せ。どう殺そうと構わん。犯してから殺そうが、殺してから犯そうが各自自由だ」

「やったぜ、昼間っからパーティーだ！」

有象無象が沸き立つ。狂気にも似た空気がこの連中を支配していた。

「で、報酬の方はいかほど頂けるんで？」

数人がその質問を待ってましたとばかりにニヤつく。

「なんだ、ワタシの顔を久々に拝めたこと以外に、まだ何か欲しいのか？」

「そりゃもう、准将の相変わらず美しい御顔を視姦できて、小生のムスコはいきり立っておりますがね」

「しかしまあ、この商売はいつ現世とバイバイするか分かんのですし」

「ふむ、貴様等の意見はもつともだ。では、早い者勝ちルールでハイド、ソフト、薬物、人間全て解禁だ」

准将はそう言って手にしていたPDAを操作した。

オオオオオオオオオオオオ~~~~~！！

より一層のざわめき。男も女も等しく目を凝らして声を漏らす。各自に配られたPDAに、PFRS本部職員の顔写真が並ぶ。

「カワイイ男も交じってんじゃない　メチャメチャ楽しみッ！」

蒼神博士の顔写真を見て下品な笑みをこぼす女。

「おおっと、いいねえ〜。この眼鏡淑女は俺がもらったッ！」

アンスリウム博士の顔写真を見てモニターに舌を這わせる男。

ヒートアップする彼等からは、おおよそ軍人としての道徳や教養といったモノは感じられない。

「准将、電話です」

そう言つて少佐が無線機を准将に投げ渡した。
コンタクト

「無粋だな。ドコのガキだ？」

「女房が不細工なことでは有名なうち等の上司からです」

「ふんッ、空気の読めん男め」

小バカにするように鼻で笑つて彼女は無線機を耳にあてる。

＜ダリア准将、作戦は中止だ。これは首相からの直接命令だ＞

防衛本庁長官が冷静かつ毅然とした声で伝えた。

「“作戦中止”？ ほう……分かりませんなあ。何をおっしゃっているのか実に分かりませんなあ」

＜PFRSのもたらす世界的経済効果を考慮しての決定事項だ。先進各国において高い知名度を持つ国営企業で、派手に破壊活動をされては甚大な外交問題に発展しかねないとの判断だ＞

「下らん。監視衛星でしか戦争を知らぬガキ共など放っておけ」

＜そつもいカンのだ。内務庁は国家調査室の不手際で官僚からケツを蹴られた……大臣が短絡的な行動に出て、隣国に情報がリークされるのは時間の問題だ＞

「構わん。連合機関の公式調査が入る頃には、全て片がついている。

長官、アナタは今まで通り黙認していればよいのだよ」

＜そつか……貴様ッ、やはり神の設計図を——＞
バイタルズ
バキッ——！

准将は無線機を叩き折つた。

「宜しいンで？ 防衛本庁に逆らうということは反逆罪に値します
が」

「結構だ。政府には今一度、神の設計図バイタルズが何なのか認識させてやる」

「それはそうと、支配人・魅月には24時間の猶予を与えたと聞いてますが」

「これは『戦略』だ。デートの待ち合わせをしているワケではない」
「相変わらずイカれてますなあ」

「ああ、人間そうでなくてはいかん」

そう言つて准将と少佐は互いに口元を怪しく歪めた。一方で……

「……………クソ女がッ！」

部下から一方的に通信を切られ、怒りに震えている長官の姿。彼は官邸の一室で受話器を握りしめて、カチカチと歯を噛みならしている。

（こうなれば……）

彼は自分の携帯をスーツのポケットから取り出し、番号を押した。
<はいはい、何か？>

すぐに相手が電話に出た。年季の入った女の声だ。

「状況が変わった。想定外のタイミングだが動けるか？」

<もちろん。ただ、先程、支配人から召集の指示があったので、その後になりますけどね>

「相棒の方は？」

<支障なく>

「……よし。回収でき次第連絡を入れる。沖合に潜水艦を待機させておく」

<了解でございます>

ピッ——

長官は携帯を切つて口元に右手の指を一本押し当てて集中した。

（やはり、保険は多いに越したことはないな……）

彼は固定電話の受話器を手に取つて内線ボタンを押した。

「私だ。兵器開発局の責任者につないでくれ」

神の設計図^{バイタルス}があらゆる事象を巻き込んでいく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973z/>

考えろよ。

2012年1月13日16時49分発行